



日本リウマチ財団

# 財団設立10年の事業実績

平成9年3月

日本リウマチ財団  
財団設立10年の事業実績

平成9年3月



# 日本リウマチ財団設立十周年記念式典に 際してのご挨拶と提言

平成9年3月5日

日本リウマチ財団理事長

塩川 優一

## ご 挨 拶

日本リウマチ財団は昭和62年11月、厚生省の認可を得て発足しました。

リウマチについては、アメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国と異なり、日本では、社会はもとより医学界においても極めて認識が浅く、関心も低い現状であります。幸いにして、日本リウマチ財団発足以来、各方面のご理解とご協賛により、リウマチ制圧の事業において多大の成果を上げることが出来ました。厚くお礼を申し上げる次第であります。

厚生省においては、今までもっとも軽視されていたリウマチ研究の推進に年々多大のご尽力をいただいています。また、平成9年度より慢性関節リウマチを難病（特定疾患）対策の一環として加えて頂き、福祉の面において公的、社会的支援を得ることになりました。

さらに、平成8年9月、長年患者を中心としてリウマチ関係者一同が熱心に要望を続けて参りましたリウマチ科の標榜が認可されました。これにより、従来、専門医を訪ねて転々としていたリウマチ患者は速やかに専門医にたどり着き、安心して診療を受けることが出来るようになり、多大な恩恵を受けることになった次第です。日本リウマチ財団としては今後は、従来進めてきたリウマチ登録医制度を一層強化し、リウマチ科を標榜した医師と手を携えて、より充実したリウマチ診療を実現し、患者の期待に応えるよう尽力する所存であります。財団発足10周年に当たり、今後、日本リウマチ財団に対する、皆様の一層のご支援、ご鞭撻、ご協力を重ねてお願いし、ご挨拶と致します。

## 日本におけるリウマチ対策への提言

### A. 序言

日本リウマチ財団が発足してから10年が経過した。その間、幸にして各方面の強力なご援助、ご協賛により、リウマチ対策に多大の成果を挙げてきた。厚く感謝の意を表する次第である。

### B. リウマチの過去と現状（表1、表2）

リウマチは、原因不明、診断困難、治療法不明の難治の疾患である。中でも慢性

関節リウマチ、膠原病はとくに女性に多い疾患である。リウマチの訴えを有する患者数は著しく多く、日本全国に559万人いるとされる（人口の4.5%）。その中で慢性関節リウマチ患者数は70万人である（人口の0.6%）。そして、一旦リウマチにかかった患者は日夜苦痛が著しく、最終的に運動障害、内臓障害を呈し、家族、社会の支援を要するに至る。そのために、家庭のみならず、わが国の社会、経済における負担は多大である。

ヨーロッパ、アメリカ合衆国はじめ諸外国においても、リウマチ患者数は日本と同じく著しく多い。そして、リウマチによる家庭的、社会的負担が大ききこと、とくにリウマチが社会における労働不能のもっとも大きな原因であることより、古くからその重要性が認識され、行政、社会を挙げて強力に対策が進められてきた。

一方、日本においては、社会はもとより医学界においてさえ、リウマチに対する認識は著しく低く、そのために対策は遅れていた。日本リウマチ財団の発足により、国によるリウマチ対策が推進され、社会の認識も徐々ではあるが変化して来たことはまことに喜ばしい。この機会に、さらに一層強力なりウマチ対策の推進を要望する次第である。

## C. これからのリウマチ対策

### 1. リウマチ研究の推進

医学の進歩により、多くの疾患が克服されつつある現状において、リウマチは、原因不明、診断困難、治療法不明の、最後に取り残された難病である。世界のリウマチ学者は、この疾患の研究に向けて全力を挙げているが、わが国でも、一層の研究の推進が望まれる。とくにこの疾患は慢性に経過し、運動障害、内臓障害を伴い、社会における人的、物的資源および経済に及ぼす負担が大きい。したがって費用効果（コスト・エフェクト）の点より見ても、リウマチの予防、早期発見、早期治療が達成されることによる、社会、医療、経済、労働力に及ぼす利益は莫大なものであることは明らかである。とくに、リウマチの有効な治療法がない現状では、強力な抗リウマチ薬の研究、開発の推進が強く望まれる。

アメリカ合衆国での調査によれば、慢性関節リウマチによる国の経済的損失は1年間に87億ドルであって、アメリカのGNPの0.3%であった（1994年）。すなわち、リウマチ研究の進歩により、医療費を含む国家の経済的負担の大幅の節減が期待できるというのである。

### 2. リウマチ対策の推進

社会には、リウマチに起因する内臓障害、運動障害を持つ患者は多数存在し、慢性関節リウマチによる身体障害者のみでも日本全国に9万6千人と言われている。そして、疾患が進行するとついに寝たきりの状態となり、行政、社会による福祉、介護の支援を必要とするようになる。リウマチ対策の一層の推進が緊要であることは明らかである。

リウマチは一生続く慢性の疾患であり、診療に際しては、患者のQOL（生活の

質)の向上を目指して、毎回日常生活、社会生活についての長時間にわたる、詳細かつ綿密な指導が重要である。また、理学療法、作業療法、食事療法、心理療法など、多種類の医療がリウマチにおいては重要な役割を演じている。リウマチが、診療の内容において、他の疾患とが大きく異なっていることについてご理解頂き、医療施設の充実、医療費、医療従事者の処遇、給与などについての格別な配慮が望まれる。

今般、国の難病(特定疾患)対策の一環に慢性関節リウマチが含まれるようになり、患者に対する、福祉の支援が行われるようになったことは大きな進歩であり、大変喜ばしい。ただしこの病気においては、他の慢性疾患と異なり疾患が容易に固定せず、したがって、福祉対策においてもつねに医療と密接に連携しつつ対策を進める必要がある。

### 3. リウマチ医療体制の整備(表3、表4)

リウマチは慢性の疾患であり、従来行われているような薬物療法、外科療法などの狭義の医療のみではなく、広く多方面の医療関係者との協力による、多種類の医療手段が必要である。したがって、リウマチにおいては、他の疾患と異なる医療体系、医療施設が必要なことは明らかである。しかしわが国では、欧米諸国とは異なり、そのような点はまだまったく考慮されていないといつてよい。そこで、基準的なリウマチ診療を行い、それを全国に対して指導、普及する目的でのリウマチ・センターの設立が要望される。それとともに、全国的に病診(病院、診療所)協力による効率的なリウマチ診療体系の確立を要望する。

### 4. リウマチ教育の振興

わが国では、リウマチについての認識が極めて浅く、したがって従来、教育機関、医療施設において、リウマチに関する教育はほとんど行われていなかったといつてよい。これは、いずれの大学、病院においてもリウマチの教育が普及している欧米諸国に比べて明らかに遅れている。したがって、わが国におけるリウマチ診療の推進のためには、まず、日本全国の大学、医療機関に対し、リウマチ学講座、リウマチ診療科の設立の推進を要望する。日本リウマチ財団も、医師、医療従事者のリウマチ研修に向けて、一層の努力を進める所存である。

### 5. 国民病としてのリウマチに対する理解と認識

リウマチの訴えを持つ患者数は日本全国で559万人(4.5%)という多数であり、さらに国民の老年化により患者数はますます増加している。例えば、骨粗鬆症、変形性関節症は、これからの老人社会におけるもっとも重要なリウマチ性疾患である。リウマチは今まで無視されていた「国民病」というべきであり、国を挙げてリウマチ対策に向かって立たなければならない。したがって、日本における、現在および未来に向けてのリウマチ対策の重要性を理解し認識し、政界、財界、一般社会に向けて、リウマチに対して国民の関心を高め、理解を深める国民運動を起こす時期が来ている。

表1 リウマチに含まれている疾患（アメリカリウマチ学会）

- A、「炎症性リウマチ」—慢性関節リウマチ、骨粗鬆症、変形性関節症、その他
- B、「膠原病」—全身性エリテマトーデス、強皮症、皮膚筋炎、多発性筋炎、シェーグレン症候群、混合性結合組織病、その他
- C、その他の疾患

表2 日本および世界におけるリウマチ患者数

日本国民において、何らかの病気の訴えがあるものの数（有訴者）の総数は3,197万人（人口の26%）であり、その中で、手足の関節が痛むもの、すなわちリウマチの訴えを有するものの数は559万人（人口の4.5%）に上る（1992年、国民生活基礎調査）。また、厚生省研究班の調査によれば、日本全国の慢性関節リウマチ患者数は70万人（人口の0.6%）とされる。

なお、アメリカ合衆国における慢性関節リウマチ患者数は174万人（人口の1～2%）を占め、そのための経済的損失はGNPの0.3%に上るとされる（1994年）。

表3 リウマチの診療体系

RAの新しい医療——トータル・マネージメント（包括医療）

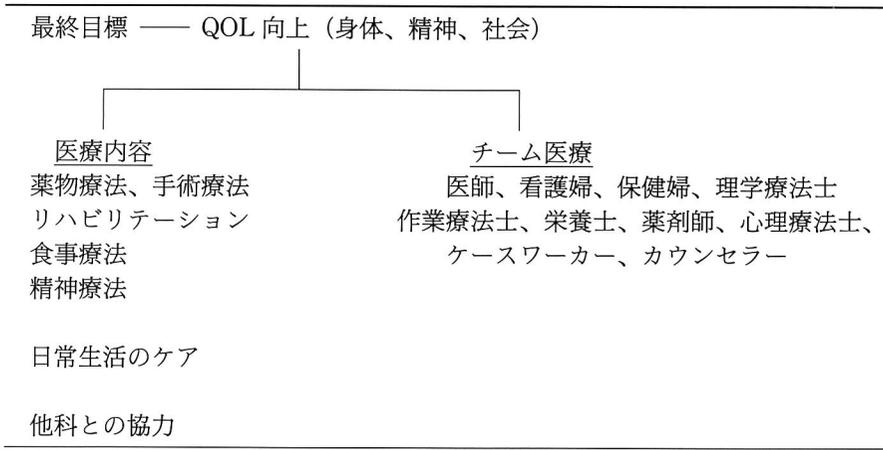
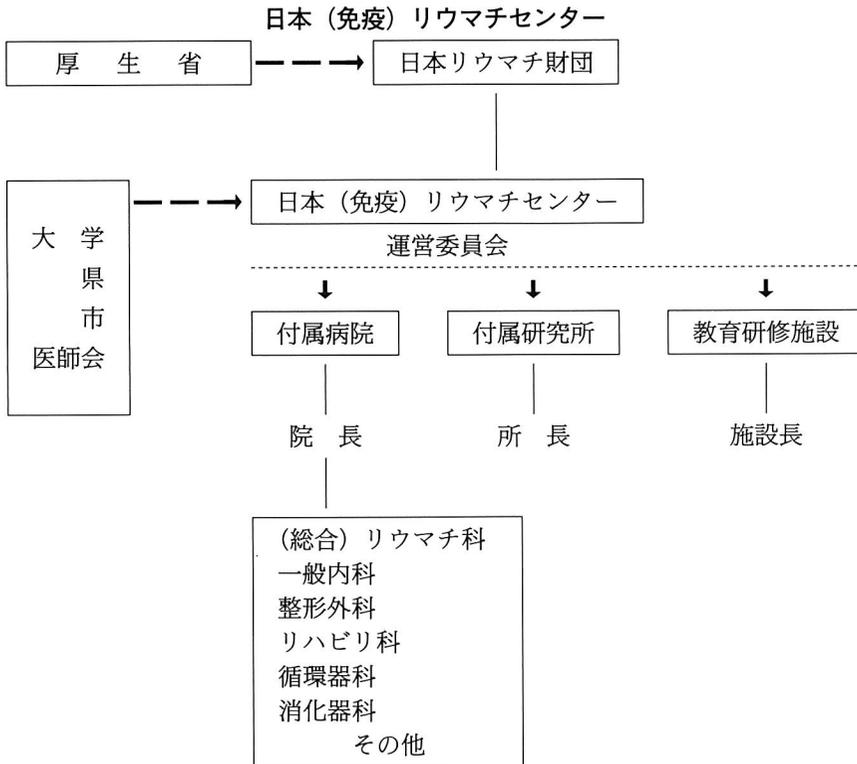


表4 リウマチセンターの構想





# 事業実績



リウマチ月間全国大会 式典



全国大会 会場風景



リウマチ研究賞の贈呈



全国大会  
石井ふく子先生の講演



全国大会 鈴木健二先生の講演



リウマチ科標榜実現（平成8年9月1日）  
早速院外標示板に追加



福祉賞の贈呈



リウマチ教育研修会



国際リウマチシンポジウム



厚生省助成事業 在宅ケア教室



国際リウマチシンポジウム

厚生省助成事業リハビリ（ケア）研修会



在宅ケア教室



リハビリ（ケア）研修会



リハビリ（ケア）研修会  
介護用具等研修



介護用具等研修

# 序

日本リウマチ財団の活動に関してはすでに御承知のとおりであるが、今般関係各位の御助力の結果、ここに設立10周年を迎えることになった。そこで、10年間の成果を事業実績として報告したい。

日本リウマチ財団は昭和62年11月1日厚生省から財団法人の認可を得て設立された。

財団の目的及び実施する事業は寄附行為に次のように定められている。

## (目的)

本財団は、我国におけるリウマチ性疾患の制圧を達成するため、リウマチ性疾患に関する調査研究を行うほか、各種事業を推進し、もって国民の健康と福祉の増進に寄与することを目的とする。

## (事業)

- (1) リウマチ性疾患の予防と治療に関する調査研究及びその助成
- (2) リウマチ性疾患の予防と治療に関する正しい知識の普及啓蒙
- (3) リウマチ性疾患に関する教育研修及び専門医の養成
- (4) リウマチ関連団体への協力援助
- (5) リウマチ性疾患に関する国際交流
- (6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業

これらの事業は、財団の事業にご賛同いただき、多大のご援助を賜っている賛助会員（法人・個人）の皆様や事業の実施に当ってご協賛いただいた多くの方々のご協力の賜物であり、心から感謝申し上げますと共に、今後とも変らぬご理解ご協力を切に望むものである。

なお、この10年で最大のトピックスは医療機関における「リウマチ科標榜」の実現（平成8年9月1日、医療法施行令の一部改正施行）である。

財団は、ここにまとめた事業とともにその目的達成のため当面二つの大きな目標を掲げてきたが、その一つであるリウマチ科標榜が実現したことは大変喜ばしい限りである。今後は残る研究、教育、治療が一体となった「リウマチセンター」の実現に向けて努力したいので皆様のご鞭撻ご協力をお願いする次第である。

平成9年3月



## 目 次

	頁
1 調査研究事業 .....	1
2 教育研修事業 .....	35
3 リウマチ登録医の登録事業 .....	74
4 普及啓発事業 .....	75
5 国際交流及び関連団体への助成事業 .....	93
6 厚生省助成事業 .....	94



# 1. 調査研究事業

## 1) リウマチ性疾患調査・研究助成（助成金各100万円）

昭和63年度（14名）

研究題目、氏名、所属の順

慢性関節リウマチにおける関節軟骨破壊機序—活性酸素による matrix metallo proteinases 活性の調節—

岡田 保典 金沢大学医療技術短期大学部衛生技術学科助教授

関節炎特に、慢性関節リウマチの発症におけるヒトパルボウイルス B-19の関与の追求

佐々木 毅 東北大学医学部助手

実験的関節炎からみた早期慢性関節リウマチの臨床病理学的並びに免疫病理学的研究

青木 重久 愛知医科大学第二病理学教授

慢性関節リウマチ関節滑膜内における免疫制御機構の解析

宮坂 信之 東京女子医科大学リウマチ痛風センター助教授

SLE 及び RA における抗熱ショック蛋白抗体の成因と臨床的意義

蓑田 清次 東京大学医学部助手

膠原病における自己抗体が認識する DNA 末端結合蛋白 (Ku 抗原) 遺伝子のクローニングとその応用に関する研究

三森 経世 慶応義塾大学医学部内科助手

リウマチ性疾患における自己抗体の分化と特異性の獲得

金井 芳之 東京大学医科学研究所助教授

重症リウマチ患者の骨髄中に見出した癌特異抗原を示す骨髄球とそのカスケードについて

越智 隆弘 大阪大学医学部助教授

II型コラーゲン結合性 T 細胞抗原受容体遺伝子のトランスジェニックマウスに於けるコラーゲン関節炎の発症

垣本 毅一 熊本大学医学部免疫医学研究施設助教授

リウマチ患者の B 細胞のガラクトース転移酵素の生化学的研究

古川 清 東京大学医科学研究所生物有機化学研究部助手

自己免疫疾患における主要病態としての多クローン性 B 細胞活性化の機序に関する研究

広畑 俊成 東京大学医学部医員

新しい漢方薬成分によるリウマチ治療薬開発の病態薬理学的研究

木村 正康 富山医科薬科大学教授

全身性エリテマトーデス (SLE) 患者 B 細胞の自己抗体産生機構の解析

山下 優毅 産業医科大学医学部免疫学教室助教授

自己反応性 T 細胞クローンを用いた HLA クラス II 抗原のリウマチ性疾患における病因的役割研究

熊谷 俊一 京都大学医学部第二内科助手

## 平成元年度 (11名)

MHC クラス II、III を中心とした遺伝要因が慢性関節リウマチの発症、免疫異常、臨床像に及ぼす影響

竹内 二士夫 東京大学医学部附属病院助手

慢性関節リウマチ発症関連遺伝子の単離と同定

竹森 利忠 国立予防衛生研究所細胞免疫部部長

慢性関節リウマチの病因の解析と骨髄移植による治療のための基礎的研究

池原 進 関西医科大学 教授

カニクイザルにおけるリウマチ性関節炎モデルの開発

藤本 浩二 社団法人予防衛生協会技師検査班長

抗 Sm 抗体および抗 UI-RNP 抗体が認識する抗原エピトープとその遺伝子に関する研究

大曾根 康夫 慶応義塾大学病院内科学教室助手

慢性関節リウマチ患者血清中に見いだされた新しい自己抗体、抗 IL-1 抗体の臨床的意義、および、その産生機序に関する研究

鈴木 博史 筑波大学臨床医学系内科講師

HTLV-I associated polyarthropathy (HAAP) の発生機序の解明

長瀧 重信 長崎大学医学部第 1 内科教授

膠原病疾患群の病像多様性を規定する背景遺伝子の研究：overlap syndrome モデルとしての MRL/lpr マウスの解析

能勢 真人 東北大学医学部助教授

全身性エリテマトーデス患者の DC5<sup>+</sup> および DC5<sup>-</sup>B 細胞による抗 DNA 抗体産生機序の差異

坂根 剛 島根医科大学医学部内科学助教授

インターロイキン (IL-1、IL-6) インヒビターとしての複合糖質に関する研究

小野崎 菊夫 名古屋市立大学薬学部教授

慢性関節リウマチの遺伝要因の分子生物学的解析

西村 泰治 九州大学生体防御医学研究所遺伝学部門助教授

## 平成 2 年度 (11名)

リウマチ性疾患における新しいサイトカインネットワークー自己抗体によるサイトカインの誘導とその病理学的意義ー

田坂 捷雄 山梨医科大学助教授

In situ hybridization による慢性関節リウマチ患者の軟骨・骨破壊に關与する metallo-proteinase 産生細胞の分布と動態

澤井 高志 東北大学医学部附属病院病理部助教授

部分的コンジェニックマウス MRL-1pr<sup>cg</sup> を用いた SLE 腎炎発症因子の解析

木村 幹男 東京大学医科学研究所感染免疫内科助手

自己免疫疾患ラット関節炎の発生機序における熱ショック蛋白の役割 (従来の BCG65KD 熱ショック蛋白の交差反応性による自己免疫説に代わる新しい仮説の証明)

※ 小橋 修 佐賀医科大学教授

リウマチ性関節炎滑液中の自己反応性 T 細胞の TCR $\gamma/\delta$  配列の解析

小谷 富男 宮崎医科大学講師

慢性関節リウマチ患者のヒトタイプ II コラーゲン反応性 T 細胞のクローニングとその生物学的機能及び抗原レセプターの解析

根来 茂 大阪大学医学部第三内科講師

慢性関節リウマチ患者末梢血単球及び滑膜組織血管内皮細胞の付着分子の解析

桧垣 恵 東京医科歯科大学難治疾患研究所免疫疾患部門講師

慢性関節リウマチの病態形成におけるインターロイキン 8 (IL-8) の意義の解析

赤星 透 北里大学医学部内科講師

微生物感染を trigger とする idiotype network 及び molecular mimicry を介する自己免疫疾患発症機序の解析

土屋 尚之 東京大学医学部内科物理療法学助手

ベーチェット病における、連鎖球菌抗原特異的  $\gamma\delta$  T 細胞レセプター陽性 T 細胞クローンの樹立と、その機能および役割

小出 純 埼玉医科大学総合医療センター講師

Clg コラーゲン部に対する自己抗体のループス腎炎における病因的意義

上床 周 東京大学保健センター助手

※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成 3 年度 (11名)

研究題目、希望審査部門、氏名、所属の順

インターロイキン (IL-1) の細胞内発現制御による滑膜細胞増殖抑制の研究—antisense oligodeoxynucleotide を用いて—

病因究明 針谷 正祥 東京女子医科大学附属リウマチ痛風センター

亜熱帯地域におけるリウマチ性疾患の疫学と病態

予防・疫学 ※ 安達 正則 琉球大学医学部地域医療研究センター助教授

関節破壊を抑制する慢性関節リウマチ治療薬に関する研究

診断・治療 田中 廣 壽 旭川医科大学内科学第二助手

慢性関節リウマチの発症におけるサイトカインとニューロペプチドの役割

病因究明 山下 優 毅 広島大学医学部教授

自己免疫疾患と主要組織適合抗原複合体遺伝子内に新たに発見された RING 遺伝子群と関連

病因究明 岸 文 雄 山口大学医学部助手

強皮症患者血清中に見いだされる抗 RNA ポリメラーゼ・クラス 3 抗体に関する研究

病因究明 岡野 裕 慶応義塾大学医学部内科助手

シェーグレン症候群 (SJS) における唾液腺内浸潤 T 細胞レセプター (TCR) のレパトア解析

病因究明 住田 孝之 千葉大学医学部第二内科研究生

抗 2 本鎖 DNA 抗体の抗原結合部位および対応する抗原の構造に関する研究

病因究明 窪田 哲 朗 東京医科歯科大学第一内科助手

Transforming Growth Factor  $\beta$  ならびに Fibroblast Growth Factor によるオステオポンチン遺伝子 (Secreted Phosphoprotein 1, Sppl) の発現制御機構の研究

病因究明 野田 政 樹 東京医科歯科大学難治疾患研究所  
機能・調節疾患研究部門 (実験薬理学) 教授

成人 T 細胞白血病ウイルスによる関節炎発症機構の解明

病因究明 岩倉 洋一郎 東京大学医科学研究所助教授

リコンビナント自己抗原を用いた自己抗原特異的免疫応答の解明—Ro/SS-A 自己抗原—抗体系を中心に—

病因究明 伊藤 保彦 日本医科大学附属第一病院小児科助手

※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成 4 年度 (11名)

全身性エリテマトーデスの母親から出生する児の転帰・予後と予防に関する研究

予防・疫学 橋本 博 史 順天堂大学医学部膠原病内科助教授

慢性関節リウマチ (RA) を誘導する抗原ペプチドの分離・同定

病因究明 ※ 西村 泰 治 熊本大学大学院医学研究科免疫識別学教授

RNA polymerase II に対する自己抗体とその臨床免疫学的意義に関する研究

病因究明 平形 道 人 慶応義塾大学医学部内科助手

汎発生強皮症の発症に関わる真皮線維芽細胞周辺プロテオグリカンの分子生物学的研究

病因究明 山 蔭 明 生 群馬大学医学部講師

Anergic T 細胞における細胞内シグナル伝達機構の解析

病因究明 山田 秀 裕 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター助手

SLE における抗 CD45 抗体の意義

病因究明 三村俊英 東京大学医学部附属病院第三内科医員

インターロイキン10のリウマチ性疾患での臨床応用に関する研究

診断・治療 石田博 和歌山赤十字病院第三内科医師

ストレス（熱ショック）蛋白質に反応する $\gamma/\delta$ 型T細胞のリウマチ性疾患における意義

病因究明 吉開泰信 名古屋大学医学部附属病態制御研究施設生体防御研究部門教授

シェーグレン症候群発症機構におけるEBウイルスの関与

病因究明 斉藤一郎 東京医科歯科大学難治疾患研究所ウイルス・免疫疾患部門講師

ヒト全身性エリテマトーデスの腎障害性陽性荷電抗DNA抗体の産生に関わるリンパ球サブセットの同定

病因究明 鈴木登 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター病因免疫部門講師

強皮症患者T細胞の接着因子を介した活性化機構の解明

病因究明 梅原久範 大阪歯科大学内科助手

※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成5年度（11名）

MCTD・SLE患者T細胞が認識する自己抗原RNP上の抗原決定基の解析

病因究明 大久保光夫 福島県立医科大学輸血部助手

SLEにおける自己免疫現象とアポトーシスについて、Fas, bcl-2抗原を用いた検討

病因究明 大迫聡美 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター助手

慢性関節リウマチ一卵性双生児の抹消リンパ球レパトワ

病因究明 上阪等 東京医科歯科大学難治疾患研究所ウイルス・免疫疾患研究部門助手

慢性関節リウマチ発症における神経ペプチドの役割

病因究明 佐野統 京都府立医科大学第一内科助手

DNA依存性プロテインキナーゼに対する自己抗体とその臨床免疫学的意義に関する研究

病因究明 諏訪昭 慶応義塾大学医学部内科助手

慢性関節リウマチに対する顎関節全置換術用人工顎関節の開発

診断・治療 ※菅原利夫 大阪大学歯学部口腔外科学第二講座助教授

川崎病の病因としての溶連菌由来スーパー抗原の検討

病因究明 武井修治 鹿児島大学医学部講師

ループス腎炎症モデルMRL/lprマウスの腎糸球体において活性化される情報伝達系の解析

病因究明 野 島 美 久 東京大学医学部附属病院第三内科助手  
強皮症組織障害性 T 細胞発現におけるウイルス感染の役割  
病因究明 無量井 泰 東北大学医学部助手  
慢性関節リウマチの異なる病変に共通して集積している T 細胞クロノタイプの解析  
病因究明 山 本 一 彦 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター助  
教授  
慢性関節リウマチにおける内在性レトロウイルスの病理学的意義  
病因究明 吉 木 敬 北海道大学教授  
※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成 6 年度 (11名)

転写因子 NFκB と慢性関節リウマチの発症機構  
病因究明 岡 本 尚 名古屋市立大学医学部分子医学研究所分子遺伝  
部門教授  
インターロイキン 4 の慢性関節リウマチに対する効果の分子的機序の解析とインターロイキン  
4 遺伝子導入のモデルマウスの確立  
病因究明 出 原 賢 治 国立遺伝学研究所人類遺伝部門助手  
強皮症線維芽細胞の各種サイトカインに対する増殖刺激反応性、コラーゲン産生能の研究  
病因究明 菊 池 かな子 東京大学附属病院分院皮膚科講師  
RA 滑膜マクロファージの多核巨細胞・破骨細胞様細胞への分化に関する研究  
病因究明 松 山 隆 美 鹿児島大学医動物学講座教授  
RF、RF 遺伝子、IL-6遺伝子導入による慢性関節リウマチモデルマウスの確立  
病因究明 江 崎 一 子 九州大学生体防御医学研究所臨床免疫学部門助手  
本邦における小児期膠原病の頻度と病態  
予防・疫学 ※ 藤 川 敏 獨協医科大学越谷病院小児科助教授  
慢性関節リウマチ治療における抗 Fas 抗体の可能性  
診断・治療 蓮 沼 智 子 聖マリアンナ医科大学内科・臨床検査医学助手  
一酸化窒素合成酵素阻害による抗リウマチ剤の開発研究  
診断・治療 丹 羽 峰 雄 徳島大学薬学部附属医薬資源教育研究センター  
教授  
慢性関節リウマチにおける接着分子 LFA-1の機能的解析  
病因究明 横 田 章 大阪大学第三内科医員  
RA 滑膜浸潤 T 細胞に特異的な細胞表面機能分子の同定  
病因究明 田 中 良 哉 産業医科大学第一内科助手  
変形性股関節症の発症要因に関する日英共同研究—CASE-CONTROL STUDY の手法を用いて—

予防・疫学 吉村典子 和歌山県立医科大学公衆衛生学教室助手  
※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成7年度（11名）

慢性関節リウマチにおけるケモカインの解析

病因究明 赤星透 北里大学医学部内科講師

慢性関節リウマチにおけるアポトーシスの意義の解明とその制御における治療の試み

診断・治療 ※江口勝美 長崎大学医学部内科学第一講座助教授

リウマチにおける軟骨組織の破壊機序の解析

病因究明 加藤和則 順天堂大学医学部免疫学助手

マウス骨髄移植モデルを用いた自己免疫疾患の病因解明と遺伝子治療の基礎的検討

病因究明 小端哲二 聖マリアンナ医科大学医学部講師

可溶性 Fas 抗原を標的とした慢性関節リウマチ治療の基礎研究

診断・治療 小林清一 北海道大学医学部内科学第二講座講師

慢性関節リウマチ（RA）における原因となる抗原の特定

病因究明 佐伯行彦 大阪大学医学部内科学第三助手

強皮症患者末梢血中 Double negative  $\alpha\beta$ T 細胞の T 細胞レセプターの解析—V $\alpha$ 24J $\alpha$ Q 陽性 T 細胞の選択的減少—

病因究明 坂本明美 千葉大学医学部第二内科研究生

シェーグレン症候群の発症におけるヒトヘルペスウイルス-6および-7の関与 The role of human herpes virus-6 and human herpes virus-7 in pathogenesis of sjögren's syndrome.

病因究明 武田昭 自治医科大学アレルギー膠原病学講師

慢性関節リウマチ患者の腸骨骨髓中に見いだされた CD57<sup>+</sup>T 細胞の臨床的意義に関する研究

診断・治療 羽生忠正 新潟大学医学部附属病院講師

軟骨細胞に対するメカニカルストレスとガスメディエーターの関係

病因究明 福田寛二 近畿大学医学部整形外科講師

グルココルチコイドの抗炎症作用機構の解明とその制御に関する研究

診断・治療 牧野雄一 旭川医科大学大学院医学研究科学生

※三浦記念リウマチ学術研究賞

## 平成8年度

11名に対し助成を予定（審査中）

## 2) 日本チバガイギー・リウマチ賞（賞金300万円）

### 平成2年度受賞者

氏名：平野俊夫 大阪大学医学部教授

研究課題：リウマチの発症機序と IL-6

**研究要旨：**慢性関節リウマチ、以下 RA と略すは、長年月かかって関節が破壊される難治性の疾患で、自己免疫疾患の一種である。RA の発症には、HLA が深く関連しており、T リンパ球による抗原特異的免疫応答が重要な役割を演じていることは明らかである。さらに、インターロイキン1 (IL-1)、IL-6、TNF、IFN $\gamma$  などのサイトカインの異常産生が関節炎局所に認められ、これらのサイトカインによって、骨の破壊、リウマチ因子などの自己抗体産生の誘導が生じると考えられる。

われわれは、インターロイキン6 (IL-6) や、その受容体遺伝子の構造を決定した。さらに、IL-6は B リンパ球が抗体産生細胞になるための必須の因子であるだけでなく、急性期蛋白の生合成や、造血幹細胞の増殖分化に重要な役割を演じていることを明らかにしてきた。また、RA 患者関節炎組織中には、IL-6の異常産生が認められることを示した。さらに、IL-6を異常に産生するトランスジェニックマウスを作製し、IL-6異常産生によって、リウマチ因子産生を伴う、高ガンマグロブリン血症が発症することを明らかにした。これらの研究を通じて、われわれは、IL-6遺伝子の異常発現を誘導する因子こそが RA の真の原因ではないかと考えるようになった。すなわち、未知のウイルスが RA 患者に感染し、このウイルス感染によって、IL-6遺伝子の異常発現が誘導される。一方、ウイルス感染を受けた細胞は、免疫応答遺伝子の支配下に T リンパ球によって、認識され、自己組織の破壊が誘導される。この T リンパ球の反応は、IL-6によって増強される。また、IL-6によりリウマチ因子が産生され、免疫複合体が形成される。これらの反応の結果、IL-1などの他のサイトカインの産生が誘導され、骨の破壊に至る。このような仮説を証明することが本研究の目的である。具体的には、IL-6遺伝子の発現を誘導する活性を指標にして、患者組織より、病因ウイルスの分離固定を行う。このように、本研究の目的は、リウマチという一見、複雑な病態を呈する疾患の真の原因を、IL-6の遺伝子の発現を誘導するウイルスであるという非常に単純な仮説を立て、この仮説ウイルスを固定し、真のリウマチの原因を明らかにすることである。

### 平成3年度受賞者

氏名：池原進 関西医科大学教授

研究課題：骨髄移植による慢性関節リウマチ治療に関する基礎的研究

**研究要旨：**最近、骨髄移植は白血病や再生不良性貧血の治療としてめざましい治療効果をあげつつある。われわれは、全身性エリテマトーデス (SLE) や慢性関節リウマチ (RA) 等の自己免疫疾患自然発症モデル動物を用いて病因を解析し、自己免疫疾患の病因は骨髄の造血幹細胞レベルの異常に起因すること、その治療法としては、骨髄移植が合目的であることを実証した。SLE における腎病変に関しては、骨髄移植により進行した腎病変も治療可能であること、その修復機転としては、正常な T 細胞の機能の回復が重要であり、T 細胞からなんらかの液性因子

が分泌され、糸球体の上皮やマクロファージが活性化され、病変が修復されることを見出した。RA に関しても、骨の変形等の骨病変は不可逆性ではあるが、パンプスの形成等の病変の修復は、T 細胞の機能回復と一致していることが判明した。一方、自己免疫マウスの骨髄（精製幹細胞でも可）を正常マウスに移植することにより、正常マウスに自己免疫疾患が誘導可能であることを発見し、自己免疫疾患幹細胞異常説を実証した。以上の事実は、将来いかなる自己免疫疾患が発症するかは、幹細胞の遺伝子レベルですでにプログラムされており、胸腺やホルモン等の環境因子は、促進因子として補助的に作用するに過ぎないことを物語っている。さらに、人で骨髄移植を成功に導くための条件を解析し、次の細胞が必要であることを見出した。すなわち、①多分化能を有する G<sub>0</sub> 期幹細胞 ②移植片対宿主反応や移植片の拒絶を抑制する細胞（やや分化した幹細胞） ③幹細胞の増殖分化に不可欠な骨髄微小環境構成細胞（間質細胞）の 3 種類である。特に、間質細胞は移植骨髄細胞の拒絶防止に重要な働きをしており、造血幹細胞と間質細胞の同時移植は、ヒトでも、HLA の障碍を越えた骨髄移植に有力な武器となり得るものと考えられる。

#### 平成 4 年度受賞者（2 名）

氏 名：西 岡 久寿樹 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター教授  
研究課題：「成人 T 細胞白血病ウイルスによる関節炎発症機構の解明」  
—慢性関節リウマチの病因解析モデル—

**研究要旨：**我々のグループは、先進国の中では日本人がもっとも感染者の多い成人 T 細胞白血病ウイルスの感染者に注目し、その感染者における増殖性滑膜炎の存在について、1989年 Lancet にその疾患概念を世界に先駆け報告した。HTLV-I は、白血病の原因ウイルスとして日沼博士らにより明らかにされた RNA ウイルスであるが、腫瘍原性を有するレトロウイルス群に分類されている。しかしながら、本ウイルスの感染者においては ATL の他、脊髄の変形疾患である頸性麻痺を伴った HTLV-I associated myelopathy (HAM) 存在の変化が明らかにされ、その後筆者等により RA 類縁の免疫系疾患と密接に関連していることが明らかにされたわけである。筆者はこのような背景をもとに、HTLV-I associated arthropathy (HAAP) という新しい疾患概念を提唱した。その後、関節固有細胞である滑膜細胞から HTLV-I に特異的なウイルス遺伝子の mRNA の発現から明らかにされた。このことによって HTLV-I 関節症 (HAAP) という新しい疾患概念という病理像から病因まで確立するにいたった。このことは病因論的にはじめて関節滑膜の増殖機序にレトロウイルスの一つである HTLV-I が関与していることを明らかにした他、生体内において HTLV-I が高率に非 T 細胞である関節滑膜に感染していることも明らかにした。現在、HTLV-I を構成している調節遺伝子が滑膜細胞の増殖分化に加わっていること、これらの一部と類似の遺伝子配列を有する遺伝子群がリウマチの発症に深く関わっていることを確認している。

氏 名：岩 倉 洋一郎 東京大学医科学研究所ウイルス感染研究部助教授  
研究課題：「成人 T 細胞白血病ウイルスによる関節炎発症機構の解明」  
—トランスジェニックマウスによる分子生物学的検討—

**研究要旨：**慢性関節リウマチの発症には、患者の免疫系の状態と共に何等かの感染が関与する場合もあると考えられているが、これまで病原体であることが証明されたものはまだない。成人 T 細胞白血病ウイルスは成人 T 細胞白血病 (ATL) の原因ウイルスであるが、最近、脊髄炎 (HAM) や、Sjogren 症候群、葡萄膜炎、関節炎など多くの疾患との関連も指摘されている。これらの疾患とこのウイルスとの関連を明らかにするために、このウイルス遺伝子を導入したトランスジェニックマウスを作製したところ、癌だけでなく、関節炎が多発することが判った。関節炎は 8 週齢頃から認められ、通常複数の関節に、肥大や伸張不全が認められた。これらの関節では、軟骨や骨の破壊と肉芽組織による置換、リンパ球、好中球の浸潤が認められた。また、血中のリウマチ因子、抗 DNA 抗体などの上昇も認められた。これらの所見はヒトの慢性関節リウマチのものとよく似ており、このウイルスがリウマチ様関節炎を引き起こす能力を持っていることが示された。ATL や HAM の患者に関節リウマチが多発するという疫学データと考え合わせると、このウイルスがヒトの慢性関節リウマチの病因のひとつになっている可能性が高い。今後このモデルを利用して関節炎発症のメカニズムを検討する予定である。また、現在関節炎のモデルとしてコラーゲン誘導関節炎やアジュバント関節炎、自己免疫マウスなどが知られているが、病態がヒトの関節リウマチと異なる部分があり必ずしも満足できるモデルとは言いがたい。このトランスジェニックマウスを疾患モデルとして利用することにより、より有効な予防治療法の開発ができるようになるものと期待している。

## 平成 5 年度

氏 名：小 池 隆 夫 北海道大学第二内科教授

研究課題：膠原病の血栓性病変と抗カルジオリピン抗体に関する研究

**研究要旨：**抗カルジオリピン抗体陽性例に、様々な血栓症、習慣流産、血小板減少が有意に多いことが知られ、抗リン脂質抗体症候群と呼ばれている。

抗カルジオリピン抗体のカルジオリピンに対する反応性は、血清糖蛋白である  $\beta_2$ -グリコプロテイン I ( $\beta_2$ -GPI) の存在下にはじめて認められる。

ヒト  $\beta_2$ -GPI の cDNA クローニングの結果、ヒト  $\beta_2$ -GPI の遺伝子は 1,035 塩基からなる open reading frame を有し、345 個のアミノ酸をコードしていた。

また、精製  $\beta_2$ -GPI と同等の活性を有する、組換え  $\beta_2$ -GPI をバキュロウイルスをベクターとする発現系を用いて発現させた。その結果、天然型と同等の活性を有する蛋白を得た。

放射線照射により、ポリスチレンプレートの表面に酸素原子を導入した固相化プレートを用いて行った実験の結果から、疎水性固相表面で酸素原子と相互作用し、構造変化した  $\beta_2$ -GPI を抗カルジオリピン抗体は直接認識していることが明らかとなった。すなわち“いわゆる抗カルジオリピン抗体”の反応が、抗原としてのカルジオリピンが存在しなくても再現することが出来た。

## 平成6年度受賞者

氏名：笹月健彦 九州大学生体防御医学研究所遺伝学部門教授  
研究課題：慢性関節リウマチの発症を規定する遺伝要因の解明

**研究要旨：**慢性関節リウマチ (RA) は、現代医学が解決を迫られている難治性の慢性疾患である。これまでに、RA は HLA クラス I の A11 およびクラス II の DR4 と強く相関することを証明したので、これを手掛りとして、RA の病因を明らかにし、これに立脚した治療法・予防法を開発することを目的とする。

HLA クラス I 分子は自己由来のペプチドと結合し、HLA クラス II 分子は外来性ペプチドと結合し、それぞれ機能的に異なった T 細胞を活性化することにより、免疫応答を惹起しかつ制御する。そこで、RA と相関する HLA-A11 および DR4 と結合する自己由来ペプチドおよび外来ペプチドを同定し、これらをそれぞれ認識する T 細胞クローンを病巣部において明らかにすることにより、RA 発症に直接関わるペプチドと T 細胞の存在を証明する。問題のペプチドのアミノ酸を一部置換することにより、T 細胞を不応答性あるいはアポトーシスへ導くことの可能性を他のシグナル伝達の修飾と共に追求し、RA 発症の治療法・予防法開発へ向けての道を拓く。

さらに HLA-A11、DR4、さらには抵抗性を規定している HLA-DR8 遺伝子を導入したトランスジェニック動物を作製し、マウスないしはラットの体を借りることにより、HLA 分子が RA 発症において果たす重要な直接的役割を解明する。

## 平成7年度受賞者

氏名：橋本博史 順天堂大学医学部膠原病内科教授  
研究課題：「全身性エリテマトーデス (SLE) の母親から出生する児の転帰・予後と治療法に関する研究」

**研究要旨：**SLE は妊娠可能年齢層の女性に好発する代表的な自己免疫疾患で、遺伝的には多因子性と考えられる。従って、SLE の母親から出生する児は必ずしも SLE を発症するわけではないが、発症にかかわる素因は児に受け継がれる。しかし、その児の長期経過における転帰と予後の実態は不明である。また、妊娠・出産に際しては、自然流産・死産、胎内発育遅延が高率にみられ、時に新生児ループスの発症を見る。これらの要因に、抗リン脂質抗体、抗 SS-A/SS-B 抗体の自己抗体の関与が示唆されているが、その治療法は未だ確立されていない。このようなリスクをもつ母親から出生する児の実態を遺伝的、免疫学的視点から明らかにするとともに、児の保全と健康維持を図る方策を研究する。

自験 SLE800 例の患者の中で妊娠・出産の既往のある患者と全後出産を予定している患者、及びこれらの児を対象とする。児は、胎児のみならず、出生後、新生児、小児、成人へと成長していく過程における転帰の実態を調査する。児の健康阻害因子について、HLA の DNA タイピング、免疫異常、各種自己抗体などを指標として検討する。

これまでの研究結果では、母親のもつ HLA クラス II 抗原 DQB1\*0601 が児の発症のリスクとなる可能性、母親のもつ抗 52kD-SS-A と抗 48kD-SS-B 抗体が新生児ループス発症のリスク

となる可能性を示唆する結果を得ている。また、多くは無症候であるが、5歳以降の児に高率に抗核抗体を認める。さらに、自然流産・死産と新生児ループスのリスクとなる自己抗体を除去する目的で、血漿交換療法を妊娠中継続して施行することにより無事出生し得た症例が集積されている。

## 平成8年度受賞者

氏名：森本幾夫 東京大学医科学研究所ウイルス疾患診療部教授

研究課題：ADA 結合蛋白 CD26の T 細胞免疫機能への役割

—その遺伝子工学的・生物学的解析—

**研究要旨：**T 細胞活性化抗原 CD26は細胞外ドメインに Dipeptidyl peptidase IV (DPP IV) 酵素活性を有し、110KD の膜糖蛋白であり、ヒト CD4 memory T 細胞に選択的に発現されている。DPP IVは N 末端から 2 番目のプロリンのペプチド結合を切る酵素である。CD26は T 細胞受容体からのシグナル伝達を補助する costimulatory 分子の一つで、T 細胞活性化にも重要である。さらに CD26は、adenosine deaminase (ADA) と直接会合し、ADA 結合蛋白である。パスツール研グループは CD26は CD4以外の HIV ウイルスの cofactor とも報告した。

このように CD26は多彩な機能を有するユニークな細胞表面分子である。本研究では遺伝子工学的・細胞生物学的解析を通じて ADA と CD26がいかなる相互作用にて T 細胞機能に関与しているかを明らかにし、さらに慢性関節リウマチ (RA) やエイズなどの免疫病の発生病機構の解明をめざす。

さて、RA ではその炎症局所部位での炎症の制御が関節破壊などの進行を防ぐために最も重要と考えられる。発症機構としては T 細胞の中でも CD4細胞が最初に引き金を引き、その次にマクロファージや白血球を滑膜に呼び寄せ、それが病気を引き起こす炎症性サイトカインを出し、最終的に骨を壊していくのである。エイズ患者では CD4細胞の減少が生じて免疫不全に陥るわけであるが、RA 患者にエイズを合併した場合関節破壊が消失したり、軽度で経過したりすることから CD4T 細胞がこの関節局所の炎症に最も重要であることが強く示唆されている。CD26陽性 T 細胞は RA 炎症部位で増加しており、また血管内皮細胞間を最も遊走しやすい T 細胞サブセットであることから炎症の中心的役割を果たしている T 細胞 population と考えられる。

上記の研究は RA 等の慢性炎症機構の解明や新しい治療薬の開発につながるのみならず、エイズなどによる免疫不全機序の解明やその治療法開発のためにも重要と思われる。

### 3) 北陸製薬・骨、関節疾患学術奨励賞 (賞金300万円)

## 平成2年度受賞者

氏名：越智隆弘 大阪大学医学部助教授

研究課題：重症慢性関節リウマチの早期診断法の確立と病態的解明

**研究要旨：**慢性関節リウマチ (RA) 患者の経過は様々であるが、10年以上の経過を調べると 3 つのタイプ (病型) に大別される。即ち、手先や足先の小さい関節の破壊のみで、通常の日常

生活を送るのに大きな支障が無い病型。膝や股関節などの大関節も破壊されるが内臓などの合併症は少なく、手術などに依って自立可能になる病型。全身のほとんど全部の関節が高度に破壊され内臓の合併症も重症で、寝たきりなどの重度の身体障害に陥る病型（ムチランス型）の3病型である。これらの3病型の各々は罹病早期から異なった特徴を示し、血液検査やX線写真の詳細な観察により早期診断が可能である。その様な病型診断に基づき、各患者の将来の経過や予後像を予知して妥当な治療方針を考え得る。

RA 病型のうち社会的にも臨床的にも大きな問題になるムチランス型の治療の突破口を掴む為に、この病態を引き起こす特異な機序について調べてきた。従来、RA の病巣はリンパ球などの慢性炎症細胞が集積する滑膜にあると言われてきたが、ムチランス型の患者では骨髄に於ける骨髄球から多形核白血球（PMN）に分化する細胞群である骨髄球系カスケードの異常が顕著であった。患者の全身の白血球を造っている腸骨骨髄には正常の骨髄球と共に、異常な細胞膜構造を持った骨髄球の一群が存在していた。正常成人の関節部の骨髄には骨髄球は存在しないのに、ムチランス型 RA の関節部骨髄中には異常な骨髄球の集積が見られた。更に、その部に集積する PMN には高い組織破壊活性が示唆される IL-1 や PMN 因子などが異常に高単位で見いだされた。骨髄における“異常な骨髄球系カスケード”が重症 RA の組織破壊を引き起こす重要な病巣である事が示唆され、この方向での研究を進めることに依って、現在の医療では治療の困難な重症 RA を克服する手がかりが得られるだろう。

### 平成3年度受賞者

氏 名：加 藤 幸 夫 大阪大学歯学部助教授  
研究課題：軟骨細胞の増殖と分化の制御

**研究要旨：**各種の関節疾患の病因には未だ不明な点が多く、治療法も確立していない。しかし将来成長因子、ホルモン、コラーゲンなどの細胞多基質高分子あるいはフィブロネクチンなどの細胞接着因子などがある種の関節疾患に対して治療薬として使用できるのではないかと期待されている。そのためには、軟骨細胞の修復能を活性化する成長因子、ホルモンおよび細胞外基成分を同定するとともに、その作用機構を理解する必要がある。また軟骨細胞の増殖・分化の制御機構の解明が望まれる。

しかし、従来の方法で、軟骨細胞を培養皿の上で平面的に培養すると、軟骨細胞は容易に脱分化して最終分化段階（肥大・石灰化期）に至らなかった。したがって、軟骨の分化を系統的に追究する実験系がなかった。これに対して、最近私たちは、軟骨細胞を遠心管内で塊状にして立体的に培養すると、軟骨培養細胞は大量の細胞外基質を産生するばかりか最終分化して基質の石灰化を誘導することを発見した。さらにこの遠心管培養系を用いて軟骨細胞の分化を制御する多数のホルモンと成長因子を同定することができた。

本系を用いた軟骨細胞の分化の研究は、関節疾患の新しい治療法を開発するための有用な情報を提供するであろう。

### 平成4年度受賞者

氏 名：土 屋 尚 之 東京大学医学部物療内科助手

## 研究課題：リウマチ性疾患の発症における感染と HLA 抗原の役割

**研究要旨：**リウマチ性疾患の病態には自己免疫が関与する。以前から、ある種の遺伝的背景を持った個体に微生物感染が引き金となって自己免疫疾患が発生する可能性が示唆されてきたが、最近、分子レベルで微生物と宿主の相互作用が解析しうようになり、いくつかの興味深い仮説が提唱されるに至った。

リウマトイド因子 (rheumatoid factor ; RF) は IgG Fc 部分に対する抗体である。RF がなぜ慢性関節リウマチに出現するかは未だに不明である。興味深いことに、ヘルペス科のウイルスは RF と極めて類似した IgG 特異性を持つ Fc 結合蛋白を持つ。我々は、単純ヘルペスウイルス、サイトメガロウイルスの Fc 結合蛋白に対するモノクローナル抗体と RF が有意に強く結合することから、RF がウイルス Fc 結合蛋白に対する抗体の抗イディオタイプ抗体として産生されうる可能性があることを示した。

強直性脊椎炎 (ankylosing spondylitis ; AS) やライター-症候群 (Reiter syndrome ; RS) は HLA-B27 と非常に強い相関を持つことで知られる疾患群である。この関連性を説明するひとつの仮説として、細菌と B27 抗原との間に共通抗原性が存在し、細菌に対する免疫反応が宿主の B27 抗原と交差反応して組織傷害を引き起こすのではないかとするものがある。近年、これらの疾患群と関連性の強い *Klebsiella*, *Shigella*, *Yersinia* などの細菌に B27 抗原とアミノ酸配列の相同性を持つ蛋白質が存在することが明らかになった。我々は一部の患者の血清中に B27 由来の合成 peptide と反応する抗体が存在すること、さらに、これらの抗体は、上記の細菌成分の相同配列を含む部分に対応する合成 peptide のうち、*Shigella* の plasmid に由来するもののみと強く交差反応することを示した。

これらのほかにも、熱ショック蛋白質、スーパー抗原など、ヒトの免疫系と相互作用する微生物の構成成分が次々と発見されており、これらを丹念に検討することがリウマチ性疾患の原因解明に寄与するものと思われる。

## 平成 5 年度受賞者

氏 名：新 名 正 由 防衛医科大学校整形外科教授

研究課題：関節破壊の病因、病態究明とその早期診断法の開発

**研究要旨：**関節疾患に共通し、かつ最も重大な病態は関節軟骨の破壊である。軟骨破壊は炎症性破壊 (外因性) と変性破壊 (内因性) に大別される。前者は炎症滑膜と関節液に破壊因子の由来があり、後者では変性軟骨の軟骨細胞自身が破壊因子を産生している。RA と OA はそれぞれの代表的疾患と考えられる。

これらの軟骨破壊機序の分子レベルでの解明には、最近、格段の進展がみられる。外因性であれ内因性であれ、軟骨破壊の促進因子はサイトカインと考えられている。IL-1、TNF $\alpha$ 、IL-6、IL-8 などの炎症性サイトカインがその候補にあげられる。なかでも IL-1 の破壊促進作用は顕著であり、我々は OA や RA 滑膜及び関節軟骨における IL-1 の局在と産生能を明らかにした。TNF $\alpha$ 、IL-6、IL-8 などの病的関節組織における産生亢進も証明されている。しかし、軟骨破壊現象における、これらの因子の役割については、なお十分な知見は得られていない。

軟骨マトリックスを破壊する直接因子は酵素である。種々のマトリックス分解酵素のなかで

も、ストロムライシン (MMP-3) はプロテオグリカンや種々のコラーゲン分解に関与することから、軟骨破壊の Key enzyme と考えられている。我々は MMP-3 の変性軟骨における局在と産生亢進及び変性との相関を明らかにしてきた。一方、酵素作用の発現は複雑な調節機構により制禦されているが、その 1 つに TIMP (メタロプロテアーゼ阻害蛋白) がある。軟骨破壊活性は、従って MMP-3 と TIMP の量比によっても調節されるが、TIMP 産生は IL-6 により亢進される可能性を示した。

一方、軟骨マトリックス成分の生化学や、代謝調節因子の研究における進歩は、関節疾患の鑑別診断や病態評価などの臨床面でも、新しい展開を可能にしつつある。関節液は、局所病変の色彩の濃い関節病態を、直接反映する試験材料として、特に秀れているが、軟骨由来成分(ケラタン硫酸、コンドロイチン硫酸、プロテオグリカン、II型コラーゲン前駆体成分など) や、主として滑膜炎に由来する成分(MMP-3、TIMP など)の関節液中濃度の測定が、RA、OA の鑑別診断、病態変化及び薬効評価に有効であるばかりか、それらの変化をある程度定量的に表現し得ることを示した。関節疾患とりわけ OA は、人口の老齢化に伴い、患者数も増加し、その医療的、社会的負担も増大してきている。OA の早期診断と病体把握の方法を確立することが、治療医学のみならず予防医学の面からも、きわめて重要で、WHO を中心とした国際協力体制の促進が期待されている。

## 平成 6 年度受賞者

氏 名：木 村 友 厚 大阪大学医学部整形外科講師  
研究課題：軟骨コラーゲンの遺伝子異常と関節軟骨破壊

**研究要旨：**関節軟骨マトリックスの主要物質は、線維成分であるコラーゲンと間質成分のプロテオグリカンであり、これらの存在が軟骨に特有の生体力学的特性を与えている。我々はこの構成成分、ことにコラーゲンに注目し、そこに遺伝子レベルでの異常があれば、関節軟骨が損傷を受けやすいのではないかと考えた。そこでこれを証明するために、まず異常のある IX 型コラーゲン  $\alpha$  鎖遺伝子を導入したトランスジェニックマウスを作製した。このマウスでは異常な IX 型コラーゲン分子が形成された結果、関節軟骨のコラーゲン細線維に微細な変化が起こっていた。さらに加齢に伴って、膝関節を中心とする荷重関節に変形性関節症変化が出現した。一方このマウスに関節炎を惹起させたり、インターロイキン 1 などのサイトカインを投与すると、正常のマウスに比べて、より高度の関節軟骨破壊が出現した。これらの結果は IX 型コラーゲンの遺伝子レベルでの異常が、まず変形性関節症の原因となりうることを示しており、さらにこのような軟骨マトリックスの遺伝的なバックグラウンドが、関節破壊刺激に対する感受性の増大に関与していると考えられた。これらの知見より、破壊の受け手である軟骨側から見た治療的アプローチも、展開してゆく必要性があると考ええる。

## 平成 7 年度受賞者

氏 名：塩 澤 俊 一 神戸大学医学部保健学科教授  
研究課題：「c-fos/AP-1 転写因子を軸にした慢性関節リウマチの新しい治療の開発」

**研究要旨：**慢性関節リウマチ (RA) の関節破壊には、関節滑膜の間葉系細胞が基本的に重要で、これらはパンヌスを構成し、RA の滑膜病変で重要な IL1、IL6、TNF $\alpha$  などのサイトカインを産生する。私どもは、関節滑膜あるいはパンヌスの一見腫瘍を思わせる強い増殖能や骨粗鬆症、すなわち骨芽細胞や破骨細胞の活性化が、間葉系細胞に発現される c-fos 遺伝子の発現を亢進させることによって実験的に再現され得ることを示した。c-fos 遺伝子発現は実際 RA 関節で亢進しており、さらに in vivo において c-fos 遺伝子の関節破壊に及ぼす影響を明確に知る目的で、二本鎖 DNA AP-1オリゴヌクレオチドをマウスの実験関節炎に投与して、c-fos 遺伝子の作用部位 (AP-1サイト) で c-fos 遺伝子作用の競合的阻害を試みたところ、AP-1部位での c-fos 遺伝子作用の阻害はマウスのコラーゲン関節炎、関節破壊を有意に抑制することを見出した。実験群と対照の間に体重差、血液・化学検査にみる副作用はなく、AP-1プロモーターによって駆動される炎症性サイトカイン、すなわち IL-1 $\beta$ 、IL-6あるいは stromelysin 等の発現が有意に抑制されたが、AP-1部位によらない MMP-2の発現は抑制されなかった。また CAT assay により、AP-1の作用は可逆的、用量依存的で、効果発現には至適のヌクレオチド長のあることが示唆された。以上より、c-fos/AP-1の作用が慢性関節炎に基本的に重要であること、また AP-1オリゴヌクレオチドの治療薬としての可能性が示唆された。

## 平成 8 年度受賞者

氏 名：広 畑 俊 成 帝京大学医学部第二内科助教授

研究課題：慢性関節リウマチの病態形成における骨髄網内系細胞の役割の解析

**研究要旨：**慢性関節リウマチ (RA) の病態形成において骨髄の異常が重要な役割を果たすことが昨今指摘されている。一方、RA においては B リンパ球の異常活性化に伴うリウマトイド因子 (RF) の産生が 1 つの特徴である。本研究においては、RA 骨髄からの網内系細胞の分化能及びこうした網内系細胞が B リンパ球の活性化・RF 産生に対して及ぼす影響を検討した。その結果、RA においては OA に比して骨髄 CD14<sub>-</sub> 細胞からの CD14<sub>+</sub> 細胞の分化能が有意に亢進しており、逆に GM-CSF に対する反応性は低下していることが明らかとなった。この傾向は骨髄 CD34<sub>+</sub> 細胞レベルでも認められた。一方、RA 骨髄由来 CD14<sub>+</sub> 細胞は、OA 骨髄由来 CD14<sub>+</sub> 細胞に比して、固相化抗 CD3抗体により誘導される T 細胞依存性の IgM<sub>-</sub> RF 産生を有意に増強した。また前者は単独で健常人 B リンパ球を活性化する能力を有しており、これには EB ウイルスが関与する可能性が示唆された。

以上より、RA においては、骨髄前駆細胞からの CD14<sub>+</sub> 細胞の分化が持続的に亢進しており、こうして産生された細胞が滑膜に継続的に移行することにより RA の炎症の慢性化に寄与している可能性が強く示唆された。さらにこうして骨髄より分化した CD14<sub>+</sub> 細胞が B リンパ球の異常活性化に伴う RF 産生を通じて関節炎の慢性化と進展に重要な役割を果たすものと考えられた。今後は、RA 骨髄に見られる異常と EB ウイルスとの関連について検討を行うことにより、RA の病因の解明の糸口が開けることが期待される。

#### 4) ツムラ・リウマチ臨床研究賞（賞金300万円）

##### 平成5年度受賞者

氏名：高崎芳成 順天堂大学内科講師

研究課題：流血中自己抗原の自己抗体産生への関与ならびにその病因・診断学的意義に関する検討

**研究要旨：**近年、分子生物学的手法を用い、自己抗原の構造および機能の詳細な解析が行われ、抗原提示が自己抗体産生の機構において重要な役割を演じていること示唆するいくつかの新知見が示された。生体内にてもし自己抗原の提示が自己抗体産生を促す契機となつていゝれば、一定量以上の抗原が自己の免疫系に暴露されることが必要と思われる。しかし、この様な自己抗原の免疫担当細胞への暴露は炎症の場における組織破壊によって起こり得ることが想定されているものの、その実体は明らかにされていない。また、リウマチ性疾患にて病因的意義が示唆されている流血中免疫複合体の形成にも流血中自己抗原が必要と思われる。しかし、免疫複合体の中核となる流血中自己抗原の存在やその供給源についても明らかにされていない。我々はこれらの問題に解析を加える目的で、全身性エリテマトーデス（SLE）患者血清中の自己抗体の対応抗原、proliferating cell nuclear antigen（PCNA）の特異的定量系を開発し、流血中抗原の量的変動と自己抗体および免疫複合体産生の関係について基礎的検討を行った。その結果、抗PCNA抗体陽性SLE患者において流血中PCNA抗原の増加に引き続き、抗PCNA抗体価が上昇し、その後血清補体価の低下と共に免疫複合体の形成と腎症の発症が認められる事が示された。これらの結果は自己免疫疾患の患者において、流血中の自己抗原が抗体産生を誘導し、その結果形成された免疫複合体が腎病変などの病態を引き起こすを示唆する所見として注目された。この流血中PCNA抗原の増加はSLEの患者で認められるPCNA陽性活性化リンパ球に由来することが示唆され、これら活性化リンパ球からの抗原放出のメカニズムが病態解明のための重要な課題と思われた。現在、その機序としてステロイド療法も関与した形での活性化免疫担当細胞のアポトーシスを中心に検討を進めている。

以上の流血中自己抗原に関する研究はリウマチ性疾患の病態に深く関与する自己抗体産生機構の解明という免疫学的意義に加え、疾患活動性の早期評価や治療効果の的確な評価への新たなアプローチを示唆する極めて高い臨床的意義を有する課題と考えられる。

##### 平成6年度受賞者

氏名：竹内二士夫 東京大学医学部物療内科助手

研究課題：自己免疫疾患のHMCを中心とした遺伝要因についての研究

**研究要旨：**PSSやSLE、RAは原因不明の難治性自己免疫疾患であるが、その発症には環境要因に加えて遺伝要因の関与が推定されている。これらの疾患について、MHCクラスII領域を中心とした遺伝要因を検討した。HLADRのDNAタイピング法、SSCP法による検討では、PSSのうちdiffuse type（DS）群や抗Sc1-70抗体陽性（a-sl）群でDRB1\*1502-DRB5\*0102のhaplotype及びDRB1\*0802の顕著な増加がみられた。DRB5\*0102とDRB1\*0802のβ1鎖のアミノ酸配列は共通して<sup>37</sup>V、<sup>67</sup>FLEDR<sup>71</sup>であり、さらに白人でPSSと相関しているDRB1\*

1101、1104とも共通していた。同部位が共通な susceptible epitope の一つと推定される。クラス III 遺伝子の検討から DS、a-SI 群では C4BQO-TNF5.5 (-) -DRB1\*1502-DRB5\*0102 と HSP9.0(-)-DRB1\*0802 が疾患感受性 haplotype となり、C4AQO は独立して limited scleroderma の遺伝要因となっていた。SLE では DRB1\*1501 が僅かだが有意に増加しており、同様の増加は韓国、台湾の SLE でも観察された。SLE の一部では DRB1\*1501 が疾患感受性 haplotype を形成し、更に白人の遺伝子欠損型ではない C4AQO が独立して日本、韓国の遺伝要因として働いていると考えられる。RA では疾患感受性遺伝子 (haplotype) として B54/59-TNF10.5(+), 5.5(-)-C4A3-C4B5-DRB1\*0405-DQw4, (HSP8.5(-))-DRB1\*0101、DRB1\*0401 が認められた。韓国でも同様の結果が得られた。これら haplotype 上の DRβ1 鎖のアミノ酸配列<sup>70</sup>QR (K) RAA<sup>74</sup> が最も強く RA に相関し、民族を越えた共通の感受性配列と考えられる。これらの結果から自己免疫疾患には、各々疾患特異的な遺伝背景が存在すると考えられる。

## 平成7年度受賞者

氏名：齋藤知行 横浜市立大学医学部整形外科講師

研究課題：「変形性膝関節症の病因の解明

—滑膜炎過程および軟骨変性におよぼす Neuropeptide の影響—

**研究要旨：**神経病理学および免疫組織化学の進歩により、末梢神経中に多くの種類の神経伝達物質の存在が確認され、脊髄後角細胞より軸索内輸送により末梢に運搬されることが明らかとなった。神経伝達物質の生物学的活性も徐々に解明され、疼痛の伝達物質とされていた substance P はリンパ球、肥満細胞、貧食細胞などの炎症担当細胞にも、その receptor をもつことが判明した。さらに末梢の機械的圧刺激により、substance P の脊髄後角細胞での産生が高まると報告されている。

内側型変形性膝関節症では、大腿骨遠位関節面や頸骨近位関節面には水平に膝関節内側に突出する骨棘を認め、また歩行時に内外反動揺性を示し、滑膜は持続的かつ反復性の機械的刺激が加わるものと考えられる。変形性膝関節症での滑膜炎は、滑膜表層細胞の摩耗した変性軟骨片の貧食によると言われているが、これまでの観察結果では、滑膜の比較的特徴的な組織所見は新生血管の増生と絨毛形成であり、表層細胞の多層化を示した症例はむしろ少なく、また滑膜組織に取り込まれた軟骨片を認めた症例はなかった。これらの知見に着目し、本研究では手術時採取した滑膜組織を用いて、免疫組織化学的に末梢神経中の Neuropeptide を染色し、神経線維の分布を観察し、さらに浸潤単核細胞のサブセット解析により炎症の質的評価を行う。また in vitro 実験で substance P 処理リンパ球の細胞表面抗原の発現様式や軟骨細胞の基質形成に与える影響を調査することにより、変形性膝関節症病因における神経伝達物質の役割を解明し、新たな薬物療法の可能性について検討する。

## 平成8年度受賞者

氏名：岩田久 名古屋大学医学部整形外科教授

## 研究課題：ハイドロキシアパタイト含有ガラス-チタン (HA-G-Ti) 複合体の人工関節 インプラントへの応用

**研究要旨：**超高齢化が進む社会状況の中で、老化の防止とともに大腿骨骨折や関節炎、関節症が大きな問題となっている今日、人工股関節置換術は全世界で1日約2000例行われているといわれる。その多くは金属材料(主に Co-Cr-Mo 合金で、最近チタン合金が用いられるようになってきた)で、骨との固定には骨セメント (PMMA) を用いるものが多く、最近ようやく生体活性をもつハイドロキシアパタイト (HA) を Ti 基材上にプラズマコートしたセメントレス人工関節が臨床に供されるようになってきた。しかし、プラズマコート (瞬時2~3万度になる) した場合、HA の組成・成分変化、Ti 基板との密着性、生体内におけるイオン溶着性などに多くの問題があり、見直しが行われている現状である。我々は、チタン合金と極めて強固に接合し、コーティング温度 (焼付温度) で HA とほとんど反応せず、かつ生体内で長期にわたって安定なガラスを研究開発し、HA の生体活性とチタン金属の材料特性を兼ね備えた新しい生体適合性傾斜機能 (コーティング層表面に行くほど HA 含有量が多くなる) 複合材料、HA-G-Ti 複合材料を作製した。表面は、化学的エッチング手法を用いた独創的な方法により、優れた生体親和性と生物活性を有し、作製されたインプラントは、動物実験により骨と直接強固に接合することが実証された。

HA-G-Ti 複合体からなる人工股関節の臨床応用を意図した実験を、生体外 (in vitro) と生体内 (in vivo) に区別して行った。HA-G-Ti 複合体はチタンの有する機械的強度を持ち、骨セメントを使用することなく直接生体骨と結合する人工関節材料であり、治験用人工関節がまもなく出来上がる。本研究において、HA-G-Ti 複合体の HA 周囲の生体硬組織との反応、および HA と培養細胞との反応を超微細形態学的に明らかにすることは HA のより安全で良好な臨床応用と、ひいてはより安全で生体活性の高い複合体の開発が期待でき、臨床整形外科学の分野ではその恩恵は計り知れない。

### 5) 福祉厚生に関する特別研究委託

#### 平成元年度

研究課題、委託者、委託事業の内容の順

クアハウスに関する基礎的研究

角 田 泰 造 女子美術大学教授

関節リウマチ患者を中心として体育学的側面からのストレッチング、運動処方、カウンセリングなどについて調査研究をし、リウマチ患者等の日常生活を楽しく有意義におくる方法、リハビリテーションの効果をたかめるための考察を行い理学療法“クアハウス”の正しい実施方法に関する基礎的研究を行う。

鹿児島県におけるリウマチ検診車の活動の現況と今後の検診システムに関する研究

松 田 剛 正 鹿児島赤十字病院

鹿児島県におけるリウマチ検診事業について結果の資料収集及び評価を行うとともにリウマ

チ検診事業の問題点を整理し今後の検診システムを策定するための研究を行う。

## 平成2年度

若年性関節リウマチ患者のサマーキャンプ活動

田 中 信 介 杏林大学医学部小児科

若年性関節リウマチ患者のサマーキャンプ活動を通じ、若年性関節リウマチ克服のための基礎的研究を行う。

リウマチ検診車による検診事業と今後の検診システムに関する研究

松 田 剛 正 鹿児島赤十字病院

リウマチ検診事業の問題点を整理し今後の検診システムを策定するための研究を行う。

## 平成3年度

若年性関節リウマチ患者のサマーキャンプ活動

田 中 信 介 杏林大学医学部小児科

若年性関節リウマチ患者のサマーキャンプ活動を通じ、若年性関節リウマチ克服のための基礎的研究を行う。

リウマチ検診車による検診事業と今後の検診システムに関する研究

松 田 剛 正 鹿児島赤十字病院

リウマチ検診事業の問題点を整理し今後の検診システムを策定するための研究を行う。

リウマチのリハビリテーションに関する研究

山 本 純 己 松山赤十字病院

リウマチのリハビリテーションについて現状と問題点を整理し、リハビリテーションの実際について普及用の資料を作成する。

## 6) 臨床的治療法の研究

### 昭和62年度

CN-100 (RA・OA)	ゼリア新薬工業	臨床第II相パイロット試験
	日本ケミファ	
SR-318 (RA)	エスエス製薬	臨床本試験
RPY-001 (RA)	ローヌ・プーラン薬品	臨床本試験
PJ-306 (RA)	ファルマシア	臨床本試験

## 昭和63年度

RPY-001 (RA)	ロース・プーラン薬品	第Ⅲ相臨床本試験
PJ-306 (RA)	ファルマシア	第Ⅲ相臨床本試験
CN-100 (RA・OA)	ゼリア新薬工業 日本ケミファ	後期第Ⅱ相臨床試験
SR-318B (RA)	エスエス製薬	後期第Ⅱ相臨床試験
TZI-41078 (RA・OA)	帝国臓器製薬	前期第Ⅱ相臨床試験

## 平成元年度

RPY-001 (RA)	ロース・プーラン薬品	第Ⅲ相臨床本試験
PJ-306 (RA)	ファルマシア	第Ⅲ相臨床本試験
CN-100 (RA・OA)	{ゼリア新薬工業 日本ケミファ	{二重盲検比較臨床試験 長期投与臨床試験
SR-318B (RA)	エスエス製薬	後期第Ⅱ相臨床試験
TZI-41078 (RA・OA)	帝国臓器製薬	前期第二相臨床試験

このほかミソプロストール サール薬品の粘膜防御効果及び治療効果の臨床研究を行った。

## 平成2年度

PJ-306 (RA)	ファルマシア	第Ⅲ相臨床本試験
CN-100 (RA・OA)	{ゼリア新薬工業 日本ケミファ	{二重盲検比較臨床試験 長期投与臨床試験
SR-318B (RA)	エスエス製薬	後期第Ⅱ相臨床試験 第三相臨床本試験 長期投与臨床試験
SR-206 (RA・OA)	エスエス製薬	第二相臨床試験
TSA-234 (OA)	武田薬品工業	初期第Ⅱ相臨床試験 用量検討試験

このほかミソプロストール サール薬品の粘膜防御効果及び治療効果の臨床研究を行った。

## 平成3年度

SR-318B (RA)	エスエス製薬	二重盲検比較試験
〃	〃	長期投与試験
SA-206 (RA・OA)	〃	用量設定試験
TSA-234 (OA)	武田薬品工業	至適用量設定試験
M-5011C (RA)	マルホ	予備試験

このほか、ミソプロストール サール薬品の粘膜防御効果及び治療効果の臨床研究を行った。

## 平成4年度

SR-318B (RA)	エスエス製薬	二重盲検比較試験
〃	〃	長期投与試験

SR-206 (RA・OA)	〃	用量設定試験
TSA-234 (OA)	武田薬品工業	至適用量設定試験
M-5011C (RA)	マルホ	予備試験

#### 平成5年度

SR-318B (RA)	エスエス製薬	長期投与試験
〃	〃	二重盲検比較試験
SU-PP (RA)	〃	用量設定試験
TSA-234 (OA)	武田薬品工業	至適用量設定試験 (II)
M-5011C (RA)	マルホ	至適用量設定試験

#### 平成6年度

SR-318B (OA)	エスエス製薬	二重盲検比較試験
SU-PP (RA)	〃	用量設定試験
TSA-234 (OA)	武田薬品工業	至適用量設定試験 (II)
M-5011C (RA・OA)	マルホ	至適用量設定試験

このほか、G-1臨床試験委員会において、日本抗体研究所のG-1 (RA) 医療用具の臨床研究を行った。

#### 平成7年度

SR-318B (OA)	エスエス製薬	二重盲検比較試験
SU-PP (RA)	〃	用量設定試験
M-5011C (RA・OA)	マルホ	至適用量設定試験II
KW-4800 (RA・OA)	協和発酵工業	予備試験

このほか、G-1臨床試験委員会において、日本抗体研究所のG-1 (RA) 医療用具の臨床研究を行った。

#### 平成8年度

M-5011C (RA・OA)	マルホ	至適用量設定試験II
KW-4800 (RA・OA)	協和発酵工業	予備試験

このほか、G-1臨床試験委員会において、日本抗体研究所のG-1 (RA) 医療用具の臨床研究を行った。

#### 7) その他の調査・研究

**調査課題：**非ステロイド抗炎症剤による消化性潰瘍に関する疫学調査

我が国における非ステロイド抗炎症剤による消化性潰瘍の実態については十分明らかにされているとは言えない状況である。非ステロイド抗炎症剤によるリウマチ治療をより安全なものにするため、問題点を調査することとし疫学調査を全国規模で内視鏡検査を導入して実施した。

#### 調査の概要

##### 1. 目的

関節炎患者を対象とし、非ステロイド抗炎症剤(NSAIDs)投与によって誘発される消化性潰瘍発現の頻度を内視鏡的に検討し、その危険(発生)因子を調査する。

## 2. 対 象

非ステロイド抗炎症剤を投与されている関節炎患者

## 3. 調査方法

関節炎患者のうち、内視鏡検査を承諾した患者に対し、患者の背景因子、関節炎診断名、過去3カ月間のNSAIDsなどの抗リウマチ剤の使用状況などを調査用紙に記載し、最後に内視鏡検査結果を調査用紙の内視鏡所見欄に添付する。

## 4. 調査項目

- (1) 患者の背景因子
- (2) 薬剤の投与状況
- (3) 内視鏡検査所見
- (4) 消化器症状の有無

## 5. 調査症例数

1059例

## 6. 参加施設

83施設

## 7. 調査期間

5ヶ月間(平成元年7月～11月)

## 8) 研究会の開催

### ア HTLV-1 関連疾患研究会

日 時 平成元年4月27日(木)

場 所 京王プラザホテル(4F 宴の間)

世 話 人 高月 清(熊本大学第二内科)

西岡久寿樹(東京女子医大リウマチ痛風センター)

丸山 征郎(鹿児島大学第三内科)

アドバイザー 塩川 優一

参 加 者 49名

### イ リウマチのケアに関する研究会

## 平成5年度

県名、代表世話人、開催日の順

大 分	延永 正(九大生医研)	平成5年12月11日(土)
宮 城	斎藤 輝信(東北労災病院)	平成6年2月19日(土)
新 潟	村澤 章(瀬波病院)	平成6年2月19日(土)
滋 賀	西岡 淳一(滋賀医大)	平成6年2月19日(土)
和歌山	生馬 敏行(湯川温泉診療所)	平成6年2月19日(土)
広 島	椎野 泰明(広島市民病院)	平成6年2月26日(土)
福 岡	近藤 正一(国立福岡中央病院)	平成6年2月26日(土)

宮崎	森田 信二 (市民の森病院)	平成6年3月13日 (日)
神奈川	入交昭一郎 (川崎病院)	平成6年3月19日 (土)

## 平成6年度

		県名、代表世話人、開催日の順
北海道	佐川 昭 (札幌山の上病院)	平成6年4月23日 (土)
大阪	小松原良雄 (大阪府立成人病センター)	平成6年6月4日 (土)
		平成7年2月4日 (土)
静岡	石原 義恕 (中伊豆温泉病院)	平成6年6月11日 (土)
鳥取	山本 吉蔵 (鳥取大)	平成6年6月25日 (土)
熊本	東野 通志 (熊本整形外科病院)	平成6年7月2日 (土)
福島	千葉 勝美 (県立リハ飯坂温泉病院)	〃
石川	村山 隆司 (金沢リハ病院)	〃
秋田	荒井三千雄 (ニコニコ苑)	平成6年7月23日 (土)
長崎	田口 厚 (長崎原爆病院)	平成6年7月30日 (土)
青森	三浦 孝雄 (弘前大医療短大)	平成6年8月20日 (土)
福井	林 正岳 (福井総合病院)	〃
福岡	近藤 正一 (国立九州医療センター)	平成6年8月27日 (土)
		平成7年2月25日 (土)
和歌山	生馬 敏行 (湯川温泉診療所)	平成6年9月10日 (土)
大分	筒井 秀樹 (大分赤十字病院)	平成6年9月17日 (土)
愛媛	山本 純己 (松山赤十字病院)	平成6年10月15日 (土)
		平成7年3月25日 (土)
愛知	長屋 郁郎 (国立名古屋病院)	平成6年11月8日 (火)
埼玉	新名 正由 (防衛医大)	平成6年11月12日 (土)
広島	椎野 泰明 (広島市民病院)	平成6年11月26日 (土)
徳島	手束 昭胤 (手束病院)	平成6年12月10日 (土)
山形	須田 昭男 (山形大)	平成7年1月21日 (土)
神奈川	岡本 連三 (横浜市立大)	平成7年1月28日 (土)
新潟	村澤 章 (県立瀬波病院)	平成7年2月25日 (土)
宮崎	木村 千仞 (市民の森病院)	平成7年3月11日 (土)

## 平成7年度

		県名、代表世話人、開催日の順
北海道	佐川 昭 (札幌山の上病院)	平成7年4月22日 (土)
和歌山	生馬 敏行 (湯川温泉診療所)	平成7年6月17日 (土)
静岡	石原 義恕 (中伊豆温泉病院)	平成7年6月24日 (土)
石川	村山 隆司 (金沢リハビリテーション病院)	平成7年7月1日 (土)
熊本	東野 通志 (熊本整形外科病院)	平成7年7月8日 (土)

鳥 取	山本 吉蔵 (鳥取大)	平成 7 年 7 月 15 日 (土)
広 島	椎野 泰明 (広島市民病院)	平成 7 年 7 月 22 日 (土)
青 森	三浦 孝雄 (弘前大学医療短大部)	平成 7 年 8 月 26 日 (土)
福 岡	近藤 正一 (国立九州医療センター)	平成 7 年 8 月 26 日 (土)
福 井	林 正岳 (福井総合病院)	平成 7 年 8 月 27 日 (日)
大 分	堀田 正一 (大分医大)	平成 7 年 9 月 30 日 (土)
宮 崎	田島 直也 (宮崎医大)	平成 7 年 10 月 21 日 (土)
埼 玉	池辺 健二 (ナトメック七里病院)	平成 7 年 10 月 28 日 (土)
愛 媛	山本 純己 (松山赤十字病院)	平成 7 年 11 月 4 日 (土)
福 島	千葉 勝実 (福島県立飯坂温泉病院)	平成 7 年 11 月 11 日 (土)
和歌山	生馬 敏行 (湯川温泉診療所)	平成 7 年 11 月 12 日 (日)
山 形	須田 昭男 (山形大)	平成 8 年 1 月 27 日 (土)
神奈川	山田 昭夫 (国立相模原病院)	〃
大 阪	前田 晃 (行岡病院)	平成 8 年 2 月 3 日 (土)
新 潟	村澤 章 (瀬波病院)	平成 8 年 2 月 23 日 (土)
福 岡	近藤 正一 (国立九州医療センター)	平成 8 年 2 月 24 日 (土)

## 平成 8 年度

	県名、代表世話人、開催日の順	
和歌山	生馬敏行 (湯川温泉診療所)	平成 8 年 6 月 9 日 (日)
鳥 取	山本 吉蔵 (鳥取大)	平成 8 年 6 月 29 日 (土)
静 岡	石原 義恕 (中伊豆温泉病院)	平成 8 年 7 月 6 日 (土)
熊 本	束野 通志 (熊本整形外科病院)	平成 8 年 7 月 27 日 (土)
福 岡	近藤 正一 (国立病院九州医療センター)	平成 8 年 8 月 24 日 (土)
福 井	林 正岳 (福井総合病院)	平成 8 年 8 月 25 日 (日)
青 森	三浦 孝雄 (弘前大学医療短大部)	平成 8 年 8 月 31 日 (土)
大 分	安田 正之 (国立別府病院)	平成 8 年 9 月 28 日 (土)
埼 玉	池辺 健二 (七里病院)	平成 8 年 12 月 14 日 (土)
神奈川	田島 規子 (北里大)	平成 9 年 1 月 18 日 (土)
宮 崎	田島 直也 (宮崎大)	平成 9 年 1 月 19 日 (日)
大 阪	小川 亮恵 (関西医大)	平成 9 年 2 月 1 日 (土)

### ウ 国際リウマチシンポジウム

(第 1 回)

日 時 平成 4 年 3 月 7 日 (土) 9 : 00 ~ 17 : 10

会 場 笹川記念会館

プログラム

(同時通訳)

講義・討議時間	演者・演題
9:00～9:30	開会の辞 塩川優一理事長 (日本リウマチ財団) 日本におけるリウマチ治療の現状 延永 正教授 (九州大学生体防御医学研究所)
9:30～10:40	慢性関節リウマチに対するメソトレキセート療法 ジョエル・M・クレマー教授 (オールバニー医科大学リウマチ科)
11:00～12:10	慢性関節リウマチにおける併用療法 ハロルド・E・ポーラス教授 (UCLA リウマチ科)
14:00～15:10	慢性関節リウマチに対する抗CD4モノクローナル抗体の応用 マーチン・E・サンダース部長 (セントコア社 免疫・リウマチ 臨床研究担当)
15:30～16:40	抗リウマチ剤開発の展望 パトリシア・Y・ラブ先生 (FDA 薬剤審査室)
16:40～17:10	総合討論 閉会の辞 延永 正委員長 (国際リウマチシンポジウム組織委員会)

(第2回)

日時 平成5年2月26日(金) 10:00～17:00

会場 社会文化会館

プログラム

(同時通訳)

10:00～10:05	開会の辞 七川勲次 日本リウマチ財団副理事長
10:05～10:50	STUDY ON THE PATHOGENESIS OF RA AND ITS THERAPEUTIC TRIALS USING COLLAGEN-INDUCED ARTHRITIS, ANIMAL MODEL OF HUMAN RA (コラーゲン誘導関節炎を用いたRAの病因研究と治療の試み) 垣本毅一郎教授 (熊本大学医学部附属免疫医学研究施設生化学部門)
10:50～11:05	質疑応答
11:05～11:50	LFA INVOLVED IN MURINE LYMPHOCYTE ACTIVATION (マウスリンパ球の活性化によるLFAについて) 奥村 康教授 (順天堂大学医学部免疫学教室)
11:50～12:05	質疑応答
13:00～14:00	THE IMMUNOTHERAPY OF RHEUMATOID ARTHRITIS —SCIENCE AND PRACTICE— (RAの免疫療法) GABRIEL S. PANAYI, M. D. (United Medical and Dental Schools of Guy's)

14：00～14：15	質疑応答
14：15～15：00	CLONAL ANALYSIS OF T-CELLS IN RHEUMATOID ARTHRITIS (RA における T 細胞とそのクロナリティー) 山本一彦講師 (東京大学医学部内科物理療法学教室)
15：00～15：15	質疑応答
15：30～16：30	MY EXPERIENCES IN RADIOGRAPHY AND DRUG THERAPY IN RA (RA の X 線所見と薬物療法) ARVI LARSEN, M. D. (Bygghalsan)
16：30～16：45	質疑応答
16：45～17：30	パネルディスカッション 七川歆次名誉教授・延永 正教授
17：30	閉会の辞 七川歆次 日本リウマチ財団副理事長

(第3回)

日 時 平成6年3月5日(土) 9：25～16：50

会 場 全社協ホール

プログラム

(同時通訳)

講演・討議時間	演 者 ・ 演 題
9：25～9：30	開会の辞 七川歆次 日本リウマチ財団副理事長
9：30～10：20	炎症と接着分子 Inflammation and adhesion molecules 宮坂昌之部長 (東京都臨床医学総合研究所免疫研究部門)
10：20～11：10	The general problem of osteoporosis and its relationship to osteoporosis in rheumatoid diseases Prof. Iain Macintyre (St. Bartholomew's Hospital Medical College)
11：10～12：00	骨粗鬆症の予防と治療 Prevention and treatment of osteoporosis 折茂 肇教授 (東京大学医学部老年病学)
12：00～12：30	質疑応答討論
13：30～14：20	変形性関節症の病因・病態研究における進歩 Etio-pathogenesis of osteoarthritis 新名正由教授 (防衛医科大学校整形外科)
14：20～15：10	ILAR guidelines for testing slow acting drugs in osteoarthritis Assoc. Prof. Michel Lequesne (L'Hopital Leopold-Bellan)

15：25～16：15	The treatment of osteoarthritis with slow acting drugs Assoc. Prof. Peter Ghosh (The University of Sydney)
16：15～16：45	質疑応答討論
16：45～16：50	閉会の辞 延永 正 国際リウマチシンポジウム組織委員長

(第4回)

東京会場

日時 平成7年3月2日(木) 10：30～18：00

会場 東京ガーデンパレス

北海道会場

日時 平成7年3月4日(土) 10：30～18：00

会場 北海道大学学術交流会館

プログラム

(同時通訳)

講演・討議時間	演者・演題
10：30～10：40	開会の辞 塩川優一 日本リウマチ財団理事長
	特別講演
10：40～11：40	難病研究体制の現状と展望 東大第一内科 黒川 清教授
	シンポジウム —RAの新しい病因と治療の展開—
13：00～13：30	1) Overview—リウマチ性疾患の病因・治療研究の進歩 聖マリアナ医大難治研センター 西岡久寿樹教授
13：30～14：10	2) 自己免疫疾患とアポトーシス 京大ウイルス研 米原 伸教授
14：10～14：50	3) レトロウイルス感染と自己免疫疾患 北大第一病理 吉木 敬教授
15：10～16：00	4) TNF $\alpha$ を標的とした慢性関節リウマチの新しいサイトカイン療法 Prof Feldmann M (Kennedy Institute, UK)
16：00～16：50	5) RAにおける予後決定遺伝子 (HLA-DRB1 gene) と治療薬剤 Prof Weyand CM (Mayo Clinic, USA)
16：50～17：30	6) RAの病因究明と治療の将来展望 Rrof Lipsky PE (UTDallas, USA)
17：30～18：00	総合討論

(第5回)

日時 平成8年2月28日(水) 13：00～18：00

29日(木) 9：00～18：30

会 場 全社協・灘尾ホール

プログラム

(同時通訳)

2月28日(水)

講演・討議時間	演 者 ・ 演 題
13:00~13:05	開会の辞 塩川優一 日本リウマチ財団理事長
RA の Basic Science	
13:05~14:05	リンパ節欠損マウスの免疫応答と自己免疫病 京都大学医化学第1 本庶 佑教授
14:05~15:05	免疫制御系の破綻による自己免疫疾患の発症 千葉大学高次機能制御研究センター 谷口 克教授
特別講演	
15:25~15:40	厚生省科学研究の現状と展望 厚生省保健医療局 松村明仁局長
15:40~16:40	慢性関節リウマチの遺伝解析 九州大学生体防御医学研究所 笹月健彦教授
16:40~17:40	サイトカインと免疫病 大阪大学内科学第3 岸本忠三教授
17:40~18:00	総合討論

2月29日(木)

講演・討議時間	演 者 ・ 演 題
RA の新しい治療戦略	
9:00~10:00	リウマチ発症におけるB細胞の役割 テキサス大学ダラス校免疫学 Lipsky, PE 教授
10:00~11:00	リンパ球機能分子による免疫制御 順天堂大学免疫学 奥村 康教授
11:00~12:00	関節破壊の機構とその制御 神戸大学保健学科 塩澤俊一教授
Current Topics of Rheumatology, Immunology	
13:00~14:00	全身性エリテマトーデスの病因—新しい展開— フレードリッヒ・アレクサンダー大学 Kalden JR 教授
14:00~15:00	ヒトレトロウイルスと自己免疫疾患 クリーブランド・クリニック Calabrese LH 教授
15:30~16:30	自己免疫疾患とアポトーシス アラバマ大学臨床免疫 Gay S 教授
16:30~17:30	血管炎の新しい病因モデル 北海道大学病理学第1 吉木 敬教授
総合討論	

17：30～18：30	慢性関節リウマチの遺伝子治療戦略 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター Modulator：西岡久寿樹教授
18：30～	閉会の辞 安倍 達 日本リウマチ学会幹事長

(第6回)

(日本リウマチ財団設立10周年記念事業)

日 時 平成9年3月5日(水) 9：00～20：00 (含10周年記念式典)

6日(木) 9：00～17：50

会 場 日本海運倶楽部

プログラム

(同時通訳)

3月5日(水)

I Basic Science Symposium I

9：00～9：10	開会の辞
9：10～9：40	リウマチ学研究の展開—最新の知見から学ぶ— チューリッヒ大学リウマチ学 S. Gay 教授
9：40～10：20	滑膜細胞学 UCSD リウマチ科 G. S. Firestein 教授
10：20～11：00	Fas/Fas リガンド系自己免疫疾患 京都大学ウイルス研究所 米原 伸教授
11：00～11：40	シェーグレン症候群の病因とペプチド療法の展開 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター 住田孝之助教授
12：40～13：20	SLE の新しい病因論 スクリプス研究所免疫学 A. Theofilopoulos 教授
13：20～14：00	IL-1レセプターアンタゴニスト コロラド大学リウマチ学 W. P. Arend 教授
14：00～14：40	変形性関節症の新しいモデル 大阪大学整形外科 木村友厚先生
14：40～15：00	総合討論

II 日本リウマチ財団10周年記念式典

記念講演

15：00～15：20	リウマチ対策の現状と展望 厚生省保健医療局 小林秀資局長
15：20～16：00	21世紀の医療医科学の展望 自治医科大学 高久史磨学長
16：00～17：00	最新のリウマチ学と免疫学の進歩 ハーバード大学ダナファーバー研究所 S. F. Schlossman 教授

記念式典

17：15～	塩川優一理事長挨拶 来賓祝辞 感謝状贈呈
18：00～	記念パーティ

3月6日（木）

III 最新のリウマチ治療

9：00～9：40	新しい抗炎症剤—Cox-2インヒビター テキサス大学ダラス校メディカルセンター P. E. Lipsky 教授
9：40～10：20	抗 TNFa 抗体によるリウマチ治療長期成績 エアランゲン大学 J. R. Kalden 教授
10：20～11：00	リウマチ治療におけるアポトーシス誘導 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター 西岡久寿樹教授
11：00～11：40	リウマチにおける IL-6 レセプターアンタゴニスト 大阪大学第三内科 岸本忠三教授

IV 特別講演

11：40～12：20	米国リウマチ学会誌の編集理念 Arthritis & Rheumatism 編集長 W. P. Arend 教授
-------------	---

V 臨床セミナー

13：00～13：40 (3 F・303号室)	慢性関節リウマチのマネジメント（薬物治療） 東京女子医科大学 柏崎禎夫教授
13：40～14：20 (3 F・303号室)	慢性関節リウマチの画像診断 名古屋市立大学整形外科 松井宣夫教授
13：00～13：40	リウマチ患者における外科的療法 シューテスクリニック B. R. Simmen 教授
13：40～14：20	慢性関節リウマチの total management 日本医科大学リウマチ科 吉野楨一教授

VI リウマチ学におけるホットスポット（3 F・303号室）

14：45～15：15	血管炎症候群 北海道大学病理学 吉木 敬教授
-------------	---------------------------

15：15～15：45	SLE とアポトーシス	エアランゲン大学 J. R. Kalden 教授
15：45～16：15	自己免疫疾患における新しい動物モデル	東京大学医科学研究所 岩倉洋一郎教授

#### VII ワークショップ：RA の病因における新たな展開

14：45～15：15	滑膜細胞	神戸大学保健学科 塩沢俊一教授
15：15～15：45	T 細胞	九州大学生体防御医学研究所 山本一彦教授
15：45～16：15	骨髄細胞	大阪大学整形外科 越智隆弘教授
16：15～16：45	B 細胞	テキサス大学ダラスメディカルセンター P. E. Lipsky 教授

#### VIII 自由討論

16：45～17：45	全参加者・講演者
17：45～	閉会の辞

エ 薬効検定委員会シンポジウムの開催

日 時 平成5年3月27日(土) 午後0時50分～6時30分

28日(日) 午前9時～午後4時

会 場 全社協ホール

次 第

3月27日(土)

12:50～13:00 開会の辞 東 威 薬効検定委員長

I. RAの長期的薬効評価法

13:00～15:50

1. X線写真評価法

1) MRIにおける関節病変の評価

高野恵雄 柳川 明 聖マリアンナ医大 難治研

2) 手指関節病変進行のX線写真による評価

林 恭史 向井英一 東京都リハビリテーション病院

3) X線写真読影値の変動

市川陽一 篠沢妙子\* 聖マリアンナ医大難治研、\*永寿病院内科

4) RA患者に対する薬物療法のX線学的評価と臨床評価

宗圓 聰 近畿大 整形外科

5) 抗リウマチ剤の骨軟骨破壊抑制効果(X線学的評価からの検討)

藤森十郎 吉野慎一 日本医大 リウマチ科

6) Evaluation of radiologic progression in rheumatoid arthritis.

John T. Sharp, Tifton Medical Clinic

7) 討議

16:05～18:30

2. 免疫学的評価法

1) Pathogenesis of rheumatoid arthritis ; Recent insight.

Nathan J. Zvaifler, Dept. Medicine, UCSD

2) 抗リウマチ剤の作用機序: In vitroの薬理作用

松原 司 神戸大 整形外科

3) 疾患モデルのイムノモニタリング

安倍千之 聖マリアンナ医大 難治研

4) 長期臨床成績からみた各指標のモニタリング

内田詔爾 都立墨東病院 リウマチ科

5) RAのイムノモニタリングの問題点

西間木友衛 福島医大 第2内科

6) RAのイムノモニタリングの可能性

後藤 真 都立大塚病院 リウマチ膠原病科

7) 討議

3月28日(日)

9:00~11:15

### 3. RA の QOL

#### 1) QOL の概念

小松原良雄 大阪府立成人病センター 整形外科

#### 2) RA 疾患の長期予後

浅井富明、長屋郁郎、坪井声示 国立名古屋病院 整形外科

#### 3) Outcome assessment in patients with rheumatoid arthritis.

Robert F. Meenan, Boston Univ. School of Medicine

#### 4) RA 患者の QOL 評価の現状

村田紀和 国立大阪南病院 整形外科

#### 5) RA 治療薬の薬効評価における QOL

川合眞一 聖マリアンナ医大 難治研

#### 6) RA 患者の QOL 評価法と将来展望

星 恵子 聖マリアンナ医大 難治研 (厚生省 QOL 班)

#### 7) 討議

### II. GCP 解説

11:30~12:30

GCP の実施について

久保田晴久 厚生省薬務局新医薬品課

### III. 変形性膝関節症における薬効評価

13:30~15:50

#### 1) Immunopathogenesis of osteoarthritis ; Therapeutic opportunities.

Hugo E. Jasin, Univ. Arkansas for Medical Sciences

#### 2) OA の関節障害パラメーター

新名正由 防衛医大 整形外科

#### 3) 臨床的評価 (日整会变形性膝関節症治療判定基準)

岡本連三 横浜市大 整形外科

#### 4) 変形性膝関節症の X 線学的評価法

井上 一 岡山大 整形外科

#### 5) OA における臨床試験の実際

小松原良雄 大阪府立成人病センター 整形外科

#### 6) 討議

15:50~16:00 閉会の辞 東 威

## 2. 教育研修事業

### 1) リウマチ教育研修会

リウマチに関する専門家を講師とする研修会を実施した。

#### 昭和62年度

##### (ア) 山口地区教育研修会

日 時：昭和62年11月15日（日）

会 場：山口大学学生会館

世 話 人：河合伸也教授(山口大学・整形外科)

楠川禮造教授(山口大学・第2内科)

麻上千鳥教授(山口大学・皮膚科)

##### (イ) 福島地区教育研修会

日 時：昭和62年11月22日（日）

会 場：福島市市民会館

世 話 人：松本 淳教授(福島県立医科大学・整形外科)

粕川禮司教授(福島県立医科大学・第2内科)

##### (ウ) 愛知地区教育研修会

日 時：昭和63年2月28日（日）

会 場：名古屋市中小企業振興会館

世 話 人：丹羽滋郎教授(愛知医科大学・整形外科)

青木重久教授(愛知医科大学・病理)

#### 昭和63年度

##### (ア) 第14回中央教育研修会

日 時：昭和63年7月30日（土）・31日（日）

会 場：日本消防会館

世 話 人：水島 裕教授(聖マリアンナ医科大学第1内科)

受 講 者：453人

##### (イ) 宮城地区教育研修会

日 時：昭和63年6月5日（日）

会 場：仙台市民会館

世 話 人：岡崎太郎(広南病院・リウマチ膠原病内科)

太平信廣(東北労災病院・整形外科)

斉藤輝信(東北労災病院・リウマチ膠原病内科)

受 講 者：218人

##### (ウ) 佐賀地区教育研修会

日 時：昭和63年6月26日（日）

会 場：佐賀県医師会メディカルセンター

世 話 人：忽那龍雄助教授(佐賀医科大学・整形外科)

受 講 者：164人

(ニ) 岡山地区教育研修会

日 時：昭和63年10月2日（日）

会 場：岡山衛生会館

世 話 人：太田善介教授(岡山大学・第3内科)

受 講 者：214人

(ホ) 秋田地区教育研修会

日 時：昭和63年10月30日（日）

会 場：秋田ビューホテル

世 話 人：荒井三千雄教授(秋田大学医学部・整形外科)

受 講 者：175人

(カ) 鳥取地区教育研修会

日 時：昭和63年12月11日（日）

会 場：米子国際ホテル

世 話 人：山本吉蔵教授(鳥取大学医学部・整形外科)

受 講 者：145人

(キ) 栃木地区教育研修会

日 時：平成1年1月15日（日）

会 場：チサンホテル宇都宮

世 話 人：星野 孝教授(獨協医科大学・整形外科)

狩野庄吾教授(自治医科大学・アレルギー膠原病科)

受 講 者：122人

(ク) 北九州地区教育研修会

日 時：平成1年2月5日（日）

会 場：産業医科大学ラマツィーニホール

世 話 人：鈴木勝己教授(産業医科大学・整形外科)

工藤澄哉教授(産業医科大学・第一内科)

受 講 者：177人

## 平成元年度

(ア) 第15回中央教育研修会

日 時：平成元年7月29日（土）30日（日）

会 場：神戸国際会議場

世 話 人：広畑和志教授(神戸大学・整形外科)

単 位 数：15単位

受 講 者：378名(登録医188名、一般医190名)

(イ) 東京地区教育研修会

日 時：平成元年5月24日（水）13：00～18：00

会 場：安田生命ホール

世 話 人：東 威教授(聖マリアンナ医科大学・内科)

渡辺言夫教授(杏林大学・小児科)

受講単位数：4.5単位

受講者：197名(登録医103名、一般医94名)

(ウ) 新潟地区教育研修会

日時：平成元年8月27日(日) 9:15~16:15

会場：東映ホテル

世話人：田島達也名誉教授(新潟大学・整形外科)

荒川正昭教授(新潟大学・第二内科)

村沢 章部長(新潟県立瀬波病院・リウマチセンター)

受講単位数：5.5単位

受講者：180名(登録医24名、一般医156名)

(エ) 広島地区教育研修会

日時：平成元年9月10日(日) 9:30~16:10

会場：広島県医師会館

世話人：生田義和教授(広島大学・整形外科)

受講単位数：5.5単位

受講者：276名(登録医22名、一般医254名)

(オ) 岩手地区教育研修会

日時：平成元年10月1日(日) 9:15~16:10

会場：岩手県医師会館

世話人：阿部正隆教授(岩手医科大学・整形外科)

受講単位数：5.5単位

受講者：101名(登録医11名、一般医90名)

(カ) 京都地区教育研修会

日時：平成元年10月15日(日) 9:30~16:50

会場：京都府医師会館

世話人：山室隆夫教授(京都大学・整形外科)

近藤元治教授(京都府立医科大学・内科)

単位数：6単位

受講者：90名(登録医38名、一般医52名)

(キ) 神奈川地区教育研修会

日時：平成元年11月5日(日) 9:20~16:45

会場：ホテルニューグランド

世話人：腰野富久教授(横浜市立大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：119名(登録医60名、一般医59名)

(ク) 山梨地区教育研修会

日時：平成2年3月4日(日) 9:20~16:35

会場：甲府富士屋ホテル

世話人：赤松功也教授(山梨医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：87名(登録医13名、一般医74名)

## 平成2年度

- (ア) 第16回中央教育研修会  
日 時：平成2年7月28日（土）29（日）  
会 場：日本教育会館  
世 話 人：安倍 達教授（埼玉医大総合医療センター）  
渡辺言夫教授（杏林大学）  
単 位 数：14単位  
受 講 者：287名（登録医173名、一般医114名）
- (イ) 長崎地区教育研修会  
日 時：平成2年7月22日（日）9：30～16：30  
会 場：長崎県医師会館  
世 話 人：岩崎勝郎教授（長崎大学医学部・整形外科）  
単 位 数：5.5単位  
受 講 者：145名（登録医18名、一般医127名）
- (ウ) 長野地区教育研修会  
日 時：平成2年9月2日（日）9：30～17：35  
会 場：松本市中央公民館  
世 話 人：寺山和雄教授（信州大学・整形外科）  
単 位 数：6.5単位  
受 講 者：139名（登録医33名、一般医106名）
- (エ) 徳島地区教育研修会  
日 時：平成2年10月14日（日）9：30～16：50  
会 場：AWA KANKO HOTEL  
世 話 人：井形高明教授（徳島大学・整形外科）  
単 位 数：6単位  
受 講 者：119名（登録医16名、一般医103名）
- (オ) 和歌山地区教育研修会  
日 時：平成2年10月28日（日）9：00～16：45  
会 場：和歌山市民会館  
世 話 人：玉置哲也教授（和歌山県立医科大学・整形外科）  
単 位 数：6単位  
受 講 者：61名（登録医24名、一般医37名）
- (カ) 石川地区教育研修会  
日 時：平成2年11月18日（日）9：10～16：30  
会 場：金沢シティモンドホテル  
世 話 人：紺田 進教授（金沢医科大学・血液免疫内科）  
単 位 数：6単位  
受 講 者：95名（登録医37名、一般医58名）
- (キ) 岐阜地区教育研修会  
日 時：平成2年12月2日（日）9：30～16：40

会 場：岐阜グランドホテル  
世 話 人：松永隆信教授(岐阜大学・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：113名(登録医66名、一般医47名)

(ク) 宮崎地区教育研修会

日 時：平成3年1月20日(日) 8:45~17:15  
会 場：宮崎県医師会館  
世 話 人：木村千仞 市民の森病院リウマチセンター所長(前宮崎医科大学教授)  
単 位 数：7単位  
受 講 者：113名(登録医33名、一般医80名)

### 平成3年度

(ア) 第17回中央教育研修会

日 時：平成3年7月27日(土) 9:00~18:00  
28日(日) 9:00~15:50

会 場：名古屋国際会議場  
世 話 人：長屋郁郎副院長(国立名古屋病院)  
松井宣夫教授(名古屋市立大学)  
単 位 数：13単位  
受 講 者：334名(登録医266名、一般医68名)

(イ) 山形地区教育研修会

日 時：平成3年6月16日(日) 8:45~17:15  
会 場：山形大学医学部大講堂  
世 話 人：渡辺好博教授(山形大学・整形外科)  
単 位 数：7単位  
受 講 者：77名(登録医21名、一般医56名)

(ウ) 鹿児島地区教育研修会

日 時：平成3年9月1日(日) 9:00~16:50  
会 場：鹿児島歴史資料センター 黎明館  
世 話 人：酒匂 崇教授(鹿児島大学医学部・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：158名(登録医64名、一般医94名)

(エ) 千葉地区教育研修会

日 時：平成3年9月15日(日) 9:15~16:40  
会 場：千葉県医療センター  
世 話 人：守屋秀繁教授(千葉大学医学部・整形外科)  
近藤洋一郎教授(千葉大学医学部第二病理学)  
富岡玖夫教授(東邦大学佐倉病院内科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：98名(登録医67名、一般医31名)

(オ) 静岡地区教育研修会

日 時：平成3年10月27日（日）9：00～17：00

会 場：日興会館

世 話 人：橋本 明院長（国立伊東温泉病院）

単 位 数：6.5単位

受 講 者：85名（登録医59名、一般医26名）

(カ) 島根地区教育研修会

日 時：平成3年10月27日（日）9：00～17：30

会 場：松江東急イン

世 話 人：恒松徳五郎教授（島根医科大学・第3内科）

山本吉蔵教授（鳥取大学医学部・整形外科）

単 位 数：7単位

受 講 者：89名（登録医32名、一般医57名）

(キ) 高知地区教育研修会

日 時：平成4年1月19日（日）8：50～15：45

会 場：サンピア高知

世 話 人：山本博司教授（高知医科大学・整形外科）

田中稔正院長（田中整形外科病院）

単 位 数：6単位

受 講 者：100名（登録医31名、一般医69名）

## 平成4年度

(ク) 第18回中央教育研修会

日 時：平成4年7月25日（土）9：00～18：00

26日（日）9：00～15：40

会 場：新都市ホール

世 話 人：東 威教授（聖マリアンナ医科大学東横病院・内科）

腰野富久教授（横浜市立大学・整形外科）

単 位 数：13単位

受 講 者：237名（登録医168名、一般医69名）

(ク) 富山地区教育研修会

日 時：平成4年6月7日（日）8：45～16：25

会 場：富山医科薬科大学大講義室

世 話 人：小泉富美朝教授（富山医科薬科大学教授・第二病理）

辻 陽雄教授（富山医科薬科大学教授・整形外科）

単 位 数：6単位

受 講 者：110名（登録医28名、一般医82名）

(ク) 青森地区教育研修会

日 時：平成4年7月19日（日）8：45～17：05

会 場：青森県教育会館

世 話 人：小坂志郎先生（青森リウマチセンター）

原田征行教授（弘前大学・整形外科）

吉田 豊教授(弘前大学・第一内科)

単位数：7単位

受講者：60名(登録医8名、一般医52名)

(エ) 熊本地区教育研修会

日時：平成4年10月25日(日) 9:00~17:20

会場：熊本県立劇場

世話人：高木克公教授(熊本大学医学部・整形外科)

単位数：6.5単位

受講者：131名(登録医85名、一般医46名)

(オ) 群馬地区教育研修会

日時：平成4年11月8日(日) 9:15~16:35

会場：サンピア高崎

世話人：宇田川英一教授(群馬大学・整形外科)

磯 武信部長(前橋赤十字病院・整形外科)

単位数：6単位

受講者：47名(登録医38名、一般医9名)

(カ) 沖縄地区教育研修会

日時：平成4年11月15日(日) 9:30~16:35

会場：沖縄コンベンションセンター

世話人：茨木邦夫(琉球大学医学部・整形外科)

単位数：6単位

受講者：84名(登録医5名、一般医79名)

(キ) 姫路地区教育研修会

日時：平成4年11月29日(日) 9:15~17:10

会場：姫路市商工会議所

世話人：広畑和志名誉教授(神戸大学)

松原 司講師(神戸大学・整形外科)

石川 斉教授(神戸大学医療技術短期大学部理学療法学)

単位数：6.5単位

受講者：102名(登録医60名、一般医42名)

(ク) 大分地区教育研修会

日時：平成5年1月31日(日) 9:15~17:00

会場：大分県医師会館

世話人：延永 正教授(九州大学生体防御医学研究所)

鳥巢岳彦助教(大分医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：124名(登録医40名、一般医84名)

## 平成5年度

(フ) 第19回中央教育研修会

日時：平成5年7月24日(土) 9:10~18:00

25日（日）9：00～17：00

会 場：大阪商工会議所  
世 話 人：小川亮恵教授(関西医科大学・整形外科)  
単 位 数：14単位  
受 講 者：282名(登録医178名、一般医104名)

(イ) 山口地区教育研修会

日 時：平成5年4月25日（日）9：25～16：50  
会 場：山口南総合センター  
世 話 人：河合伸也教授(山口大学医学部・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：142名(登録医22名、一般医120名)

(ウ) 埼玉地区教育研修会

日 時：平成5年10月3日（日）9：45～16：55  
会 場：大宮ソニックシティ  
世 話 人：安倍 達教授(埼玉医科大学総合医療センター第2内科)  
東 博彦教授(埼玉医科大学・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：149名(登録医110名、一般医39名)

(エ) 北海道地区教育研修会

日 時：平成5年10月24日（日）9：00～17：10  
会 場：北海道大学医学部第5講堂  
世 話 人：金田清志教授(北海道大学医学部・整形外科)  
単 位 数：6.5単位  
受 講 者：91名(登録医30名、一般医61名)

(オ) 三重地区教育研修会

日 時：平成5年11月14日（日）9：00～16：30  
会 場：四日市都ホテル  
世 話 人：荻原義郎教授(三重大学・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：128名(登録医48名、一般医80名)

(カ) 香川地区教育研修会

日 時：平成5年11月28日（日）9：00～16：50  
会 場：マツノイパレス  
世 話 人：乗松尋道教授(香川医科大学・整形外科)  
単 位 数：6単位  
受 講 者：144名(登録医59名、一般医85名)

(キ) 福井地区教育研修会

日 時：平成5年12月19日（日）9：00～16：40  
会 場：ユアーズホテルフクイ  
世 話 人：中村 徹教授(福井医科大学・第一内科)  
井村慎一教授(福井医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：62名(登録医27名、一般医35名)

## 平成6年度

### (ア) 第20回中央教育研修会

日時：平成6年7月30日(土) 9:00~17:20

31日(日) 9:00~17:00

会場：サンケイホール

世話人：渡辺言夫教授(杏林大学小児科)

勝呂 徹助教授(東邦大学・整形外科)

単位数：14単位

受講者：288名(登録医201名、一般医87名)

### (イ) 宮城地区教育研修会

日時：平成6年6月5日(日) 9:00~16:40

会場：良陵会館

世話人：桜井 實教授(東北大学医学部・整形外科)

単位数：6単位

受講者：133名(登録医45名、一般医88名)

### (ウ) 愛知地区教育研修会

日時：平成6年7月3日(日) 9:15~16:30

会場：愛知県婦人文化会館

世話人：松井宣夫教授(名古屋市立大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：201名(登録医132名、一般医69名)

### (エ) 福岡地区教育研修会

日時：平成6年7月10日(日) 9:00~16:30

会場：都久志会館

世話人：杉岡洋一教授(九州大学医学部・整形外科)

単位数：6単位

受講者：245名(登録医122名、一般医123名)

### (オ) 栃木地区教育研修会

日時：平成6年10月2日(日) 9:20~16:35

会場：関東チサンホテル宇都宮

世話人：狩野庄吾教授(自治医科大学・アレルギー・膠原病科)

早乙女紘一教授(獨協医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：88名(登録医60名、一般医28名)

### (カ) 岡山地区教育研修会

日時：平成6年11月13日(日) 9:00~16:50

会場：岡山県総合福祉会館

世話人：太田善介教授(岡山大学・第三内科)

井上 一教授(岡山大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：187名(登録医89名、一般医98名)

(キ) 愛媛地区教育研修会

日時：平成6年12月4日(日) 9:20~16:30

会場：愛媛県民文化会館

世話人：柴田大法教授(愛媛大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：174名(登録医51名、一般医123名)

平成7年度

(ク) 第21回中央教育研修会

日時：平成7年7月22日(土) 9:00~18:00

23日(日) 9:00~17:00

会場：名古屋国際会議場

世話人：松井宣夫教育研修委員長・名古屋市立大学整形外科教授

単位数：14単位

受講者：359名(登録医202名、一般医157名)

(イ) 福島地区教育研修会

日時：平成7年7月2日(日) 9:00~16:40

会場：福島ビューホテル

世話人：粕川禮司教授(福島県立医科大学・第二内科)

菊地臣一教授(福島県立医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：107名(登録医44名、一般医63名)

(ウ) 滋賀地区教育研修会

日時：平成7年7月9日(日) 9:15~16:30

会場：滋賀県立長寿社会福祉センター

世話人：福田真輔教授(滋賀医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：125名(登録医75名、一般医50名)

(エ) 新潟地区教育研修会

日時：平成7年7月30日(日) 9:00~16:35

会場：有壬記念館(新潟大学医学部)

世話人：荒川正昭教授(新潟大学・第二内科)

高橋栄明教授(新潟大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：104名(登録医26名、一般医78名)

(オ) 鳥取地区教育研修会

日時：平成7年9月24日(日) 9:15~16:25

会場：鳥取県立県民文化会館

世 話 人：山本吉蔵教授(鳥取大学・整形外科)

単 位 数：6 単位

受 講 者：70名(登録医25名、一般医45名)

(㉞) 佐賀地区教育研修会

日 時：平成7年10月8日(日) 9:00~16:30

会 場：佐賀県医師会メディカルセンター

世 話 人：忽那龍雄助教授(佐賀医科大学・整形外科)

単 位 数：6 単位

受 講 者：172名(登録医101名、一般医71名)

(㉟) 山梨地区教育研修会

日 時：平成7年11月19日(日) 9:20~16:30

会 場：甲府富士屋ホテル

世 話 人：赤松功也教授(山梨医科大学・整形外科)

単 位 数：6 単位

受 講 者：132名(登録医74名、一般医58名)

## 平成8年度

(㊱) 第22回中央教育研修会

日 時：平成8年7月27日(土) 9:00~17:20

28日(日) 9:00~17:40

会 場：科学技術館

世 話 人：柏崎禎夫教授(東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター)

伊藤達夫教授(東京女子医科大学・整形外科)

単 位 数：14単位

受 講 者：345名(登録医163名、一般医157名)

(㊲) 茨城地区教育研修会

日 時：平成8年7月7日(日) 9:15~17:50

会 場：つくば研究支援センター

世 話 人：柏木平八郎教授(筑波大学臨床医学系内科)

単 位 数：7 単位

受 講 者：126名(登録医59名、一般医67名)

(㊳) 徳島地区教育研修会

日 時：平成8年7月7日(日) 9:15~16:20

会 場：阿波観光ホテル

世 話 人：井形高明教授(徳島大学・整形外科)

単 位 数：6 単位

受 講 者：88名(登録医37名、一般医51名)

(㊴) 京都地区教育研修会

日 時：平成8年7月14日(日) 9:10~16:40

会 場：京都府立医科大学

世 話 人：平澤泰介教授(京都府立医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：263名(登録医192名、一般医71名)

(オ) 岩手地区教育研修会

日時：平成8年10月6日(日) 9:10~16:10

会場：岩手県医師会館

世話人：阿部正隆教授(岩手医科大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：76名(登録医23名、一般医53名)

(カ) 長崎地区教育研修会

日時：平成8年10月27日(日) 9:00~16:35

会場：長崎大学医学部記念講堂

世話人：長瀧重信教授(長崎大学・第一内科)

単位数：6単位

受講者：119名(登録医43名、一般医76名)

(キ) 石川地区教育研修会

日時：平成8年11月10日(日) 8:45~16:00

会場：金沢市文化ホール

世話人：富田勝郎教授(金沢大学・整形外科)

単位数：6単位

受講者：117名(登録医44名、一般医73名)

## 2) 研修単位認定

財団主催以外の教育研修会についても一定条件のもとに審査の上、単位の認定を行った。

昭和62年度 10件

〃 63 〃 104 〃

平成元 〃 134 〃

〃 2 〃 124 〃

〃 3 〃 132 〃

〃 4 〃 135 〃

〃 5 〃 146 〃

〃 6 〃 140 〃

〃 7 〃 175 〃

〃 8 〃 157 〃 (平成8年12月まで)

## 3) 短波放送

放送：日本短波放送

日時：毎週火曜日 午後9時15分~30分

企画：日本リウマチ財団

提供：ファイザー製薬㈱

番組：リウマチ講座

放送期間：平成2年6月5日~平成6年5月31日

『リウマチ講座』開講にあたってーリウマチの現状と将来ー

塩川 優一 日本リウマチ財団理事長

リウマチ性疾患の分類と病態

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

リウマチの早期症状

山本 純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

関節の診かた

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

どういうときにリウマチを疑うか

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

RA の初期滑膜病変から骨破壊まで

青木 重久 愛知医科大学第二病理学教授

リウマチの免疫異常

広瀬 俊一 順天堂大学膠原病内科教授

リウマチの一般検査

吉野谷 定美 東京大学検査部講師

リウマチの画像診断

石川 斉 神戸大学医療技術短期大学部理学療法科教授

リウマチの関節外症状

柏崎 禎夫 東京女子医科大学リウマチ・痛風センター所長

リウマチの診断ー診断基準についてー

恒松 徳五郎 島根医科大学第三内科教授

リウマチ病変の成り立ち

柏崎 禎夫 東京女子医科大学リウマチ・痛風センター所長

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

リウマチの薬物治療①ー抗炎症剤 (NSAID)ー

斎藤 輝信 東北労災病院リウマチ膠原病科部長

リウマチの薬物治療②ー抗リウマチ剤 (DMARD)ー

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

治療薬の使い方

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

リウマチの外科治療①ー総論ー

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

リウマチの外科治療②—上肢・下肢—

小川 亮恵 関西医科大学整形外科教授

リウマチの外科治療③—脊椎—

辻 陽雄 富山医科薬科大学整形外科教授

リウマチ手術のタイミング

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

リウマチのリハビリテーション

村沢 章 新潟県立瀬波病院リウマチセンター整形外科部長

若年性関節リウマチの病型と診断

渡辺 言夫 杏林大学小児科教授

最近のリウマチ熱

藤川 敏 獨協医科大学越谷病院小児科助教授

川崎病と突然死

大國 真彦 日本大学板橋病院小児科教授

小児リウマチ性疾患

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

渡辺 言夫 杏林大学小児科教授

全身性エリテマトーデスの臨床症状と診断基準

横張 龍一 国立熱海病院院長

ループス腎炎の病態と治療

市川 陽一 慶応義塾大学内科講師

中枢神経ループスの病態と治療

広畑 俊成 東京大学物療内科

抗リン脂質抗体症候群

小池 隆夫 千葉大学第二内科

抗核抗体の読み方

東條 毅 慶応義塾大学内科講師

強直性脊椎炎の診断と治療

小松原 良雄 大阪府立成人病センター整形外科部長

リウマチ性炎症と Enthesopathy

西岡 淳一 滋賀医科大学整形外科助教授

血性反応陰性の脊椎関節疾患

- 安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授  
松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授
- リウマチ性多発筋痛症  
亀井 邦孝 名古屋市立大学整形外科
- 頸肩腕症候群の診断と治療  
木村千俣 前・宮崎医科大学整形外科教授
- 全身性硬化症の診断と治療  
近藤 啓文 北里大学内科助教授
- 多発性筋炎と皮膚筋炎  
斉藤 栄造 東邦大学大橋病院第四内科講師
- 混合性結合組織病の特徴と診断  
粕川 禮司 福島県立医科大学第二内科教授
- シェーグレン症候群の診断  
有森 茂 東海大学第四内科教授
- 血管炎症候群の診断と治療  
長澤 俊彦 杏林大学第一内科教授
- 痛風の診断と治療  
中村 徹 福井医科大学第一内科
- 骨粗鬆症とリウマチ  
山本 吉藏 鳥取大学整形外科教授
- 変形性関節症  
腰野 富久 横浜市立大学整形外科教授
- 成人発症ステル病  
山口 雅也 佐賀医科大学内科教授
- ベーチェット病  
橋本 喬史 帝京大学第二内科・一般教育教授
- レトロウイルス感染と関節炎  
西岡 久寿樹 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター教授
- 感染性関節炎  
鳥巢 岳彦 大分医科大学整形外科助教授
- リウマトイド因子と免疫複合体  
吉野谷 定美 東京大学検査部講師
- リウマチ薬物療法最新の話①—NSAID's とステロイド—  
東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

リウマチ薬物療法最新の話②—DMARD's—

谷本 潔 昭 東京大学物療内科講師

リウマチ薬物療法最新の話③—免疫抑制剤—

竹内 勤 埼玉医科大学総合医療センター第二内科講師

リウマチ治療の組み立て

柏崎 禎 夫 東京女子医科大学リウマチ痛風センター所長

長屋 郁 郎 国立名古屋病院第一整形外科部長

七川 敏 次 滋賀医科大学名誉教授

第35回日本リウマチ学会総会の話

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

Q & A ①—金治療中に起きる呼吸困難—

猪熊 茂 子 東京都立駒込病院内科 アレルギー膠原病科医長

症例検討①—提示—

松井 宣 夫 名古屋市立大学整形外科教授

症例検討①—解説—

松井 宣 夫 名古屋市立大学整形外科教授

リウマチと骨折

井上 哲 郎 浜松医科大学整形外科教授

Q & A ②—リウマチ患者が妊娠した時—

東條 毅 慶応義塾大学内科講師

症例検討②—提示—

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

症例検討②—解説—

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

リウマチと胃潰瘍

斎藤 輝 信 東北労炎病院リウマチ膠原病科部長

膠原病とレイノー現象

鈴木 輝 彦 埼玉医科大学第二内科助教授

Q & A ③—SLE の病態とステロイド療法—

橋本 博 史 順天堂大学内科助教授

症例検討③—提示—

渡辺 言 夫 杏林大学小児科教授

症例検討③—解説—

渡辺 言 夫 杏林大学小児科教授

早期リウマチの診断

廣畑和志 神戸大学整形外科教授

Q & A ④—HLA とリウマチ—

竹内二士夫 東京大学物療内科

症例検討④—提示—

柏崎禎夫 東京女子医科大学リウマチ痛風センター所長

症例検討④—解説—

柏崎禎夫 東京女子医科大学リウマチ痛風センター所長

悪性関節リウマチの血漿交換療法

松本美富士 名古屋市立大学輸血部助教授

Q & A ⑤—側頭動脈炎とリウマチ性多発筋痛症—

西岡淳一 滋賀医科大学整形外科助教授

症例検討⑤—提示—

延永正 九州大学生体防御医学研究所臨床部門臨床免疫学部門教授

症例検討⑤—解説—

延永正 九州大学生体防御医学研究所臨床部門臨床免疫学部門教授

リウマチ性疾患の剖検記録から①

青木重久 愛知医科大学第二病理学教授

リウマチ性疾患の剖検記録から②

青木重久 愛知医科大学第二病理学教授

Q & A ⑥—成人と小児のリウマチは同じか—

田中信介 杏林大学小児科

症例検討⑥—提示—

山本純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

症例検討⑥—解説—

山本純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

リウマチとアミロイドーシス

太田善介 岡山大学第三内科教授

Q & A ⑦—肘の再建術—

工藤洋 国立相模原病院副院長

症例検討⑦—提示—RA の診断

安倍達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

症例検討⑦—解説—RA の診断

安倍達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

リウマチと QOL

本 間 光 夫 日本リウマチ学会幹事長

Q & A ⑧—リウマチと動物のモデル—

京 極 方 久 東北大学第一病理学教授

関節炎とサイトカイン

新 名 正 由 防衛医科大学整形外科助教授

Q & A ⑨—小児リウマチと眼障害—

藤 川 敏 独協医科大学越谷病院小児科助教授

リウマチ治療薬と DDS

水 島 裕 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター所長

症例検討⑧—提示—悪性関節リウマチ

井 上 哲 文 東京大学物療内科講師

症例検討⑧—解説—悪性関節リウマチ

井 上 哲 文 東京大学物療内科講師

Q & A ⑩—リウマチの皮下結節—

入 交 昭一郎 川崎市立川崎病院副院長

偽性痛風

加 藤 隆 名古屋市立大学整形外科講師

症例検討⑨—提示—全身性エリテマトーデス

橋 本 博 史 順天堂大学内科助教授

症例検討⑨—解説—全身性エリテマトーデス

橋 本 博 史 順天堂大学内科助教授

リウマチ手術とインフォームドコンセント

内 田 詔 爾 東京都立墨東病院リウマチ科医長

Q & A ⑪—リウマチの人工関節の合併症—

種 田 陽 一 名古屋市立大学整形外科講師

新生児ループス

渡 辺 言 夫 杏林大学小児科教授

症例検討⑩—提示—滑膜切除

小 川 亮 恵 関西医科大学整形外科教授

症例検討⑩—解説—滑膜切除

小 川 亮 恵 関西医科大学整形外科教授

関節疾患の超音波診断の進歩

田 中 清 介 近畿大学整形外科教授

Q & A ⑫—リウマチのプール療法—

橋本 明 国立伊東温泉病院院長

人工関節の予後を決める因子

吉野 楨一 日本医科大学リウマチ科教授

膠原病の接着分子

狩野 庄吾 自治医科大学アレルギー膠原学教授

QOLをめざして

山本 純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

島田 廣子 日本リウマチ友の会理事長

第36回日本リウマチ学会総会の話題

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

日本のリウマチ診療、過去・現在・未来

柏崎 禎夫 東京女子医科大学膠原病・リウマチ・痛風センター教授

診断へのアプローチ(1) 関節痛① 単関節痛の患者を診たとき

井上 和彦 東京女子医科大学膠原病・リウマチ・痛風センター助教授

診断へのアプローチ(2) 関節痛② 多関節痛の患者を診たとき

橋本 博史 順天堂大学膠原病内科助教授

検査成績からのアプローチ(1) リウマイト因子陽性のとき

吉野谷 定美 東京大学検査部講師

第36回リウマチ学会総会を顧みて

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

診断へのアプローチ(3) 全身症状（発熱、体重減少、疲労感など）

柏崎 禎夫 東京女子医科大学膠原病・リウマチ・痛風センター教授

診断へのアプローチ(4) 朝のこわばり

橋本 博史 順天堂大学膠原病内科助教授

診断へのアプローチ(5) 筋肉痛、筋力低下

井上 和彦 東京女子医科大学膠原病・リウマチ・痛風センター助教授

検査成績からのアプローチ(2) リウマチ性疾患における一般検査

吉野谷 定美 東京大学検査部講師

治療のしかた(1) リウマチ治療の戦略と戦術—内科—

水島 裕 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センターセンター長

治療のしかた(2) リウマチ治療の戦略と戦術—外科—

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

診察のしかた(1) 皮膚の診かた

植木 宏文 川崎医科大学皮膚科教授

診断へのアプローチ(6) レイノー現象

近藤 啓文 北里大学内科助教授

検査成績からのアプローチ(3) 急性期炎症性反応物質

小林 成人 順天堂大学膠原病内科

治療のしかた(3) 早期関節リウマチの治療指針

延永 正 九州大学生体防御医学研究所臨床免疫学教授

治療のしかた(4) 進行性関節リウマチの治療指針① アクティブな関節リウマチ

東 威 聖マリアンナ医科大学第一内科教授

治療のしかた(5) 進行性関節リウマチの治療指針② MRA

藤 治言 自衛隊中央病院第一・第二内科部長

治療のしかた(6) 晩期関節リウマチの治療指針

橋本 明 国立伊東温泉病院院長

診察のしかた(2) 血管の診かた

多田 祐輔 山梨医科大学第二外科教授

診断へのアプローチ(7) 皮膚病変（紅斑、皮膚硬化、皮膚潰瘍など）

西岡 清 東京医科歯科大学皮膚科教授

診断へのアプローチ(8) リンパ節、脾腫

井上 哲文 東京大学物療内科講師

検査成績からのアプローチ(4) 免疫検査① 蛋白分画、定量（免疫グロブリン、補体など）

戸叶 嘉明 順天堂大学膠原病内科

検査成績からのアプローチ(5) 免疫検査② 自己抗体（リウマトイド因子以外の）

東條 毅 国立東京第二病院内科医長

治療のしかた(7) 骨粗鬆症の治療

林 泰史 東京都リハビリテーション病院副院長

診察のしかた(3) 筋肉の診かた

斉藤 栄造 東邦大学第四内科助教授

診断へのアプローチ(9) 頸痛、肩こり

三井 弘 三井記念病院整形外科科長

治療のしかた(8) OAの薬物療法

田中 清介 近畿大学整形外科教授

検査成績からのアプローチ(6) 関節液

秋月 正史 慶応義塾大学内科

治療のしかた(9) OAのリハビリテーションと装具

村澤 章 新潟県立瀬波病院整形外科部長

診断へのアプローチ(10)頭痛と視力障害

岡田 純 北里大学内科助教

治療のしかた(10) OA の手術療法

腰野 富久 横浜市立大学整形外科教授

新年にあたって

塩川 優一 日本リウマチ財団理事長

検査成績からのアプローチ(7) X線① 関節

工藤 洋 国立相模原病院副院長

治療のしかた(11) NSAID の選び方、使い方

菅原 幸子 東京女子医科大学整形外科教授

診察のしかた(4) 関節① 上肢の関節

山本 龍二 昭和大学整形外科教授

治療のしかた(12) DMARD の選び方、使い方

内田 詔爾 東京都立墨東病院リウマチ科医長

診察のしかた(5) 関節② 下肢の関節

吉野 楨一 日本医科大学リウマチ科教授

診断へのアプローチ(11) 腰痛

大井 淑雄 自治医科大学整形外科教授

検査成績からのアプローチ(8) X線② 脊椎

辻本 正記 大阪労災病院リウマチ部長

診察のしかた(6) 脊椎

伊藤 達雄 東京女子医科大学整形外科教授

診察のしかた(7) 目、口、鼻

宮脇 昌二 倉敷成人病センター膠原病センター所長

診断へのアプローチ(12) 四肢のしびれ、麻痺

広畑 俊成 帝京大学第二内科講師

検査成績からのアプローチ(9) X線③ 関節、脊椎を除く胸部、腹部、その他

猪熊 茂子 東京都立駒込病院内科医長

治療のしかた(13) ステロイド剤の選び方、使い方

市川 陽一 聖マリアンナ医科大学内科・臨床検査医学教授

第37回リウマチ学会総会にあたって

長屋 郁郎 日本リウマチ学会会長

診断へのアプローチ(13) 浮腫

中林 公正 杏林大学第一内科助教授

検査成績からのアプローチ(10) 骨、関節のMRI、CT

光本 光一 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター講師

治療のしかた(14) 免疫抑制剤の選び方、使い方

狩野 庄吾 自治医科大学膠原病学教授

診断へのアプローチ(14) 乾燥症状、口内炎などの口腔内粘膜症状

橋本 嘉 東京大学物療内科

検査成績からのアプローチ(11) 生検

能勢 真人 東北大学第一病理学助教授

治療のしかた(15) 手術のタイミング① 関節

山本 純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

治療のしかた(16) 手術のタイミング② 脊椎

福田 眞輔 滋賀医科大学整形外科教授

診断へのアプローチ(15) 慢性関節リウマチ

安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授

診断へのアプローチ(16) シェーグレン症候群

松岡 康夫 川崎市立川崎病院内科部長

診断へのアプローチ(17) 全身性エリテマトーデス

横張 龍一 国立熱海病院院長

診断へのアプローチ(18) 強皮症

諸井 泰興 伊東温泉病院副院長

診断へのアプローチ(19) 皮膚筋炎、多発性筋炎

三森 経世 慶応義塾大学内科

このシリーズのはじめに

柏崎 禎夫 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター教授

症例からの診断と治療(1) 呼吸器病変をともなう慢性関節リウマチ①—症例提示—

猪熊 茂子 東京都立駒込病院アレルギー膠原病科医長

(ききて) 平松 和子 東京都立駒込病院内科

症例からの診断と治療(2) 呼吸器病変をともなう慢性関節リウマチ②—診断と治療—

猪熊 茂子 東京都立駒込病院アレルギー膠原病科医長

(ききて) 宮國 友治 東京都立駒込病院内科

症例からの診断と治療(3) 腎病変をともなう慢性関節リウマチ①—症例提示—

中林 公正 杏林大学第一内科教授

(ききて) 斎藤 元章 杏林大学第一内科

症例からの診断と治療(4) 腎病変をともなう慢性関節リウマチ②—診断と治療—

中林 公正 杏林大学第一内科教授

- (ききて) 斎藤 元章 杏林大学第一内科
- 症例からの診断と治療(5) 消化器病変をともなう慢性関節リウマチ①—症例提示—  
斎藤 輝信 東北労災病院リウマチ膠原病科部長  
(ききて) 大崎 博史 東北労災病院リウマチ膠原病科
- 症例からの診断と治療(6) 消化器病変をともなう慢性関節リウマチ②—診断と治療—  
斎藤 輝信 東北労災病院リウマチ膠原病科部長  
(ききて) 大崎 博史 東北労災病院リウマチ膠原病科
- 症例からの診断と治療(7) 血管炎をともなう慢性関節リウマチ①—症例提示—  
竹内 勤 埼玉医科大学総合医療センター第二内科助教授  
(ききて) 細野 治 埼玉医科大学総合医療センター第二内科
- 症例からの診断と治療(8) 血管炎をともなう慢性関節リウマチ②—診断と治療—  
竹内 勤 埼玉医科大学総合医療センター第二内科助教授  
(ききて) 細野 治 埼玉医科大学総合医療センター第二内科
- 症例からの診断と治療(9) アミロイドーシスをともなう慢性関節リウマチ①—症例提示—  
井上 哲文 東京大学物療内科講師  
(ききて) 篠原 聡 東京大学物療内科
- 症例からの診断と治療(10) アミロイドーシスをともなう慢性関節リウマチ②—診断と治療—  
井上 哲文 東京大学物療内科講師  
(ききて) 篠原 聡 東京大学物療内科
- 症例からの診断と治療(11) 変形性関節症(1) 上肢①—症例提示—  
龍 順之助 日本大学整形外科助教授  
(ききて) 梅村 元子 日本大学整形外科
- 症例からの診断と治療(12) 変形性関節症(1) 上肢②—診断と治療—  
龍 順之助 日本大学整形外科助教授  
(ききて) 梅村 元子 日本大学整形外科
- 症例からの診断と治療(13) 変形性関節症(2) 下肢①—症例提示—  
松原 司 神戸大学整形外科  
(ききて) 加東 武 神戸大学整形外科
- 症例からの診断と治療(14) 変形性関節症(2) 下肢②—診断と治療—  
松原 司 神戸大学整形外科  
(ききて) 加東 武 神戸大学整形外科
- 症例からの診断と治療(15) 変形性脊椎症(1) 頸椎①—症例提示—  
伊藤 達雄 東京女子医科大学整形外科教授  
(ききて) 加藤 義治 東京女子医科大学整形外科助教授
- 症例からの診断と治療(16) 変形性脊椎症(1) 頸椎②—診断と治療—  
伊藤 達雄 東京女子医科大学整形外科教授

- (ききて) 加藤 義治 東京女子医科大学整形外科助教授
- 症例からの診断と治療(17) 変形性脊椎症(2) 腰椎①—症例提示—  
腰野 富久 横浜市立大学整形外科教授  
(ききて) 中村 勝子 横浜市立大学整形外科
- 症例からの診断と治療(18) 変形性脊椎症(2) 腰椎②—診断と治療—  
腰野 富久 横浜市立大学整形外科教授  
(ききて) 中村 勝子 横浜市立大学整形外科
- 症例からの診断と治療(19) 痛風①—症例提示—  
赤岡 家雄 帝京大学第二内科教授  
(ききて) 藤森 新 帝京大学第二内科助教授
- 症例からの診断と治療(20) 痛風②—診断と治療—  
赤岡 家雄 帝京大学第二内科教授  
(ききて) 藤森 新 帝京大学第二内科助教授
- 症例からの診断と治療(21) 偽痛風①—症例提示—  
石川 浩一郎 石川整形外科医院院長  
(ききて) 大平 拓 大平整形外科医院院長
- 症例からの診断と治療(22) 偽痛風②—診断と治療—  
石川 浩一郎 石川整形外科医院院長  
(ききて) 大平 拓 大平整形外科医院院長
- 症例からの診断と治療(23) 腎病変をともなう全身性エリテマトーデス①—症例提示—  
市川 陽一 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター教授  
(ききて) 松田 隆秀 聖マリアンナ医科大学内科講師
- 症例からの診断と治療(24) 腎病変をともなう全身性エリテマトーデス②—診断と治療—  
市川 陽一 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター教授  
(ききて) 松田 隆秀 聖マリアンナ医科大学内科講師
- 症例からの診断と治療(25) 中枢神経障害をともなう全身性エリテマトーデス①—症例提示—  
廣畑 俊成 帝京大学第二内科講師  
(ききて) 岡 寛 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター
- 症例からの診断と治療(26) 中枢神経障害をともなう全身性エリテマトーデス②—診断と治療—  
廣畑 俊成 帝京大学第二内科講師  
(ききて) 岡 寛 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター
- 日本のリウマチ学教育—現状と将来—  
安倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授
- 症例からの診断と治療(27) 心肺病変をともなう全身性エリテマトーデス①—症例提示—  
橋本 博史 順天堂大学膠原病内科助教授  
(ききて) 戸叶 嘉明 順天堂大学膠原病内科

症例からの診断と治療(28) 心肺病変をともなう全身性エリテマトーデス②—診断と治療—

橋本博史 順天堂大学膠原病内科助教授  
(ききて) 戸叶嘉明 順天堂大学膠原病内科

症例からの診断と治療(29) 消化器病変をともなう強皮症①—症例提示—

近藤啓文 北里大学内科助教授  
(ききて) 穂坂茂 北里大学内科

症例からの診断と治療(30) 消化器病変をともなう強皮症②—診断と治療—

近藤啓文 北里大学内科助教授  
(ききて) 穂坂茂 北里大学内科

症例からの診断と治療(31) 心肺病変をともなう強皮症①—症例提示—

東條毅 国立東京第二病院臨床研究部長  
(ききて) 秋谷久美子 国立東京第二病院内科

症例からの診断と治療(32) 心肺病変をともなう強皮症②—診断と治療—

東條毅 国立東京第二病院臨床研究部長  
(ききて) 秋谷久美子 国立東京第二病院内科

症例からの診断と治療(33) 抗燐脂質抗体症候群①—症例提示—

市川幸延 東海大学第四内科助教授  
(ききて) 高尾正敏 東海大学第四内科講師

症例からの診断と治療(34) 抗燐脂質抗体症候群②—診断と治療—

市川幸延 東海大学第四内科助教授  
(ききて) 高尾正敏 東海大学第四内科講師

ライフステージ別リウマチ病(1) 幼少年期のリウマチ病①

渡辺言夫 杏林大学小児科教授  
(ききて) 中村公正 杏林大学第一内科教授

ライフステージ別リウマチ病(2) 幼少年期のリウマチ病②

渡辺言夫 杏林大学小児科教授  
(ききて) 中村公正 杏林大学第一内科教授

ライフステージ別リウマチ病(3) 少年期のリウマチ病①

大國眞彦 日本大学小児科教授  
(ききて) 藤川敏 独協医科大学越谷病院小児科助教授

ライフステージ別リウマチ病(4) 少年期のリウマチ病②

大國眞彦 日本大学小児科教授  
(ききて) 藤川敏 独協医科大学越谷病院小児科助教授

第38回日本リウマチ学会総会の話題

広瀬俊一 順天堂大学内科教授

ライフステージ別リウマチ病(5) 青年期のリウマチ病①

東 威 聖マリアンナ医科大学東横病院内科教授  
(ききて) 宮 城 憲 一 聖マリアンナ医科大学東横病院内科講師

ライフステージ別リウマチ病(6) 青年期のリウマチ病②

東 威 聖マリアンナ医科大学東横病院内科教授  
(ききて) 宮 城 憲 一 聖マリアンナ医科大学東横病院内科講師

ライフステージ別リウマチ病(7) 中年期のリウマチ病①

安 倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授  
(ききて) 小 出 純 埼玉医科大学総合医療センター第二内科講師

ライフステージ別リウマチ病(8) 中年期のリウマチ病②

安 倍 達 埼玉医科大学総合医療センター第二内科教授  
(ききて) 小 出 純 埼玉医科大学総合医療センター第二内科講師

ライフステージ別リウマチ病(9) 老年期のリウマチ病①

延 永 正 九州大学生体防御医学研究所教授  
(ききて) 酒 井 好 古 福岡中央病院第二内科医長

ライフステージ別リウマチ病(10) 老年期のリウマチ病②

延 永 正 九州大学生体防御医学研究所教授  
(ききて) 酒 井 好 古 福岡中央病院第二内科医長

慢性関節リウマチの在宅ケア

山 本 純 己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

提 供：サール薬品㈱  
番 組：リウマチ治療のために  
放 送 期 間：平成7年1月3日～12月26日

タイトル、演者以下のとおり

放送開始にあたって—その目的と利用—

廣 瀬 俊 一 順天堂大学伊豆長岡病院院長

リウマチ性疾患を疑う時(1) 内科的立場より

橋 本 博 史 順天堂大学膠原病内科教授

リウマチ性疾患を疑う時(2) 整形外科的立場より

松 井 宣 夫 名古屋市立大学整形外科教授

リウマチ性疾患を疑う時(3) 小児科的立場より

渡 辺 言 夫 杏林大学小児科教授

急性関節症状が出現した時

井 上 一 岡山大学整形外科教授

慢性関節症状が出現した時

前川 宗一郎 国立療養所盛岡病院第一内科医長

慢性関節リウマチ(1) 早期 RA の特徴

山本 純己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

慢性関節リウマチ(2) 関節外症状

斎藤 輝信 東北労災病院リウマチ膠原病科部長

慢性関節リウマチ(3) 日常生活への注意

廣瀬 俊一 順天堂大学伊豆長岡病院院長

慢性関節リウマチ(4) 抗炎症剤(含ステロイド剤)の使い方

山中 健次郎 順天堂大学膠原病内科

慢性関節リウマチ(5) 抗リウマチ剤の使い方

柏崎 禎夫 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター所長

慢性関節リウマチ(6) リハビリテーション

村澤 章 新潟県立瀬波病院副院長

慢性関節リウマチ(7) 手術療法

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

慢性関節リウマチ(8) 症例検討①

廣瀬 俊一 順天堂大学伊豆長岡病院院長

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

慢性関節リウマチ(9) 症例検討②

橋本 博史 順天堂大学膠原病内科教授

前川 宗一郎 国立療養所盛岡病院第一内科医長

慢性関節リウマチ(10) 骨関節 X線のみかた

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

慢性関節リウマチ(11) 最新の MR 診断

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

慢性関節リウマチ(12) 診断基準の使い方

小林 茂人 順天堂大学内科講師

慢性関節リウマチ(13) 血液血清学的検査の考え方

粕川 禮司 福島県立医科大学第二内科教授

慢性関節リウマチ(14) 関節液検査の解釈

井上 一 岡山大学整形外科教授

慢性関節リウマチ(15) 悪性関節リウマチの診断と治療

橋本 博史 順天堂大学膠原病内科教授

慢性関節リウマチ(16) 合併症

前川 宗一郎 国立療養所盛岡病院膠原病リウマチセンター医長

慢性関節リウマチ(17) アーフェレーシス療法

松本 美富士 名古屋市立大学輸血部助教授

慢性関節リウマチ(18) 免疫療法

澤田 滋正 日本大学練馬光が丘病院第一内科助教授

慢性関節リウマチ(19) 手術のタイミング

種田 陽一 名古屋市立大学整形外科講師

慢性関節リウマチ(20) 症例検討③ JRA

渡辺 言夫 杏林大学小児科教授

藤川 敏 獨協医科大学越谷病院小児科助教授

慢性関節リウマチ(21) 症例検討④ 成人スティル病

市川 陽一 聖マリアンナ医科大学内科臨床検査医学教授

大田 明英 佐賀医科大学内科講師

慢性関節リウマチ(22) 症例検討⑤ フェルティ症候群

東 威 聖マリアンナ医科大学東横病院院長

井上 哲文 東京大学内科物理療法講師

慢性関節リウマチ (RA) の多臓器病変

廣瀬 俊一 順天堂大学伊豆長岡病院院長

慢性関節リウマチ (RA) の関節病変

松井 宣夫 名古屋市立大学整形外科教授

慢性関節リウマチ (RA) の関節周囲、筋肉病変

勝 呂 徹 東邦大学整形外科助教授

慢性関節リウマチ (RA) の皮膚病変

橋本 武則 橋本膠原病センター院長

慢性関節リウマチ (RA) の眼病変

木村 内子 東芝病院眼科部長

慢性関節リウマチ (RA) の肺病変

猪熊 茂子 都立駒込病院内科医長

慢性関節リウマチ (RA) の呼吸器病変

橋本 博史 順天堂大学膠原病内科教授

長井 苑子 京都大学胸部疾患研究所臨床免疫学助教授

慢性関節リウマチ (RA) の消化器病変

前川 宗一郎 国立療養所盛岡病院膠原病リウマチセンター医長

慢性関節リウマチ (RA) の腎病変

- 荒川正昭 新潟大学第二内科教授
- 慢性関節リウマチ (RA) の心・血管病変  
福田信二 山口大学第二内科助教授
- 慢性関節リウマチ (RA) の血液異常  
西谷皓次 高知医科大学第二内科助教授
- 慢性関節リウマチ (RA) の脊椎病変の神経障害  
内田詔爾 都立墨東病院リウマチ科医長
- 慢性関節リウマチ (RA) の多臓器病変  
廣瀬俊一 順天堂大学伊豆長岡病院院長  
橋本博史 順天堂大学膠原病内科教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(1) リウマチ反応陰性脊椎関節症  
松井宣夫 名古屋市立大学整形外科教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(2) 感染性関節炎  
鳥巢岳彦 大分医科大学整形外科助教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(3) 結晶誘発性関節炎 (痛風・偽痛風)  
中村徹 福井医科大学第一内科教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(4) リウマチ性多発筋痛症  
前川宗一郎 国立療養所盛岡病院膠原病リウマチセンター医長
- 慢性関節リウマチの類似疾患(5) シェーグレン症候群  
廣瀬俊一 順天堂大学伊豆長岡病院院長
- 慢性関節リウマチの類似疾患(6) 全身性エリテマトーデス (SLE)  
橋本博史 順天堂大学膠原病内科教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(7) 多発性筋炎・皮膚筋炎、強皮症 (PMDM・PSS)  
縄田泰史 千葉大学第二内科
- 慢性関節リウマチの類似疾患(8) 混合性結合組織病変 (MCTD)  
西間木友衛 福島県立医科大学第二内科助教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(9) 血管炎症候群  
竹内勤 埼玉医科大学総合医療センター第二内科助教授
- 慢性関節リウマチの類似疾患(10) 変形性関節症  
腰野富久 横浜市立大学整形外科教授
- NSAID の副作用をいかに防止するか  
越智隆弘 大阪大学整形外科教授

#### 4) 研修医派遣事業

若い優れたリウマチ専攻医を米国又は欧州へ研修に派遣した。

##### 昭和62年度

	氏名	所属	留学先	指導者
米国	宗圓 聡	近畿大学	Division of Tumor Immunology. pana-Farber Cancer Insitute	Stuart F. Schlossman
欧州	金物 寿久	長野赤十字病院	Department of Orfhopedic Svrgery Lond University Sweden	Prof. Lars A. Lidgren

##### 昭和63年度

	氏名	所属	留学先	指導者
米国	石田 博	京都大学第二 内科	Stanford university	Maureen C. Howard, Ph. D.
	上阪 等	東京医科歯科 大学第一内科	Scripps Clinice	Dennis A. Car- son, M.D.
	澤井 高志	東北大学病理	Rovert Wood Johnson Medical School	Rovert L. Trel- stad, M.D.
	鈴木 貫博	北里大学内科	Scripps Clinic and Research Founda- tion	Eng M. Tan, M.D.
欧州	斉藤 知行	横浜市立大学 整形外科	Helsinki University	Seppo Santavirta, M. D., Y.T. Konttinen, M. D.
	横山 良樹	岡山大学整形 外科	Chefarzt der Abteilung Rheumaorth- opadie St. Josef-Stift, Sendenhorst	R.K. Mielke, M.D.

##### 平成元年度

	氏名	所属	留学先	指導者
米国	法岡 健一	防衛医科大学 第一内科	The University of Wisconsin Depart- ment of Zoology	Dr. Robert Auerbach

	高木 敏貴	横浜市立大学 整形外科	Rheumatic Diseases Division Department of Internal Medicine The University of Texas Southwestern Medical Center	Hugo. E. Taison
	窪田 哲朗	東京医科歯科大学第一内科	Trufts University, Dept. of Biochemistry & Pharmacology	Prof. B David Stollaw
	関谷 繁樹	新潟中央病院 整形外科	Brigham and Women's Hospital	Clement B. Sledge, M. D.
	野島 美久	東京大学第三内科	Dana-Faber Cancer Institute	Stuart. F. Schlossman M. D.
	康 浩一	日本大学第一内科	Division of Rheumatology Department of Immunology Research Institute of Scripps Clinic	Dr. Robert I. fox M. D.
	織田 弘美	東京大学分院 整形外科	University of Pennsylvania	Prof. Joel Rosenbloom
	渡部 亘	秋田大学整形外科	University of Pennsylvania School of Medicine	Prof. H. Ralph Schumacher
	平形 道人	慶応大学内科	Department of Internal Medicine Yale University School of Medicine	Prof. John A. Hardin
欧州	井上 康二	滋賀医科大学 整形外科	Clinique de Rhumatologie Hospital	Prof. Bernard Amor
	加藤 光保	東北大学病理	Ludwig Institute for Cancer Research	Carl-Henrik Heldin

平成2年度

	氏名	科名	所属	留学先	指導者
米国	石黒 茂樹	整形外科	名古屋大学	Rush Medical College Rush-Presbyterian-St. Luke, s Medical Center	Dr. Klaus E. Kuetter ph. D. Dr. James M. Williams ph. D.
	浦野 房三	整形外科	長野県厚生連 篠ノ井総合病院	Case Western Reserve University	Prof. Roland W. Moskowitz M.D.

	武井 修治	小児科	鹿児島大学	Pediatric Department of Southern California University	Prof. V. Hanson Prof. B. Bernstein
	土田 豊実	整形外科	千葉大学	Harvard Medical School Brigham and Women's Hospital	Prof. Clement B. Sledge
	兵藤 晃	整形外科	横浜市立大学	The Cleveland Clinic Foundation	George F. Muschler, M. D.
	福田 寛二	整形外科	近畿大学	Rush-Presbyterian-St. Luke, s Medical Center	Klaus E. Kuettner
	山本 政弘	臨床免疫学	九州大学生体防御医学研究所	Division of Tumor Immunology Dana-Farbar Cancer Institute Harvard Medical school	Cristopher Rudd ph. D.
	脇谷 滋之	整形外科	大阪大学	Case Western Reserve University	Prof. Arnold I. Caplan
欧州	税所幸一郎		市民の森病院 リウマチセンター	Rheumatism Foundation Hospital Heinola, Finland	Mertti M, J. Hämäläinen, M.D.
	種子田 斎	整形外科	埼玉医科大学	University of Wales College of Medicine	Prof. B. Mckibbin

平成3年度

	氏名	科名	所属	留学先	指導者
米国	笠間 毅	内科	昭和大学	The University of Michigan Medical School Department of Pathology	Steven L, Kunkel, Ph. D., Prof.
	沢田 哲治	物療内科	東京大学	Division of Molecular Medicine North Shore University Hospital-Cornell University Medical College	Jack Silver, Ph. D., Prof.

	杉田 昌彦	内科	京都大学	Dana-Farber Cancer Institute	Dr. Michael B. Brenner
	谷口 敦夫	内科	東京女子医科大学附属リウマチ痛風センター	Department of Medicine 0945 School of Medicine University of California, San Diego	Dennis A. Carson Prof.
	野寄 浩司	整形外科	横浜市立大学	Division of Rheumatology and Clinical Immunology, Depart. of Medicine, Univ of Arkansas for Medical Science	Prof. Hugo E. Jasin
	廣瀬 立夫	内科	防衛医科大学校	Harvard Medical School, Dana-Farber Cancer Institute Division of Tumor Immunology	Chikao Morimoto Prof.
	向井 正也	内科	札幌社会保険総合病院	Division of Allergy, Rheumatology and Clinical Immunology, Department of Medicine, Health Sciences Center, State Univ. of Newyork at Stony Brook	Charles R. Steinman, M. D.
欧州	上田 寛之	内科	北里大学	Unit for Applied cell and Molecular Biology Universoty Umea	Martin Gullberg
	小林 顕	整形外科	秋田市立秋田総合病院	University of Lund Department of Physiological Chemistry	Dick Heinegard Prof.
	船内 正憲	内科	近畿大学	Clinical Research Centre, Division of Immune Deficiency Research Group	Prof. A.D. B Webster

平成4年度

	氏名	科名	所属	留学先	指導者
米国	小川 法良	内科	浜松医科大学	Department of Medicine, Division of Clinical Immunology The University of Texas Health Science Center at San Antonio	Prof. Norman Talal
	櫻井 裕之	内科	東京大学	Beth Israel Medical Centel	Stephen G. Baum, M.D. Thomas Killip, M.D.
	塩川左斗志	臨床免疫学	九州大学生体防御医学研究所	Division of Developmental and Clinical Immunology, Departments of Medicine and Microbiology, University of Alabama at Birmingham	Harry W. Schroeder, Jr, Max D. Cooper
	中村 洋	リウマチ科	日本医科大学	University of Cincinnati, College of Medicine, Department of Ophthalmology. Ophthalmic and Connective Tissue Research	Winston W.Y., Kao, Ph. D.
	平林 泰彦	内科	東北大学	Tufts university, Health sciences campus Department of Biochemistry	Dr. B. David Strllar Prof.
	舩田 浩一	整形外科	防衛医科大学校	Rush-Presbyterian-St. Lukes Medical Center	Klaus E. Kuettner, Ph. D. Eugene J-M.A. Thonar, Ph. D.
	宮原 寿明	整形外科	九州大学	The University of Tennessee, Memphis Division of Connective Tissue Diseases Department of Medicine	Prof. Andrew H. Kang

欧州	稲毛 康司	小児科	日本大学	Clinical Research Centre Northwick Park Hospital	Dr. Patricia Woo FRCP Ph. D.
	林 充	整形外科	岡山市立市民 病院	Princess Margaret Rose Orthopaedic Hospital	W.A. Souter. F. R. C. S. E.
	前田 基晴	小児科	杏林大学	Department of Im- munology University col- lege and Middlesex School of Medicine	Dr. P.M. : Lydyard

平成5年度

	氏 名	科名	所 属	留 学 先	指 導 者
米国	平川 和男	整形外科	横浜市立大学	Cleveland Center for Joint Reconstruction	Bernard N. Stulberg, M.D.
	河村 修	内科	自衛隊中央病 院	米国国立衛生研究所 (NIH)	ジョージ・マー チン博士
	桑名 正隆	内科	慶応義塾大学	University of Pittsburgh School of Medicine	Thomas A. Medsger, Jr. M.D.
	井川 宣	内科	大阪大学	Division of Rheumatology, Depart- ment of Medicine, Univer- sity of California, Los Angeles	Dr. David Yu Prof.
	針谷 正祥	内科	東京女子医科 大学リウマチ 痛風センター	La Jolla Cancer Research Foundation Cancer Reser- ch Center	John C. Reed
	丸山 俊昭	内科	東京医科歯科 大学	University of California, San Diego	Pojen P. Chen, Ph. D.
	岡崎 仁昭	内科	自治医科大学	Stanford University School of Medicine Divi- sion of Immunology & Rheumatology	Samuel Strober M.D. Prof.

	浜 信昭	内科	東京都立大塚病院	National Institutes of Health NIDDK, Kindney Disease Section	James E. Balow, M.D.
欧州	谷口 博信	整形外科	宮崎医科大学	Princess Margaret Rose Orthopaedic Hospital	William A. Souter
	太田 弘敏	整形外科	愛知医科大学	Royal National Orthopaedic Hospital Karolinska Hospital	Geoge Bentley, Prof. Ch. M, FRCS Ian Goldie, M.D. Prof.

平成 6 年度

	氏 名	科名	所 属	留 学 先	指 導 者
米国	井田 弘明	内科	長崎大学	Dana-Farber Cancer Institute Division of Tumor Immunology	Paul Anderson, M.D. Ph. D.
	川口 鎮司	内科	防衛医科大学	Division of Rheumatology and Clinical Immunology, University of Pittsburgh Medical Center	Thomas A. Medsger, Jr. Prof.
	利 修治	内科	昭和大学	John P. Roberts Research Institute	Atsuo Ochi M. D.
	佐藤由紀夫	内科	福島県立医科大学	Department of Medicine School of Medicine University of California, San Diego	Dennis A. Carson
	田中 政彦	内科	埼玉医科大学	National Institutes of Health Laboratory of Developmental Biology National Institute of Dental Research	Dr. Yoshihiko Yamada
	田村 直人	膠原病内科	順天堂大学	Division of Rheumatology Rehabilitation center Medicine UCLA	Dr. David T.Y. Yu

	穂坂 茂	内科	北里大学	Norhwestern University Department of Arthrieis and Connective Tissue Diseases	Alisa E. Koch M.D.
	吉川 恭弘	整形外科	横浜市立大学	Cleveland Clinic Founda- tion, (biomedical engi- neering)	George F. Muschler M.D.
欧州	谷 仁孝	整形外科	滋賀医科大学	Department of Rheumatology, The Mid- dlesex Hospital	Alan Ebringer M.D.
	藤森 洋一	整形外科	国立姫路病院	Department of Rheumatology, The Robert Jones & Anger Hunt Orthopaedic & Dis- trict Hospital	Dr. R.C. Butler

平成7年度

	氏 名	科名	所 属	留 学 先	指 導 者
米国	石川 肇	整形外科	新潟県立瀬波 病院リウマチ センター	Orthopaedic & Recon- structive Surgeons, P.C.	Alfred B. Swanson, M.D. F. A. C. S.
	伊藤 聡	内科	新潟大学	Division of Cytokine Biol- ogy, FDA/CBER	Dr. David Fin- bloom
	遠藤 平仁	内科	北里大学	American Red Cross Hol- land Laboratory	Timothy Hla.
	黒坂大太郎	内科	東京慈恵会医 科大学	Department of Labora- tory Medicine & Pathol- ogy University of Min- nesota Medical School	Tucker W. LeBien
	斎藤 修	整形外科	日本大学	Massachusetts General Hospital	William, H, Harris
	蓮沼 智子	内科	聖マリアンナ 医科大学難病 治療研究セン ター	University of Texas Southwestern Medical Center at Dallas	Peter E. Lips- ky M.D.

	古田 栄一	リウマチ 膠原病内 科	九州大学生体 防御医学研究 所	Thomas Jefferson Uni- versity Department of Internal Medicine	Thomas J. Nasca M.D.
	三谷 雄一	整形外科	横浜市立大学	University of Arkansas for Medical Sciences, Division of Rheumatology	Hugo E. Jasin M.D.
欧州	種田 陽一	整形外科	名古屋市立大 学	Erlangen 大学 聖 マリア Wald 病院整形外科	Dr. Gerd Weseloh
	藤川 陽祐	整形外科	大分医科大学	University of Oxford Nuf- field Orthopaedic Centre	Dr. N. Ath- anasou

平成 8 年度

	氏 名	科名	所 属	留 学 先	指 導 者
米国	小池 達也	整形外科	大阪市立大学	Massachusetts General Hospital	Gino V. Segre, M.D.
	伊藤 健司	物療内科	東京大学	North Shore University Hospital Division of Rheumatology and Allergy-Clinical Im- munology	Nicholas Chiorazzi M.D.
	大迫 聡美	内科	東京女子医科 大学膠原病リ ウマチ痛風セ ンター	The Hospital for Special Surgery Cornell Med. Cen- ter	Keith B. Elkon M.D.
	熊野 文雄	整形外科	近畿大学	Department of Biochem- istry, Rush Medical Col- lege	Dr. Eugene J. M.A. Thonar Ph. D.
	塚田 敏昭	内科	長崎大学	Vanderbilt University School of Medicine Department of Medicine/ Nephrology	Raymond. C. Harris
	妻木 範行	整形外科	大阪大学	National Institutes of Health Cab. of Develop- mental Biology, NIDR	Yoshihiko Yamada, Ph. D.

	滑川 尚史	内科	千葉大学	Mayo Clinic	Cornelia M. Weyand, M.D.
	持田 勇一	整形外科	横浜市立大学	The Cleveland Clinic Foundation Department of Anatomic Pathology	Thomas W. Bauer, M.D.
欧州	西田圭一郎	解剖学	岡山大学	Department of Pathology The University of Edinburgh Medical School	Prof. D.L. Gardner
	近藤 健治	整形外科	国立名古屋病院	Orthopädische Universitätsklinik und Poliklinik Waldkrankenhaus St. Marien	Prof. G. Weseloh, M. D.

### 3. リウマチ登録医の登録事業

1) リウマチ登録医制度規則により、リウマチ登録医の登録を行った。

新規登録医数以下のとおり

昭和61年度 1,072<sup>^</sup>

62 164

63 196

平成元 196

2 227

3 187

4 178

5 168

6 194

7 58

8 113

注) 1 登録医は3年毎に登録更新を行う

2 平成8年6月現在登録医2,425<sup>^</sup>

2) リウマチ登録医の会

兵庫県リウマチ登録医の会（世話人代表石立博臣兵庫医科大学整形外科助教授）が、平成6年10月16日設立された。

## 4. 普及啓発事業

### (1) リウマチ月間行事

#### 平成元年度リウマチ月間学術講演会

日 時 平成元年 6月17日 (土)

会 場 東京九段 ホテルグランドパレス

(基調講演) リウマチ医療の現状と将来

塩 川 優 一 財団法人 日本リウマチ財団理事長

(学術講演) リウマチの最新の薬物療法

柏 崎 禎 夫 北里大学医学部教授

( ) リウマチの外科療法

田 中 清 介 近畿大学医学部教授

(特別講演) ウイルスと病気

高 月 清 熊本大学医学部教授

#### 平成2年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成2年 6月9日 (土) 11:00~17:00

会 場 東京九段会館

次 第

11:00~12:00 記念講演

(1) 日本チバガイギー・リウマチ賞受賞者

(2) 北陸製薬・関節疾患学術奨励賞受賞者

13:00~13:40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・関節疾患学術奨励賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

14:00~14:15 講 演

「リウマチなんかに負けないで」

山 田 美也子先生 (テレビキャスター)

14:45~17:00 シンポジウム

＝いまなぜリウマチか＝

司会 迫 田 朋 子 NHK アナウンサー

山 本 純 己 松山赤十字病院リウマチセンター部長

シンポジスト 柏 崎 禎 夫 東京女子医科大学教授

松 田 剛 正 鹿児島赤十字病院リウマチセンター医師

内 田 詔 爾 東京都立墨東病院リウマチ科医師

長谷川 三枝子 (社)日本リウマチ友の会

住 安 秀 子 東部地域病院看護婦

### 平成3年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成3年5月11日(土) 13:00~17:00

会 場 全社協ホール

次 第

13:00~13:40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・関節疾患学術奨励賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13:50~14:50 講 演

「生きることの再発見」

鈴 木 健 二先生(評論家・熊本県立劇場館長)

15:00~16:00 記念講演

(1) 日本チバカイギー・リウマチ賞受賞者

(2) 北陸製薬・関節疾患学術奨励賞受賞者

16:10~17:00 学術講演

「リウマチ診療の実態と展望」

演 者 柏 崎 禎 夫 東京女子医科大学リウマチ痛風センター所長  
慢性関節リウマチ診療実態調査委員長

発言者 本 間 光 夫 慶応義塾大学名誉教授  
日本リウマチ学会幹事長

発言者 川 本 昌 代 日本リウマチ友の会理事

### 平成4年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成4年5月16日(土) 13:00~17:00

会 場 全社協ホール

次 第

13:00~13:40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・関節疾患学術奨励賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13:50~14:50 講 演

「私の生き方」

中 村 メイコ先生(女優)

15:00~16:00 記念講演

(1) 日本チバガイギー・リウマチ賞受賞者

(2) 北陸製薬・関節疾患学術奨励賞受賞者

16：00～17：00 シンポジウム

「リウマチのリハビリテーション」

シンポジスト 吉野 榎 一 日本医科大学教授

石原 義 恕 中伊豆温泉病院院長

### 平成5年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成5年4月22日(木) 13：00～16：00

会 場 三越劇場

次 第

13：00～13：40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・骨、関節疾患学術奨励賞授賞

ツムラ・リウマチ臨床研究賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13：50～14：50 講 演

「心におしゃれを」

石井 ふく子先生(プロデューサー)

15：00～15：40 学術講演

「リウマチ制圧の最前線から」

西岡 久寿樹先生(聖マリアンナ医科大学教授)

### 平成6年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成6年5月31日(火) 13：00～15：40

会 場 三越劇場

次 第

13：00～13：40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・骨、関節疾患学術奨励賞授賞

ツムラ・リウマチ臨床研究賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13：50～14：50 特別講演

「放送よもやま話」

山川 静 夫先生(前NHKアナウンサー)

15：00～14：40 学術講演

「家庭でできるリウマチのリハビリテーション」

山本 純 己先生(松山赤十字病院リウマチセンター部長)

## 平成7年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成7年5月31日(水) 13:00~15:40

会 場 三越劇場

次 第

13:00~13:40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・骨、関節疾患学術奨励賞授賞

ツムラ・リウマチ臨床研究賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13:50~14:50 特別講演

「お天気よもやま話」

倉 嶋 厚先生(気象キャスター)

15:00~14:40 学術講演

「リウマチとはどんな病気か」

小 川 亮 恵先生(関西医科大学整形外科教授)

## 平成8年度リウマチ月間全国大会

日 時 平成8年5月31日(金) 13:00~15:40

会 場 三越劇場

次 第

13:00~13:40 式 典

理事長挨拶

来賓祝辞

北陸製薬・骨、関節疾患学術奨励賞授賞

ツムラ・リウマチ臨床研究賞授賞

三浦記念リウマチ学術研究賞授賞

日本リウマチ財団リウマチ福祉賞授賞

13:50~14:30 学術講演

「喜びを抱く心はからだを養う」

吉 野 槿 一先生(日本医科大学リウマチ科教授)

14:40~15:40 特別講演

「笑い与健康」

林 家 木久蔵師匠(落語家)

## (2) リウマチ福祉賞の贈呈

平成2年度

特別賞

社団法人日本リウマチ友の会

福祉賞

小坂志朗（青森県立中央病院内科部長）

広本公子（㈱日本リウマチ友の会 静岡副支部長 元国立伊東温泉病院）

平成3年度

福祉賞

浅井克晏（筑波大学臨床医学系教授）

小林昌代（㈱日本リウマチ友の会 山梨支部長）

平成4年度

福祉賞

寺山 忍 み（全国膠原病友の会相談役）

伊藤澄子（㈱日本リウマチ友の会 鹿児島支部長）

平成5年度

福祉賞

向野久子（㈱日本リウマチ友の会 愛知支部長）

山田敏子（元上富田（和歌山県）住民福祉課保健婦 現在介護用品店経営）

福祉奨励賞

三好映子（松山赤十字病院 リウマチセンター外来主任看護婦）

山口ハツヨ（中伊豆温泉病院 social worker）

平成6年度

福祉賞

斎藤謙三（㈱日本リウマチ友の会 栃木支部長）

平成7年度

福祉賞

鍋田政子（㈱日本リウマチ友の会 熊本支部長）

福祉奨励賞

西岡一広（陶芸家）

特別福祉賞

兵庫県リウマチ登録医の会

兵庫県理学療法士会

㈱日本リウマチ友の会 兵庫支部

平成8年度

福祉賞

小田嶋義幸（㈱日本リウマチ友の会 岩手支部長）

福祉奨励賞

工藤春士（㈱日本リウマチ友の会 大分支部）

- (3) 機関誌「リウマチ財団ニュース」の発行：年4回（1回27,000部）
- (4) 登録医師向け啓発誌「リウマチエキスパート」の発行：年2回（1回7,500部）
- (5) 登録医名簿の制作配布：年1回（全国版3,000部・地区別各500部）
- (6) 財団PR資料「リウマチの制圧をめざして」の制作配布
- (7) リウマチ月間用ポスターの制作：年1回
- (8) 国際リウマチシンポジウム抄録：年1回
- (9) リウマチ診療レポートの発行（平成3年）
- (10) リウマチ教育研修会テキスト（平成元年、5年、8年）の発行
- (11) 薬効評価の新しい展開（平成5年）の発行
- (12) ビデオの制作

リウマチ入門シリーズ（平成3年～平成5年）

- 1. 継続した治療をするために
- 2. 患者の自立した生活のために
- 3. より快適に暮らすために
- 4. 慢性関節リウマチの基礎知識

NSAIDsによる上部消化管障害—'91日本リウマチ財団委員会報告から—（平成4年）

- (13) シンボルマークの制定（平成元年）
- (14) 慢性関節リウマチ診療実態調査の実施

第1回（平成元年）

1. 目的

我が国における慢性関節リウマチ診療における問題点を明らかにし、RA診療のあるべきを提言するとともに今後の活動指針作成の資料とする。

2. 調査対象及び地域

一般医	517人	市川市、青森市
登録医	1,606人	全国
各大学、病院	1,625施設	全国
保健婦、訪問看護婦	100人	横須賀市、青森市

第2回（平成7年）

調査対象

- 1) 大学・病院 1,328施設（内科及び整形外科を併せ標榜し、200床以上）全国
- 2) 登録医 2,348人全国
- 3) 実地医家 1,020人 青森市、市川市、鹿児島市
- 4) 患者 6病院 各200人 計1,200人対象

## リウマチ福祉賞等受賞者の横顔

第1回（平成2年度）

### 早くから地方で専門的医療を試みる

青森県立中央病院第一内科部長 小坂志朗氏

小坂志朗氏、64歳。昭和40年に青森県立中央病院に赴任して以来、リウマチの診療に積極的に取り組んできた。現在、青森県でただ一人のリウマチ指導医として、リウマチ医療の先頭に立ち、地方の皆さんの福祉にも貢献し続けている。

同氏は東北大学を卒業後、同大学鳴子分院内科に勤務し、リウマチと関わるようになる。「当時、昭和30年代の初めは、欧米から免疫化学の概念が導入され、わが国でリウマチの本格的な研究が始まった時期でした。全国の大学との共同によるリウマチ因子の免疫化学的な研究に、力を注いだものです」と述懐する。以後も、免疫血清学を中心とした研究活動を続け、昭和57年には日本リウマチ学会賞が授与された。

昭和40年、青森県立中央病院に赴任。同病院長の伊藤実氏（東北大学名誉教授、故人）は、小坂氏の意欲を尊重してくれ、同氏は、リウマチ膠原病を主要診療科目として取り上げた。第一内科としてリウマチを専門的に診療したのである。地方の一般病院でこのような試みは、おそらく最初のもの、という。

「当時は、リウマチの治療法も十分に確立されていません。そこで、新薬や新しい治療法が有効・有用とわかったら、それを試みるなど、常に患者さんには最新の治療をしてあげるよう心がけてきました。」積極的に学会に出席するなど研究活動をしてきた成果が、活用されているのである。この評判は、「口コミ」で伝わり、患者は増えていく。現在では、青森県一円だけでなく、北海道や秋田県からも受診に来る。

ところで、やがて同氏も定年を迎える。患者さんはどうなるのだろうか。この問いに、「私が生きている限り、患者さんの面倒をみていくつもりです。“青森リウマチセンター”といったものを作り、患者さんを診続けていきたいと思います」と、力強い答えが返ってきた。

### 友の会の誕生と発展を支える

日本リウマチ友の会静岡支部副支部長 広本公子さん

「日本リウマチ友の会」の誕生・発展を裏で支えてきたのが、現在、同会静岡支部副支部長の広本公子さん（65歳）で、その功績は大きいといえよう。

同会誕生のきっかけは、昭和33年2月、国立伊東温泉病院に島田広子さん（現・同会理事長）が入院し患者の会を計画、同病院長の伊藤久次氏（現・名誉院長）に相談、昭和35年、同会の前身である伊東リウマチ友の会が、同病院内に事務局を置き発足した。翌36年、日本リウマチ友の会と改称、6月には第1回総会も開かれた。しかし、8月、過労により島田さんが倒れる。また、事務局を担当していた会員も退院した。このピンチを救ったのが、同病院の看護助手として患者さんと親しくつき合ってきた広本さんである。

「見るに見かねて、事務を引き受けることにしました」。何気なく語るが、実際、大きな労力を注いだはずだ。同病院の事務部門に配置替えになったのちも本業を続けてから、事務作業を連夜続けた。こうして同会は発展し、昭和43年、事務局を東京に移転した。

以後、広本さんは、同会静岡支部で講演会などさまざまな活動を続け縁の下の力持ち的役割を果たしている。

これまでの最大の喜びについて、広本さんは「日本リウマチ財団が設立されたこと」と話す。今後の抱負について聞くと、福祉関係の社会的施設や設備の充実、会としては楽しい旅行など、たくさんのプランを挙げた。

その実現のためにも、今後の活躍が期待される。

## 第2回（平成3年度）

### 業績が次の医療の夢を育てる

筑波大学臨床医学系教授・理療科教員養成施設長 浅井 克 晏氏

昭和35年5月、国立伊東温泉病院で、日本リウマチ友の会の前身である伊東リウマチ友の会が発足した。医師として、その発足を手伝い、以後もさまざまな協力を続けているのが、筑波大学臨床医学系教授（内科）の浅井克晏氏である。

同氏は、東京大学物療内科を経て、昭和32年、国立伊東温泉病院に一般内科医として赴任する。当時、同病院には、多くのリウマチの患者さんが集まっていた。「せっかく特色のある病院に来たのだから、リウマチの勉強をしようと思った。それで、リウマチ病棟の勤務を願い出たところ、すぐに許可されました」。

同病院で仕事をしたのは3年間だが、この時期、島田広子さん（現・日本リウマチ友の会理事長）や小林昌代さんらが入院していて、友の会の設立の準備も進められる。この段階から、浅井氏は患者さんに関わるようになる。「当初から、求められるまま細々と、友の会のお手伝いをしてただけです」。こう淡々と語る浅井氏だが、同会に対し多くの協力をしてきた。

これまで同会の理事（出版担当）を務め、機関誌『流』の編集などで、さまざまなアドバイスをしている。講演会、療養相談にも積極的に出席し、正しい知識の普及に務めた。同氏は「例えば、リウマチの患者さんにとっては、布団の上げ下ろしが辛い。そういう悩みを聞くと、ベッド、万年床にするように、といった指導をしたものです」と述懐する。また、医学の面では、ステロイド剤からの離脱を主張した。

「今後も、これまでどおり患者さんと付き合っていきたいと思います。将来、リウマチの専門病院ができれば、そういう所で働きたいですね。それに、温泉地に、リハビリテーションに力を入れた病院がもっとできたらいい。また、『クアハウス』で、リウマチの治療に重点を置いたようなところが、できないですかね」。浅井氏の口からさまざまな“夢”が出てきた。

### RA 外来開設や電話相談に尽力

日本リウマチ友の会山梨支部顧問相談役 小林 昌代さん

小林昌代（62歳）さんは、国立伊東温泉病院に入院中、知り合った島田広子さん（現・日本リウマチ友の会理事長）と二人で患者の中心になり、昭和35年、日本リウマチ友の会の前身である伊東リウマチ友の会を発足させるとともに、日本リウマチ友の会、同山梨県支部の発展に大きな役割を果たしてきた。

「リウマチの治療はそっちのけで、友の会の仕事をしてきました」。こう述懐する小林さんは入院中、率先して、退院した患者さんに会の設立趣意書を郵送するなど、組織作りの仕事をした。そして、日本リウマチ友の会の理事を務めるとともに、機関誌『流』の編集ほか、さまざ

まな活動に取り組んできた。

「私が入院中、初の女性大臣として中山マサさんが厚生大臣に就任すると、すぐに手紙を出し、リウマチは若い人にも多く経済的にも大変です、と訴えました。さっそく、大臣から『少しでも力になるなら応援して差し上げます』とのご返事をいただきました」。以後も、小林さんを中心に、厚生省や首相に陳情した。

退院後、小林さんは甲府市の自宅に戻り、日本リウマチ友の会支部設立に力を注ぐ。昭和38年、全国で3番目の支部として、山梨県支部が発足。ここから同県での活動が始まる。

小林さんらの働きかけにより昭和48年から2週間に1回(現在、週に1回)、東京大学からリウマチの専門医を招く形で、県立中央病院にリウマチ外来が開設されている。ここに小林さんも出かけていき、受診した人たちに、患者の立場からアドバイスをする。また、小林さんは20年以上にわたり、自宅(支部)で毎週水曜、リウマチに関する電話相談を受けている。面接にも応じる。その電話は、全国からかかってくる。「今後、山梨県にリウマチの専門病院を作ること、医療費の助成、在宅福祉などに力を入れたいと思います」。最近、車椅子を使うようになった小林さんだが、穏やかな中に力強さをひめて語ってくれた。

### 第3回(平成4年度)

## 広く膠原病患者のために貢献

全国膠原病友の会相談役 寺山 忍 みさん

寺出忍みさん(70)は、昭和17年東京薬学専門学校女子部を卒業し厚生省衛生試験所勤務、戦時中を過ごした(退官時調査部長)。昭和27年アメリカイリノイ大学に研究留学中の夫(フルブライト第1期生)と子供3人連れて暮らした3年半は幸福そのもので、帰国後早々の昭和35年に関節炎が発症するとは思ってもみないことだった。そして、11年後の46年、それは膠原病のひとつであるSLE(全身性エリテマトーデス)と診断された。

寺山さんは、難病といわれるSLEに立ち向かった。46年11月、発起人の森田かよ子、故河野千寿子両氏の呼びかけで膠原病患者、家族、専門医、協力者が結集して発足した「全国膠原病友の会」に設立総会から参加、その場で運営委員を引き受けた。

1年後の47年11月には、事務局を引き受けていた佐藤エミ子さんが入院したあとを受け、自宅を事務局に開放、本部事務局長、代表委員、会長として八面六臂の活動をはじめた。やがて帰国後10年続けた草月流華道教室も閉じて首都圏を中心に不自由な身体で集まってくる役員とともに厚生省、大蔵省、国会社会労働委員会をめぐり、「難病患者医療費の公費負担」「膠原病の研究会費増額」などについて毎年陳情を重ねてきた。

一方、自宅には朝から夜まで全国の患者さんから相談などの電話が殺到、1年間に1000件を越し、寺山さんのみでは身が持たず、役員が交替で対応に当たっている。

「相談内容は①病名を知らされてショックを受けた患者の励ましと対応策②専門医への紹介・橋渡し③医療費、公費負担制度についてのとまどいに対するの適切な指導がベスト3です」と寺山さん。ほかに性生活、結婚、出産など多岐にわたっている。また、他団体との連携活動、医療相談会などを数限りなく実施した。

その合間をぬって機関誌『膠原』の発行と配布を行った。No.1からNo.82号までを担当、全国関係官庁、医療機関、他団体などと会員全員約5000部を配布してきた。

『特集1号～3号』『膠原病ハンドブック』『膠原病診療手帳』なども諸先生方の協力によってできた業績のひとつ。

しかし、寺山さんは3年前から人工透析を受ける身となったうえ諸般の事情により、寺山家の事務局時代は平成3年、22年間にわたる幕を閉じた。この間患者は5000人に達するまでに発展したが、寺山さんは会長を退いたいまでも電話相談を続けている。

## リウマチ検診車の名付親

日本リウマチ友の会鹿児島支部長 伊藤澄子さん

日本リウマチ友の会・鹿児島支部長の伊藤澄子さん(69)が、友の会と本格的に取り組んだのは12年前の昭和55年に第24回日本リウマチ医学会が鹿児島市で開催された時である。会長の寺脇保・現鹿児島大学名誉教授と塩川優一・現日本リウマチ財団理事長から「患者の会であるリウマチ友の会の支部が鹿児島にはない。よい機会だから支部結成を」と講演会傍聴のリウマチ患者に壇上から呼びかけられ、その助言を受けてその場で31人の加入申し込みがあり、支部設立準備会発足となった。伊藤さんは発起人から支部長になり現在に至る12年間支部長として、またその間友の会本部理事会のブロック理事としても6年間活躍された。

伊藤さんがリウマチと出会ったのは19歳の昭和19年6月。住友銀行若松支店でタイプを打っている時右手首に腱鞘炎を起こした。当時は戦時下、また若さも手伝って、たいした治療をしなかった。しかし、間もなく「リウマチ」と診断を受け、リウマチとの闘病生活がはじまった。

昭和57年、鹿児島赤十字病院に「リウマチ膠原病センター」が開設され「日赤リウマチ教室」が県内、離島、隣県で開催される時、同行して現在まで36回リウマチへの正しい知識と啓蒙活動とともにリウマチ友の会の活動を紹介している。

この教室で、療養相談でよりの確に判断ができるようにと松田副院長が考案された検診車が郵政省年賀葉書基金の助成で交付された。検診車に愛称をつけようというときにリウマチ患者(流)に日赤リウマチ教室のプロジェクトの皆様の暖かい思いを入れ「暖流1号」を提言した。南から北まであたかも暖流黒潮の如く全国にこの検診車の2号、3号実現を願ってがその理由。

平成2年、支部育成の活動が認められ、日本リウマチ友の会創立30周年大会において表彰された。一方、平成3年には鹿児島県身体障害者福祉協会から「組織の実践活動を通して、身障者の自立と社会参加に尽力した」と表彰された。

現在鹿児島県難病連役員、県身体障害者相談員、県身障者社会参加促進協議会委員等に任命されている。

伊藤さんは夫を亡くし、一人暮らしで、自宅を支部事務局に提供する一方、難病連関係患者、リウマチ患者からの電話相談を受けている。

昨年6月、白内障の治療中眼科医院で転倒、右大腿骨骨折、杖をつく生活の不自由さの中にあるが、精神的にはいたって元気で明るく、電話相談や友の会事務をしっかりとこなしている。

### 第4回(平成5年度)

## 体験を生かして患者さんの道標

日本リウマチ友の会愛知県支部長 向野久子さん

日本リウマチ友の会との出会いは、発病後4年の秋(昭和43年)医師の紹介で、国立伊東温泉病院へ入院、その際、小林昌代さんと、ベットが並び、昼夜リウマチについていろいろ教えていただき、リウマチ友の会が、患者に対して大きな役割を荷っていることについても感動いたしました。

翌年、退院の際、当時院長の伊藤久次先生から『入院治療の経験を生かし、愛知の患者さんのためになるように』とのご助言を受けました。

少しでもお役に立てればと思っておりましたが、私の症状は進むばかり、苦しむ様子を、実父が「悪いところは早く処置するように」と、また家族の意向もあり何度も手術のため、国立名古屋病院で入退院を繰り返しました。そのつど患者の立ち場から医師、患者とのパイプ役となり、また、リウマチ友の会の機関誌“流”の回覧をして会員の輪を広めるように務めてまいりました。

そのうちに、療友たちに次回の再会を待たれるようになり、明るい笑顔も戻り、話題も多くなって何かと依頼されるようになりました。どんなことでも1人で悩まず療養することを念頭におき、希望を持つよう働きかけています。

時間の許す限り、外来や病棟に出向いて療友の症状をうかがうのが日課になってしまいました。

何事も納得されるまで耳を傾けるようにしております。

寛解期に入った、1985年からは副支部長として、各方面に働きかけてまいりました。1986年国際障害年の中間年に当るのを記念し、愛知支部に「リウマチなんでも電話相談」を毎月第1土曜日に開設しました。専門医2名と支部委員が、各新聞社の報道の協力もあり、2台の電話による対応に追われています。

また、支部活動のひとつである県下10ヶ所余にある“地域別の療養相談会”では、患者の身近な場所での先生、看護婦さんの支援で、患者や家族の方々がリウマチの理解を深め、正しい治療とQOLの啓蒙をうけております。

最近の治療法による「早期措置で全治も可能」との朗報に、医師と患者が一体になって治療を受けることが最大策と願うものです。

これからは患者の要望の多い、在宅療養と福祉に力を入れ、患者の立場として、1日も早い原因究明およびリウマチ科の標榜の実現、並びに友の会の目的に邁進いたしてまいる考えです。

## 行政面から医療をバックアップ

元上富田町（和歌山県）保健婦 山田 敏子さん

リウマチ住民検診が、昭和40年に第1回目として開始されたのを皮切りに、約4年の間隔でリウマチの疫学調査が、私の住む和歌山県西牟婁郡上富田町において、実施され継続されてまいりました。

保健婦として、昭和44年から23年の間に、現日本リウマチ財団副理事長でいらっしゃる七川敏次先生のご指揮のもとに、大勢の先生方とともに、ただひたすら黙々と、調査に参画させていただきました。

その調査戸数約1,000戸、人員約3,000余人を対象に、小さなつみ重ねも年を数えるにつれ住民とも顔なじみになってまいりましたし、そうしたことが、相談や指導の際に何にも増して大きなメリットとなりました。

1人1人のカルテ管理が行き届いておりましたので、追跡調査にしても、また、診察や相談にしても受診者は安心できたことといえましょう。

他の集団検診でも、受診率は他地区に比べて高く、つまり「自分の健康管理の意識づけ」につながって来たといえます。

行政のバックアップで、住民との接触も、速やかに処理ができました。職員間の応援体勢では、チームワークを大切にしました。継続の力は、チームワークをくずさないことに集中しました。

アンケートの提出を、100%の目標に近づけたくて、意向に添うべく、誰もが、懸命にがんばりました。午後9時終了が数日続いたこともあります。一つの集団から、得られる情報を大切にしました。20余年の歳月をかけたこのエネルギーは、リウマチ早期発見、早期治療へと繋がると信じています。すべて住民の方々のご協力のお陰です。

健康な人、半健康な人を含む調査ですから、説得や納得の必要なこともありました。

こんなにも長期に究明する必要があるのかしらと、慢性疾患の恐さを思いました。

中途半端にしない先生方の姿勢があり、頭の下がる思いがいたしました。

人が生まれ、終までの間に、どのような疾病との出会いがあるやら知れませんが、不自由さを強えられる慢性疾患、特にリウマチの僕滅と追放を願っている一人であります。

保健婦として、リウマチ福祉賞という身に余る評価をいただきまして有難く感謝申し上げます。

## コ・メディカルとして永年努力

松山赤十字病院リウマチセンター看護婦 三好映子さん

松山赤十字病院にリウマチセンターが開設されたのは昭和55年5月でした。今回このような賞をいただいたのも、その時初めて山本純己先生にお会いして以来、13年間と一緒にリウマチセンターを築いて来られたという幸運に恵まれたおかげだと思います。今日まで支えてくれたスタッフと受賞の喜びを分かち合うことができ、大変光栄に思っております。

リウマチセンター開設当初の私のリウマチに対する知識は貧弱なもので、思い出しても恥かしくなります。

今日まで1万5,000人の患者さんが外来を訪れて下さいました。いろいろな体験を通じ、また、山本先生の患者さんに対する姿勢、思いが私にとっては大変貴重な勉強となりました。患者さんと信頼関係を築くことがまず基本となり、決しておしつけではなく、必要なことが必要なだけ出来る看護をしたいと考える毎日です。

治療をはじめたころは独身だった患者さんが、現在では2児の母親となりました。患者さんから「私たちのために元気でいて下さい」といわれたときはとてもうれしく、この道を選んで本当に良かったと思えました。

リウマチの友の会の島田理事長さんに応援していただき、患者さん向けにまた看護婦向けに教育用ビデオを作成するお手伝いをさせていただきました。

また、山本先生の指導で病棟看護婦、PTと一緒に『リウマチノート』という素敵なパンフレットを作成しました。多くの方から役立てて下さっていることを聞きうれしく思っています。

また、年1回患者さんのために「リウマチ教室」を開いて、医師、看護婦、PT、OTが教育指導を行っています。いつも大変好評で会場は満員となります。熱心に聞きに来て下さる患者さんの姿に次回への意欲が湧いて来ます。

リウマチはチーム治療が大切といつも山本先生がおっしゃる通り、スタッフは毎週勉強会を持ち、意見交換を通じお互いのレベルアップを図っています。各スタッフが患者さんとどうかかわってゆくか考えながら治療していくからです。

患者さんが増え続けるのが最大の悩みです。

全国から訪れて下さる患者さんに“きょうも満足できる看護が出来たかしら”と振り返りの毎日を送っています。

## 患者さんの日常生活面を支える

中伊豆温泉病院医療福祉科副室長 山口ハツヨさん

私が学生時代のころ、脳卒中の方々がリハビリを受けて地域の中でどのように受けとめられるのか知りたくて、各地のリハビリ病院を訪ね歩いたことがありました。卒業後もリハビリに関心があり、勉強のために新設された中伊豆温泉病院を紹介され、ときどき名古屋より訪ねました。緑豊かな天城の山々に囲まれ、はるかに富士山を仰ぎ見て、療養の地としていいなあと思いましたが、後年、ここが自分の仕事の場になるとは思ってもいませんでした。

昭和47年に招いて下さる方があり中伊豆温泉病院に就職しました。

当時は間得之院長がリウマチを専門に診察し研究しており、研究会などの主催もしておられました。作業療法士の本村信子さんもリウマチに熱心に取り組んでおられ、私は早くから多くのリウマチ関係者と出合いました。当時は今のようにリウマチが良く理解されておらず、孤立して、家庭的にも不幸な結末をたどった方たちが相当数おられました。

そのご、昭和50年ころに廣本公子さんにお誘いを受けて友の会のお手伝いをするようになったと思います。

必要な治療が受けられ、生活を楽しく、豊かなものにすることを私は目標にしています。そのため、職場では次のような工夫をしています。

医療福祉科では毎週定例の説明会を開いており、新入院者が福祉相談室に入りやすい関係作り、社会保険制度の情報提供と手続き援助を行います。MSW(医療ソーシャルワーカー)との出合いがスムーズに行くことが一番の目的です。

次いで私は全員ではありませんが、リウマチの患者に個別に会います。ここでは申請可能な社会保険の手続きをしているかどうか、障害年金は、身体障害者手帳は、治療上のトラブルはないか、などの検討をしたりアドバイスをしたり、「日本リウマチ友の会」を知らない人へのお誘いもします。

地域の生活の中ではさまざまな情報があふれています。良いといううわさに翻弄されて、すぐにとびつかないよう、あわてず、客観的に正しい情報を得るために、そして孤立せず、横の友の輪が広げられるように友の会入会を勧めます。

友の会静岡支部では主に広報紙の発行と療養相談会の生活相談を受け持みます。まだまだ不十分です。

今度いただきました「福祉奨励賞」は、塩川先生のお言葉による「ご苦労さまというより今後に頑張ってくださいのための賞です」を忘れずに、自分のできる限り、リウマチや他の多くの障害者の生活向上のため、ボランティア活動を通して頑張ってゆきたいと思ひます。

### 第5回(平成6年度)

#### 活動歴20年、まだまだ頑張ります

日本リウマチ友の会栃木支部長 齋藤謙三氏

日本リウマチ財団の平成6年度リウマチ福祉賞を受賞した、齋藤謙三さん(75)は、日本リ

ウマチ友の会栃木支部の支部長。女性250余人を含む300余人の会員の先頭に立って、昭和49年6月、30番目の支部開設と同時に世話をはじめ、その活動歴は20年を数える。

妻のツヤ子さんが手の指の腫れを訴え、次第に悪化してきたのが昭和40年のこと。近くの整形外科を訪れたところ「リウマチが疑われるので、専門医に診てもらったほうがよい」といわれた。当時は登録医もおらず、迷ったあと、東京・新宿の国立病院医療センターを受診した。

リウマチと診断されてからは週2回、宇都宮から東京の新宿まで3時間も車に揺られて通院した。電車に乗れたのはいいほうで、次第に身体が自由がきかなくなってきたので、こんどは斎藤さんがマイカーに乗せて通った。

損害保険の会社に勤めていた斎藤さんにとって仕事と介護の両方はきつかった。「本人のいう痛みが直接伝わってこないだけに、はじめは実感がわきませんでした」と斎藤さんはいふ。友の会栃木支部が発足するとき、ツヤ子さんの代理で集会に出席、そこで多くの患者さんや家族の声などを聞き、リウマチに罹患したことの大変さを肌で感じ「私は身体が動くのだから…」と支部長をかって出たのであった。

ツヤ子さんも電話で会員や心配な人びとの医療相談を引き受け、若くはつらつとした、患者とはとても思えない声で多くの患者を励ました。

しかし、ツヤ子さんの病状は悪化していく一方で、リウマチ治療の唯一の基幹施設として厚生省の認可を得ている神奈川県立相模原病院に入院することになった。そして、退院後の独協医大、国立東宇都宮病院での施行を含めて、両股関節、両膝、頸椎と手術に次ぐ手術を受けた。家で少しでもスムーズに動けるようにと風呂やトイレなどを改造した。

やがて57歳で定年退職した斎藤さんは損保の代理店をやりながら介護を続けた。「妻は几帳面な性格で、着物を着せてやっても曲がっているとやり直し、料理は私がやっていたが、後ろにいて調味料の入れ方や材料の分量に文句をつけましてね。それが、いう通りやるとおいしくできてね…」と斎藤さん。

そのツヤ子さんは、急性腎不全でさる7月15日死去された。その1週間ほど前、今回のリウマチ福祉賞受賞を祝う祝賀会に夫婦揃って出席、会員たちとともに喜びをわかち合ったばかりであった。死後身の回りの品を片づけていると大学ノートが5冊みつかった。几帳面さを反映してピッチリと書き込まれた病床日記であった。病状も克明に記されていた。

近所に住む長男や孫が毎日のように顔を出し、斎藤さんも趣味のゴルフとダンスに熱を入れており、「動けるうちは友の会の仕事を続ける」という。9月3日にも近くの自治医大から医師を招き、リハビリの講演や医療総合相談などを、会の中心となつてとりしきっていた。

## 第6回（平成7年度）

### 気軽なミニ勉強会も考えている

日本リウマチ友の会熊本支部長 鍋田政子さん

昭和47年熊日紙上にて「日本リウマチ友の会」の記事を見て早速本部長理事長に手紙を書き、以来1年半熊本市内の病院を回り設立を呼び掛け、49年3月21日熊本支部結成の運びとなりました。

忘れもしない43年12月家事だけの生活から、一寸したアルバイトに出て立ちっぱなしの仕事だったため、20日位過ぎた頃足の冷えからはれが出てきました。ひどいはれはすぐ取れましたので大したことはないだろうと思ひ、夜は近医にて注射し、昼は仕事と2か月勤めたのが私の発病ですが、一生こんなに苦しむことになるとは思いませんでした。

それまでは全く健康でママさんバレーの選手で県予選までいったことのある元気者でしたので発病はショックそのものでした。「負けるものか」という闘病心と同病者のために支部活動に打ち込んだ20余年でしたが、もうそんなになるのかなとも思い、また長い長い年月だった思いも致します。

お蔭様で会員は300人を越え、活動も盛んです。

総会をはじめ、年4回のテーマをかえてのリウマチ勉強会(健常者も参加)、それに熊本市を中心とした地方での医療・生活相談会、それに親睦旅行もあって11月8日～9日には天草旅行に出かけます。大きな集会では思っていることや、お互いにゆっくりと話す機会がないので、気軽なおしゃべり会とでも言うのですか“ミニ勉強会”を近い将来やってみたいと考えています。

これまで10回ほど入院を繰り返しました。上京前の2月17日には左足に39針の手術で外反母趾、足指の矯正、膝人工関節置換術を受け、5月の表彰に出席しました。

現在は右足指、足首、人工9年目の人工膝が痛むため左腰が痛みつらい日が続いており、また右足も手術できる所はやるかと考えています。

30年位前に取った車の免許のお蔭で医院の玄関までドア・トゥ・ドアの生活で助かっています。また日常は電話や手紙での会員さんからの相談にのっています。

受賞に関しては本当に思いがけない事で身に余る光栄と有難く存じております。支部の賛助会員の先生方6人から置時計をお祝いいただき、これもまた恐縮しておりますが、オルゴールの音色に心和む思いの日々を送っています。

## 陶芸と医療の二人三脚で回復へ

陶磁器製造給付作業一級技能士 西岡 一 広氏

先輩から主としてリウマチ患者さんのための陶芸教室を引きついでから10有余年になる。粘土をこねることをリハビリの作業療法に取り込んでのことだが、医療に素人の私が財団福祉賞を受賞したことは栄光に思う。

陶器は湯呑、灰皿、花瓶など患者さんが自由に選択して作る。“帯づくり”という初歩的な方法だがこれが手作業に一番適している。

常時10数人が隔週、物療室の教室ではげんでいるが、術後の患者さんも混じっているので粘土は硬・軟2種。通常のものより両方とも柔らかくしている。

不安と好奇心で教室をのぞく患者さんが多く、参加しても手先が思うようにならず苦勞をされているが、粘土にふれているうちに創作意欲が湧き、一生懸命。その姿をみると「何とか仕上げてください」と私も一緒に頑張っている。少し慣れてくると、ヤジや批評が飛び立ってリラックスムード。

手作業の物療の方法は、スタッフの先生が絶えず気を配って指導されており、私は陶器について指導という二人三脚。絵つけなど最後の仕上げは私に任されているが、一時間ほどで目がショボショボ。

作陶が終わり病室に戻る患者さんの顔はほころんで「ありがとうございます」の言葉に疲れが吹き飛びます。

四国松山・道後温泉から13kmの砥部町から松山赤十字病院に通っています。400年にわたるやきものなかで、物づくりをくりかえし、たえず新しいものに挑んでいるわけですが、とかく

単調になりがちな作業に、この陶芸教室は新鮮な気持ちを吹き込んでくれ、私の励みにもなります。

病氣と闘っておられるの患者さんは希望を持って頑張ってください。「人間は感動と感激の動物でありたい。その心をたくさん持ち続けて生きていきたい」——陶芸教室に参加して、その思いを一層深く感じてもらえればと希望しております。

## 激震が多くの教訓残してくれた

日本リウマチ友の会兵庫支部長 泉 すが子さん

突如として襲った震度7の阿鼻叫喚の世界、淡路・阪神地帯の街並は一瞬にして崩壊、多くの生命が絶たれました。ずたずたになったライフラインは、難病患者の安否を伺う術もなく、ただひたすら気遣うばかりでした。まず会員の消息・確認に必死で取り組む。難病患者に不可欠な医療の確保と薬剤の供給ルートについては県・市より次々と指示が届いた。また時間が経つにつれ、患者、家族にとって避難所や仮設住まいでの不自由な生活は病状の悪化をもたらすだけでなく、精神的な負担は計りしれないものとなっていました。

2月6日兵庫県と神戸市の県難病連と共に「災害支援センター」を開設、待ち望む被災者の声を受けました。医療、薬、生活、福祉へ、さらに住宅へと相談の多くは緊急を要し、精神的苦痛の相談は日毎に増しました。

支部員対象に500通のアンケート調査をした結果、患者の被害は以下のとおりでした。◇全壊34◇半壊50◇一部損壊97◇全焼1◇死亡1◇ケガ12名。

### “地震教訓”

その1：ブラッと来たらすぐ火を消す。その2：机の下のような所へ身を隠す、その3：常に非常用物資を備蓄しておく

以上は私達が前から言われていた教訓でしたが、実際には今回のような激震に遭った場合、僅かにその3の非常用物資が後から探し出し間に合ったくらいのことでしょうか。地震といえれば関東や東海地方に起こるもの、関西には無縁のものと思っていただけに地震に対する備えや、心掛けもほとんど皆無に等しかったようです。

地震に火災はつきものということは頭のどこかにあったとしても倒壊を免がれた人の中には揺れがおさまった瞬間、電気がつかないのでライターを使い、ガス漏れのことなど全然考えていなかったり、枕元には懐中電灯や携帯ラジオを用意していなかったり等で、阪神大震災は私達に数多くの教訓を残してくれました。

私自身は比較的被害の軽かった裏六甲北区であったものの、食器棚より食器が散乱し、また屋根瓦がずれ、雨もりに困りました。

## 避難所巡回リハで障害者ら介護

兵庫県理学療法士会会長 八木 範彦氏

1月17日未明、突如発生した阪神・淡路大震災は5,500名余りの生命を奪い、家屋の倒壊や火災による消失、交通網の寸断など想像を絶する大災害をもたらし、そして、たいへん多くの人々が避難所生活を余儀なくされました。被災者の中には、もちろん高齢者や障害者も大勢含まれていました。当時、大震災の報道を聞く度に、誰もが何かしなくてはと思ったのではないでしょ

うか。

このような状況下、水野耕作教授（神戸大学医学部整形外科）の呼びかけで、避難所における高齢者・障害者の寝たきり防止のためのボランティア活動「巡回リハビリテーション」が始まりました。活動には兵庫県理学療法士会会員だけでなく、神戸大学医学部整形外科医師、兵庫医大リハビリ科医師、兵庫県作業療法士会会員、日本聴能言語士協会兵庫県支部会員や他府県からの応援者など、総勢540名が参加しました。

活動はまず、支援のための対象者数を把握するために、全避難所を調査することから始めました。その結果、対象者は1,079名と判明し、そのうち44名はリウマチ患者でした。調査時には彼らの情報収集を行い、必要ならば家族を含めてリハ指導や教育を実施しました。具体的には起き上がりや立ち上がりなどの動作指導、トイレや段差解消などの住環境の整備です。また、ADLを獲得するための杖や立ち上がり用支持台なども配布しました。訪問はADLの維持の確認や医療・福祉機関への入院・入所などによって終了しました。しかし、10回以上の訪問も必要とした対象者もみられました。

これらの活動によって、調査開始時にみられた57名の寝たきり者は医療あるいは福祉機関へ連絡を取り、移送することができました。また、活動期間内に新たに寝たきりとなった者がいなかったことから、微力な活動ではありましたが、所期の目的を達成できたのではないかと思います。さらに、活動する中で被災者の皆さんとの会話がいかに重要であるかということも痛感いたしました。

今回の私達の活動に対して、リウマチ福祉特別賞をいただき深く感謝申し上げます。理学療法士として、今後さらに専念努力していきたいと思えます。

## 第7回（平成8年度）

### 励まされて支えられて30年

日本リウマチ友の会岩手支部長 小田嶋 義 幸氏

もう30年経ってしまった。「5月の友の会の全国大会で体験発表してくれませんか」との連絡のあったのは、まだ、雪の残っている3月下旬だった。

私は10年間在宅で寝たきりの生活を送り、たまたま「治るかどうかわからないが入院してみなさい」と言う医師のいる病院で、5回6ヵ所の手術を受け、膝と腰は曲がらないが、夢だった地面に立ち、“固い電柱”が体をよじりながら移動するような歩行だが、機能をとり戻し、家に帰ったばかりだった。

体力的にも、制約された行動条件のハンデキャップからも上京するだけの自信も気力も無かったが、知人の牧師の「行けるところまで行こう」の介助の申し出により承諾した。車窓から眺める景色も、初めてあがった東京タワーも珍しく新鮮だった。翌年、国立身障センターに入所し、いろいろな体験をし、重度の障害者のたくましい生活力を学んだ。わたしの社会復帰の原動力は、この上京の自信が大きな起因となった。したがって、友の会は私の恩人と言っても過言でない。

昭和54年、現岩手医大教授・阿部正隆先生が中心となった岩手支部結成大会には、「岩手にも支部をつくってね」と帰郷のとき言われた事を胸にして喜んで参加し、責任の重さを感じながらも支部長の任を引き受けた。

以来18年間、私が励まされ支えられた友の会の紹介に、また、リウマチの正しい知識の普及、リウマチに悩み苦しむ友の友となり親睦を深め助けあって来た。

年2回の支部報「希望」の発行、年1回の療養医療講演会、賛助会員の先生方のボランティアによる相談会など、「継続は力」をモットーに休まず続けてきた。特に、相談会には毎年100名以上の参加者があり、多くの人びとの療養医療の指針となっている。

日本リウマチ財団の福祉賞は40年間リウマチと共に過ごしてきたお褒めの賞であり、今後への励ましの賞と感謝している。

## リウマチにめげず約半世紀

日本リウマチ友の会元大分県支部長

工藤春士氏

建設会社の自家用車の運転手として平穏な日々を過ごしていた昭和28年4月、両手の指の腫れと痛みでリウマチが始まった。内科開業医、県立病院、国立別府病院、九州大学温泉研究所などを受診、両膝滑膜切除術、右膝人工関節置換術、左右ヘルニア、脱肛などリウマチとその他の疾患により大小13の手術を受けた。幸いそれぞれが成功し、2年半の闘病生活の後31年に職場復帰（事務職）した。

昭和46年3月、日本リウマチ友の会大分県支部発足とともに運転手兼支部長補佐役に転身。初代から3代目の佐藤治男支部長とともに歩んだが、60年1月、佐藤支部長が急逝したので、ピンチヒッターで支部長になった。同年7月、36年間のリウマチとの共存生活ののち、会社を退職。

20年前から始めた朝5時起床、ボランティアで学童登校時の交通安全保護指導をする“みどりのオジさん”を積極的に務め、地域の交通安全協会から表彰された。

平成2年4月、大分県難病連合会設立時に役員選出され、毎月の例会に出席、精勤した。4月5月の日本リウマチ友の会第20回全国大会が別府で開催、九州で初めてのことなので、思い出となった。

以後、体が不調となったので、5年7月の総会で真柄由紀子副支部長にバトンタッチした。しかし3年後、真柄支部長がダウンしてしまったので、再度支部長に就任した。

リウマチ発症43年目の今日、病勢の衰えを幸いとして、支部活動、他団体との連携と奉仕に明け暮れ、7年10月には大分・鹿児島両県難病連の協力により「第3種郵便物認可」を実現させた。

去る5月の日本リウマチ財団福祉奨励賞の受賞は顧問の先生や会員の指導協力の賜物で、身に余る光栄と感謝している。それに報いる方途の一つとして、また自分自身のQOL向上のため右手指2本によるワープロ操作を練習中で、さらに支部のお役に立てればと思っている。

## 5. 国際交流及び関連団体への助成事業

- 1) 第6回 SEAPAL 国際リウマチ学会（昭和63年9月 於 東京全日空ホテル）への助成
- 2) 第17回国際リウマチ学会（平成元年 於 ブラジル）への助成
- 3) APLAR 学会（平成4年 於 インドネシア・平成6年 於 マレーシア）への派遣
- 4) 国際リウマチ関係団体会議（平成3年 於 アメリカ、平成6年 於 デンマーク）への派遣
- 5) その他関連国際会議への派遣
- 6) 日本リウマチ学会、日本リウマチ学会総会への助成（毎年）
- 7) その他国内関学会への助成
- 8) 日本リウマチ友の会への助成（毎年）
- 9) その他関係団体への助成

## 6. 厚生省助成事業

### 平成4年度

#### 1. リウマチのリハビリテーション事業

14施設において1施設30名程度の患者に理学療法等リハビリテーションを実施  
(実行委員)

- 1 斎藤輝信 東北労災病院
- 2 池辺健二 ナトメック七里病院
- 3 林 泰史 東京都リハビリテーション病院
- 4 村澤 章 新潟県立瀬病院リウマチセンター
- 5 村山隆司 金沢リハビリテーション病院
- 6 石原義恕 中伊豆温泉病院
- 7 武仲善孝 七川記念榊原リウマチ病センター
- 8 西岡淳一 滋賀医科大学
- 9 小川亮恵 関西医科大学
- 10 西林保朗 国立加古川病院
- 11 椎野泰明 広島市民病院
- 12 山本純己 松山赤十字病院リウマチセンター
- 13 忽那龍雄 佐賀医科大学
- 14 延永 正 九州大学生体防御医学研究所

#### 2. リウマチのリハビリテーション実地研修会

6地区において医療従事者を対象に実施(医師218人、看護婦251人、保健婦89人、理学療法士278人、作業療法士111人、その他28人、合計975人受講)。

##### 1) 近畿地区

日 時：平成4年12月12日(土) 13:00～17:00  
13日(日) 10:00～15:00

会 場：大阪市 センチュリーホール

実行委員：小川亮恵教授(関西医科大学整形外科)

##### 2) 関東地区

日 時：平成4年12月19日(土) 14:00～17:00  
20日(日) 9:00～17:00

会 場：東京都 リハビリテーション病院

実行委員：林 泰史副院長(東京都リハビリテーション病院)

##### 3) 九州地区

日 時：平成5年1月16日(土) 12:50～17:00  
17日(日) 9:00～12:00

会 場：福岡市 九州大学医学部

実行委員：延永 正教授(九州大学生体防御医学研究所)

##### 4) 中・四国地区

日 時：平成5年1月23日（土）13：00～17：20  
24日（日）9：00～16：00

会 場：松山市 松山赤十字病院

実行委員：山本純己部長（松山赤十字病院リウマチセンター）

#### 5) 東海地区

日 時：平成5年2月6日（土）12：50～17：00  
7日（日）9：00～11：50

会 場：静岡県田方郡・中伊豆温泉病院

実行委員：石原義恕院長（中伊豆温泉病院）

#### 6) 東北地区

日 時：平成5年3月20日（土）13：10～17：00  
21日（日）9：00～12：00

会 場：仙台市 東北大学良陵会館

実行委員：斎藤輝信部長（東北労災病院）

### 平成5年度

#### 1. リウマチのリハビリテーション事業

16施設において1施設30名程度の患者に対し、理学療法等リハビリテーションを実施。

（実行委員）

- 1 斎藤輝信 東北労災病院
- 2 池辺健二 ナトメック七里病院
- 3 林 泰史 東京都リハビリテーション病院
- 4 井上和彦 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター
- 5 村澤 章 新潟県立瀬病院リウマチセンター
- 6 村山隆司 金沢リハビリテーション病院
- 7 石原義恕 中伊豆温泉病院
- 8 武仲善孝 七川記念榊原リウマチ病センター
- 9 西岡淳一 滋賀医科大学
- 10 小川亮恵 関西医科大学
- 11 西林保朗 国立加古川病院
- 12 椎野泰明 広島市民病院
- 13 山本純己 松山赤十字病院リウマチセンター
- 14 忽那龍雄 佐賀医科大学
- 15 延永 正 九州大学生体防御医学研究所
- 16 松田剛正 鹿児島赤十字リウマチ膠原病センター

#### 2. リウマチのリハビリテーション実地研修会

6地区において医療従事者を対象に実施（医師302人、看護婦310人、保健婦152人、理学療法士331人、作業療法士167人、ソーシャルワーカー14人、その他48人、合計1,324人受講）。

##### 1) 関東地区

日 時：平成5年12月4日（土）13：00～17：00

5日(日) 9:30~16:00

会場：東京都 エーザイホール

実行委員：林 泰史副院長（東京都リハビリテーション病院）

2) 近畿地区

日時：平成6年1月15日(土) 13:00~17:00

16日(日) 9:00~16:00

会場：大阪市 千里ライフサイエンスセンター

実行委員：小川亮恵教授（関西医科大学整形外科）

3) 東海地区

日時：平成6年1月29日(土) 12:55~17:00

30日(日) 9:00~15:10

会場：静岡県田方郡・けんぽ長岡

実行委員：石原義恕院長（中伊豆温泉病院）

4) 中・四国地区

日時：平成6年2月5日(土) 12:55~17:20

6日(日) 9:00~15:45

会場：松山市 松山赤十字病院

実行委員：山本純己部長（松山赤十字病院リウマチセンター）

5) 九州地区

日時：平成6年2月19日(土) 13:55~17:10

20日(日) 9:00~15:20

会場：佐賀市 佐賀県医師会メディカルセンター

実行委員：忽那龍雄助教授（佐賀医科大学整形外科）

6) 東北、北陸地区

日時：平成6年3月12日(土) 13:00~17:00

13日(日) 9:00~16:00

会場：新潟市 新潟大学医学部大講堂

実行委員：村澤 章部長（新潟県立瀬波病院）

平成6年度

1. 在宅リウマチ患者リハビリテーションモデル事業

ア 地区において、在宅患者及び家族に対し、家庭でできるリハビリ、介護の実際を指導・相談。

イ 寝たきり患者の調査と訪問リハビリ指導及び退院患者の退院時とのADL評価とリハビリ指導。

(実行委員)

1 斎 藤 輝 信 東北労災病院

2 池 辺 健 二 ナトメック七里病院

3 吉 野 槇 一 日本医科大学第一病院

4 井 上 和 彦 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター

5 村 澤 章 新潟県立瀬波病院リウマチセンター

- 6 村山隆司 金沢リハビリテーション病院
- 7 石原義恕 中伊豆温泉病院
- 8 西岡淳一 滋賀医科大学
- 9 小川亮恵 関西医科大学
- 10 西林保朗 国立加古川病院
- 11 椎野泰明 広島市民病院
- 12 山本純己 松山赤十字病院リウマチセンター
- 13 忽那龍雄 佐賀医科大学
- 14 神宮政男 九州大学生体防御医学研究所
- 15 松田剛正 鹿児島赤十字病院リウマチ膠原病センター

## 2. リウマチのリハビリテーション実地研修会

6地区において医療従事者を対象に実施(医師178人、保健婦109人、看護婦249人、理学療法士244人、作業療法士106人、ソーシャルワーカー12人、その他63人、合計961人受講)。

### 1) 東海地区

日 時：平成7年1月21日(土) 12:55~16:55  
22日(日) 9:30~15:35

会 場：静岡県田方郡・伊豆長岡町総合会館  
実行委員：石原義恕院長(中伊豆温泉病院)

### 2) 九州地区

日 時：平成7年1月28日(土) 12:55~17:00  
29日(日) 9:00~15:40

会 場：鹿児島市立病院  
実行委員：松田剛正副院長(鹿児島赤十字病院)

### 3) 関東地区

日 時：平成7年2月4日(土) 13:25~17:00  
5日(日) 9:00~16:20

会 場：東京都 半蔵門東条会館  
実行委員：井上和彦副所長(東京女子医科大学膠原病リウマチ病風センター)

### 4) 中・四国地区

日 時：平成7年2月18日(土) 12:55~17:20  
19日(日) 9:00~15:45

会 場：広島市 社会保険広島市民病院  
実行委員：山本純己部長(松山赤十字病院リウマチセンター)

### 5) 東北地区

日 時：平成7年3月11日(土) 13:00~16:40  
12日(日) 9:00~15:15

会 場：仙台市 斎藤報恩会館  
実行委員：斎藤輝信部長(東北労災病院)

### 6) 近畿地区

日 時：平成7年3月18日（土）13：00～18：00

19日（日）9：00～13：00

会 場：姫路市 勤労市民会館

実行委員：西林保朗副院長（国立加古川病院）

## 平成7年度

### 1. 在宅リウマチ患者ケアモデル事業

32地区において、在宅患者及び家族に対し、家庭でできるリハビリ、介護の実際等を指導・相談。

（実行委員）

- 1 北海道 種 市 幸 二 北見赤十字病院内科
- 2 岩 手 前 川 宗一郎 国立療養所盛岡病院膠原病リウマチセンター内科
- 3 福 島 千 葉 勝 実 福島県立リハビリテーション飯坂温泉病院整形外科
- 4 群 馬 磯 武 信 前橋赤十字病院リウマチ膠原病センター整形外科
- 5 千 葉 土 田 豊 実 千葉大学医学部整形外科
- 6 東 京 井 上 和 彦 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター整形外科
- 7 新 潟 村 澤 章 新潟県立瀬波病院リウマチセンター
- 8 石 川 村 山 隆 司 金沢リハビリテーション病院リウマチ膠原病センター
- 9 静 岡 石 原 義 恕 中伊豆温泉病院リウマチセンター
- 10 三 重 細 井 哲 山田赤十字病院整形外科
- 11 滋 賀 西 岡 淳 一 滋賀医科大学整形外科
- 12 兵 庫 西 林 保 朗 国立加古川病院整形外科
- 13 山 口 河 合 伸 也 山口大学医学部整形外科
- 14 愛 媛 山 本 純 己 松山赤十字病院リウマチセンター
- 15 高 知 西 谷 皓 次 高知医科大学第二内科
- 16 福 岡 近 藤 正 一 国立病院九州医療センター整形外科リウマチセンター
- 17 大 分 神 宮 政 男 九州大学生体防御医学研究所リウマチ臨床免疫科
- 18 鹿 児 島 松 田 剛 正 鹿児島赤十字病院リウマチ膠原病センター

### 2. リウマチのリハビリテーション（ケア）実地研修会

6地区において医療従事者を対象に実施（医師171人、薬剤師52人、保健婦99人、看護婦414人、理学療法士218人、作業療法士106人、ソーシャルワーカー11人、ヘルパー22人、その他164人、合計1,257人受講）。

#### 1) 関東地区

日 時：平成8年1月13日（土）13：00～18：00

14日（日）9：10～16：40

会 場：千葉市 海外職業訓練協力センター

実行委員：土田豊実先生（千葉大学整形外科）

#### 2) 北陸・東海地区

日 時：平成8年1月27日（土）13：00～16：50

28日（日）9：00～15：00

会 場：金沢市 駅西保健所

実行委員：村山隆司副院長（金沢リハビリテーション病院）

3) 東北地区

日 時：平成8年2月3日（土）15：00～18：00

4日（日）9：05～16：40

会 場：福島市 福島テルサ

実行委員：千葉勝実先生（福島県立リハビリテーション飯坂温泉病院）

4) 九州地区

日 時：平成8年2月10日（土）13：00～16：50

11日（日）9：00～16：05

会 場：長崎大学医学部記念講堂

実行委員：江口勝美助教授（長崎大学第一内科）

5) 中・四国地区

日 時：平成8年2月17日（土）13：00～17：10

18日（日）9：00～15：05

会 場：山口市 山口県セミナーパーク

実行委員：河合伸也教授（山口大学整形外科）

6) 近畿地区

日 時：平成8年3月9日（土）13：00～17：00

会 場：京都市 京都府総合社会福祉会館

実行委員：西岡淳一助教授（滋賀医科大学整形外科）

## 平成8年度

### 1. リウマチのトータルケアモデル事業

- 1) 在宅リウマチ患者及び家族に対するリウマチケア教室の開催
- 2) 医療、福祉従事者によるリウマチのケアフォーラムの開催
- 3) 医療、福祉従事者に対するリウマチのケア研修会の開催

#### (1) 在宅リウマチ患者ケア教室事業

30施設において在宅患者及び家族に対し、リウマチ知識、家庭でできるリハビリ及びケアに関する指導、相談。

（実行委員）

- 1 北海道 種 市 幸 二 北見赤十字病院内科
- 2 岩 手 前 川 宗一郎 国立療養所盛岡病院膠原病リウマチセンター内科
- 3 福 島 千 葉 勝 実 県立リハビリテーション飯坂温泉病院整形外科
- 4 群 馬 磯 武 信 前橋赤十字病院リウマチ膠原病センター整形外科
- 5 千 葉 土 田 豊 実 千葉大学医学部整形外科
- 6 東 京 井 上 和 彦 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター
- 7 新 潟 村 澤 章 県立瀬波病院リウマチセンター
- 8 石 川 村 山 隆 司 金沢リハビリテーション病院リウマチ膠原病センター
- 9 山 梨 赤 松 功 也 山梨医科大学整形外科

- |    |     |    |      |                     |
|----|-----|----|------|---------------------|
| 10 | 静岡  | 石原 | 義  恕 | 中伊豆温泉病院リウマチセンター     |
| 11 | 三重  | 細井 | 哲    | 山田赤十字病院整形外科         |
| 12 | 滋賀  | 西岡 | 淳  一 | 滋賀医科大学整形外科          |
| 13 | 兵庫  | 西林 | 保  朗 | 国立加古川病院整形外科         |
| 14 | 島根  | 恒松 | 徳五郎  | 県立看護短期大学            |
| 15 | 山口  | 河合 | 伸  也 | 山口大学医学部整形外科         |
| 16 | 愛媛  | 山本 | 純  己 | 松山赤十字病院リウマチセンター     |
| 17 | 高知  | 西谷 | 皓  次 | 高知医科大学第二内科          |
| 18 | 長崎  | 田口 | 厚    | 日本赤十字社長崎原爆病院整形外科    |
| 19 | 鹿児島 | 松田 | 剛  正 | 鹿児島赤十字病院リウマチ膠原病センター |

(2) リウマチケアフォーラム事業

医療、福祉に従事する者によるリウマチケアフォーラムを開催。

(実行委員)

- |   |    |    |      |             |
|---|----|----|------|-------------|
| 1 | 群馬 | 磯  | 武  信 | 前橋赤十字病院     |
| 2 | 千葉 | 土田 | 豊  実 | 千葉大学医学部整形外科 |
| 3 | 島根 | 恒松 | 徳五郎  | 県立看護短期大学    |
| 4 | 山口 | 河合 | 伸  也 | 山口大学医学部整形外科 |
| 5 | 高知 | 西谷 | 皓  次 | 高知医科大学第二内科  |

(3) リウマチのリハビリテーション（ケア）研修会

6地区において医療従事者等を対象に実施

1) 中・四国地区

日 時：平成9年1月18日（土）13：00～17：00

19日（日）9：05～16：00

会 場：岡山大学医学部臨床第一講議室

実行委員：井上 一教授（岡山大学整形外科）

2) 九州地区

日 時：平成9年2月8日（土）13：00～17：10

9日（日）9：15～16：50

会 場：熊本県立劇場

実行委員：木村千仞所長（熊本機能病院 リウマチ膠原病センター）

3) 東海・北陸地区

日 時：平成9年2月15日（土）12：50～17：00

16日（日）9：00～15：40

会 場：名古屋市立大学大ホール

実行委員：松井宣夫教授（名古屋市立大学整形外科）

4) 関東地区

日 時：平成9年2月22日（土）13：00～17：00

23日（日）9：00～17：10

会 場：横浜市総合リハビリテーションセンター

実行委員：腰野富久教授（横浜市立大学整形外科）

5) 近畿地区

日 時：平成9年3月1日（土）14：00～17：00  
2日（日）9：00～16：00

会 場：コミュニティプラザ大阪

実行委員：越智隆弘教授（大阪大学整形外科）

6) 北海道・東北地区

日 時：平成9年3月15日（土）13：00～17：00  
16日（日）9：00～15：00

会 場：北海道大学学術交流会館

実行委員：小池隆夫教授（北海道大学第二内科）



# 資 料



## 役員

(平成9年1月1日現在)

理事長	塩川優一	順天堂大学名誉教授
副理事長	七川敏次	滋賀医科大学名誉教授
	本間光夫	慶応義塾大学名誉教授
専務理事	田中治彦	財団法人日本リウマチ財団
理事	石丸隆治	財団法人ヒューマンサイエンス振興財団理事長
	京極方久	東北大学名誉教授
	幸田正孝	年金福祉事業団理事長
	斎藤十朗	参議院議員
	島田廣子	社団法人日本リウマチ友の会初代理事長
	角田泰造	女子美術大学名誉教授
	土井たか子	衆議院議員
	西岡久寿樹	聖マリアンナ医科大学教授
	延永正	九州大学名誉教授
	廣畑和志	神戸大学名誉教授
	水島裕	聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター長
	八木哲夫	財団法人厚生年金事業振興団理事長
監事	鈴田達男	東京医科大学名誉教授
	御巫清允	自治医科大学名誉教授
	宮本昭正	東京大学名誉教授
顧問	大島良雄	埼玉医科大学名誉教授
	佐々木智也	東京大学名誉教授

## 設立当初 役員

(昭和62年11月現在)

理事長	塩川 優一	順天堂大学名誉教授
副理事長	七川 歆次	滋賀医科大学名誉教授
専務理事	林 崇	財団法人日本リウマチ財団
理事	石丸 隆治	財団法人ヒューマンサイエンス振興財団専務理事
	大熊 由起子	朝日新聞社論説委員
	京 極 方久	東北大学医学部教授
	佐々木 智也	東京大学名誉教授・杏雲堂病院院長
	斎藤 十朗	参議院議員
	島田 廣子	社団法人日本リウマチ友の会理事長
	角田 泰造	女子美術大学教授
	坪井 東	三井不動産株式会社社長
	土井 たか子	衆議院議員
	延永 正	九州大学生体防御医学研究所教授
	濱島 義博	京都大学名誉教授
	橋本 龍太郎	衆議院議員
	広畑 和志	神戸大学医学部教授
	本間 光夫	慶応大学医学部教授
	八木 哲夫	年金福祉事業団理事長
	山本 真	北里大学医学部教授
	吉岡 守正	東京女子医科大学学長
監事	鈴田 達男	東京医科大学教授
	御巫 清允	東京女子医科大学教授
	宮本 昭正	東京大学医学部教授
顧問	天児 民和	九州大学名誉教授
	石田 博英	前衆議院議員
	大島 良雄	東京大学名誉教授

## 評 議 員

(平成9年1月1日現在)

東 威	聖マリアンナ医科大学客員教授
安 倍 達	埼玉医科大学教授
石 川 浩一郎	石川整形外科リウマチ科院長
井 上 哲 文	東京大学講師
上 原 昭 二	大正製薬株式会社代表取締役会長
大 国 真 彦	日本大学名誉教授
大 澤 昭 夫	日本チバガイギー株式会社常務取締役
大 塚 明 彦	大塚製薬株式会社代表取締役社長
越 智 隆 弘	大阪大学教授
柏 崎 禎 夫	東京女子医科大学教授
粕 川 禮 司	福島県立医科大学教授
狩 野 庄 吾	自治医科大学教授
河 村 喜 典	三共株式会社取締役社長
小 坂 志 朗	青森リウマチセンター長
腰 野 富 久	横浜市立大学教授
小松原 良 雄	行岡医学研究会行岡病院リウマチ研究室室長
塩 野 芳 彦	塩野義製薬株式会社代表取締役社長
鈴 木 正	第一製薬株式会社代表取締役社長
田 中 清 介	近畿大学教授
谷 口 準	ファイザー製薬株式会社取締役社長
恒 松 徳五郎	島根県立看護短期大学長
長 屋 郁 郎	財団法人愛知糖尿病リウマチ痛風財団理事長
廣 瀬 俊 一	順天堂大学医学部附属順天堂伊豆長岡病院院長
藤 澤 友吉郎	藤沢薬品工業株式会社代表取締役会長
松 井 宣 夫	名古屋市立大学教授
森 田 桂	武田薬品工業株式会社代表取締役社長
山 本 純 己	松山赤十字病院リウマチセンター部長
吉 田 彪	中外製薬株式会社取締役
吉 野 榎 一	日本医科大学教授

## 専 門 委 員

斎藤輝信	東北労災病院リウマチ膠原病科 部長
渡辺言夫	杏林大学名誉教授
橋本博史	順天堂大学医学部膠原病内科 教授
細田泰弘	慶應義塾大学教授
奥村康	順天堂大学教授
菅原幸子	東京女子医科大学教授
市川陽一	聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター教授
岡本連三	横浜市立大学助教授
中村徹	福井医科大学名誉教授
橋本明	国立伊東温泉病院名誉院長
青木重久	愛知医科大学教授
鳥飼勝隆	藤田保健衛生大学教授
丹羽滋郎	愛知医科大学教授
岩田久	名古屋大学教授
福田眞輔	滋賀医科大学教授
小川亮恵	関西医科大学教授
石川齊	神戸大学教授
居村茂明	国立加古川病院院長
山本吉蔵	鳥取大学教授
山内康平	島根医科大学講師
井上一	岡山大学教授
太田善介	岡山大学名誉教授
山名征三	東広島記念病院院長
河合伸也	山口大学教授
柴田大法	愛媛大学教授
野本亀久雄	九州大学生体防御医学研究所教授
長澤浩平	佐賀医科大学教授
長瀧重信	長崎大学教授
木村千仞	熊本機能病院リウマチ・膠原病センター所長
鳥巢岳彦	大分医科大学助教授
酒匂崇	鹿児島大学教授

## 賛 助 会 員

平成9年1月1日現在

### (法人)

愛知電子工業株式会社	鳥居薬品株式会社
旭化成工業株式会社	日研化学株式会社
エーザイ株式会社	日本ウェルカム株式会社
エスエス製薬株式会社	日本化薬株式会社
大塚製薬株式会社	日本ケミファ株式会社
株式会社大塚製薬工場	株式会社日本抗体研究所
科研製薬株式会社	日本新薬株式会社
キッセイ薬品工業株式会社	日本チバガイギー株式会社
協和発酵工業株式会社	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
グレラン製薬株式会社	日本モンサント株式会社
興和株式会社	日本ルセル株式会社
三共株式会社	日本レダリー株式会社
参天製薬株式会社	日本ロシュ株式会社
サンド薬品株式会社	日本ワイス株式会社
塩野義製薬株式会社	萬有製薬株式会社
株式会社ジャパンエナジー	久光製薬株式会社
スミスクライン・ピーチャム製薬株式会社	ファイザー製薬株式会社
住友製薬株式会社	ファルマシア・アップジョン株式会社
生化学工業株式会社	藤沢薬品工業株式会社
ゼリア新薬工業株式会社	富士レビオ株式会社
第一製薬株式会社	北陸製薬株式会社
大正製薬株式会社	マルホ株式会社
大鵬薬品工業株式会社	株式会社ミドリ十字
武田薬品工業株式会社	明治製菓株式会社
田辺製薬株式会社	持田製薬株式会社
中外製薬株式会社	山之内製薬株式会社
帝国臓器製薬株式会社	吉富製薬株式会社
帝人株式会社	ルセル森下株式会社
富山化学工業株式会社	

(個人)

佐倉 弥生	京都市伏見区	百崎 末雄	熊本県芦北郡
藤本 照子	東京都小金井市	亀田 貞彦	茨城県水戸市
福地 正行	静岡県小笠郡	大田 富士子	北九州市戸畑区
勝木 道夫	石川県小松市	尾崎 末子	大阪府岸和田市
吉田 澄子	兵庫県川西市	小林 甲光	愛媛県伊予市
近藤 育夫	三重県松坂市	旦尾 良子	東京都世田谷区
菊地 明美	福井県三方郡	西橋 アイ	熊本県八代市
京屋 千代子	大阪市西城区	寺田 琴子	東京都文京区
古本 正勝	神戸市東灘区	相良 正信	山口県熊毛郡
田中 喜美栄	東京都八王子市	上村 幸子	神戸市垂水区
寺山 忍み	東京都世田谷区	石川 和子	東京都台東区
河村 眞澄	東京都文京区	武信 英雄	東京都三鷹市
湯川 英典	東京都文京区	五十嵐 猪之助	京都市左京区
木下 政子	埼玉県大宮市	上田 清恵	徳島県板野郡
高崎 三男	大分県大分市	中島 祐子	東京都秋川市
中崎 聡	石川県金沢市	泉 公子	沖縄県那覇市
村山 隆司	石川県金沢市	熊沢 志郎	千葉県流山市
山内 伸子	大阪府大阪狭山市	増田 リエ	埼玉県入間郡
渡瀬 八重子	和歌山県橋本市	佐藤 倫子	岩手県盛岡市
内村 暢二郎	鹿児島県鹿児島市	赤田 ふさ	滋賀県大津市
橘 とし子	千葉県市原市	鯨坂 千代子	福岡市早良区
小林 すゑ子	愛知県豊橋市	佐藤 キシ子	埼玉県大宮市
富田 浩子	兵庫県芦屋市	山田 孝子	埼玉県北葛飾郡
林 房江	東京都渋谷区	奥野 敦子	大阪府吹田市
的場 光子	大阪府泉佐野市	山名 征三	広島県東広島市
杉谷 昭人	宮崎県宮崎市	神戸 ちどり	神奈川県相模原市
田村 和子	新潟県新津市	中沢 修子	東京都三鷹市
高桑 紀代子	静岡県清水市	森崎 寿子	熊本県益城郡
山家 杲	北九州市小倉北区	小幡 美栄	千葉県市川市
吉岡 富一	福岡県大野城市	江面 さと子	東京都世田谷区
藤沢 味代子	東京都世田谷区	渡辺 すみえ	福岡市城南区
梅津 二郎	三重県名張市	渡辺 松美	千葉県浦安市

日本リウマチ財団  
財団設立10年の事業実績

平成 9 年 3 月

---

財団法人 日本リウマチ財団

〒170 東京都豊島区南大塚2-39-7  
ヤマモト大塚ビル 5階  
TEL 03-3946-3551  
FAX 03-3946-7500

